

14. 6二-245



14.6₂

45



始



28. 8. 5

調査報告第三十號

昭和七年七月刊行



西埼玉強震報告



埼玉縣熊谷測候所

昭和六年九月二十一日午前十一時二十分過ぎ本縣下に強震起り大地俄かに震動し不幸一朝にして多數の人命をも隕とし百余萬圓の財寶を損したり

源頼朝の鎌倉の地に幕府を開きてより武藏國に被害を惹起したりし所謂大地震の記録は頗る多數に上ぼり實に壹百余回を算し最近にては過ぐる大正十二年九月の關東大震最も激し今又この強震記録を追加せざるべからざるは本縣にとりて頗る不幸事と云ふべし今茲に當所這般の事情の蒐集し調査漸く成り梓に上ぼし以て斯學研究及篤學の士の參考に供し且つ世人公衆に對しては轉禍爲福の一助ともなしこの事實を永く後世に傳へんとするものなり

本調査を完成するに當り中央氣象臺各地方測候所縣農務課保安課町村役場小學校管内氣象觀測所其の他より貴重なる資料の提供貸與を受けたり茲に謹みて前記諸官衙學校等の長官及關係各位に對し謝意を表す

昭和六年十二月

埼玉縣熊谷測候所長 大地 四郎

14.6-245

14.6-245

目次

口 繪

- 一、主震記象圖
- 二、等發震時線及餘震回数圖
- 三、西埼玉強震の震度分布圖（驗震時報國富技師に據る）
- 四、西埼玉強震に於ける地鳴聽取區域及初動方向分布圖（同上）
- 五、西埼玉強震踏査報告（本多、岡）及（加藤岡川本）附圖自第一圖至第廿三圖（驗震時報に據る）
- 六、熊谷町に於ける震災狀況（市川）附圖自第廿四圖至第三十二圖
- 七、大里郡深谷町、藤澤村、大寄村、震災踏査報告（伊丹、石井）附圖自第三十三圖至第三十六圖
- 八、大里、秩父兩郡下の震災踏査報告（市川、伊丹）附圖自第三十七圖至第四十圖
- 九、熊谷町より妻沼町に到り及利根川沿岸の震域踏査報告（植野、石井）附圖自第四十一圖至第四十五圖
- 十、北足立郡吹上村震害踏査報告（大地、市川、内田）附圖自第四十六圖至第五十二圖
- 十一、北足立郡吹上村震災地踏査報告（内田）第五十三圖及第五十四圖
- 十二、比企郡松山町方面震災踏査報告（市川）第五十五圖及第五十六圖
- 十三、熊谷町より小川町に到る震災狀況踏査報告（吉本）第五十七圖及第五十八圖

- 十四、縣北西部利根川南縁震害踏査報告(川本)第五十九圖及第六十圖
- 十五、比企郡大河村南城山の龜裂及腰越の陥没地踏査報告(大地、植野)第六十一圖及第六十二圖
- 十六、比企郡岩殿山震災踏査報告(市川、内田)自第六十三圖至第六十六圖
- 十七、南埼玉郡菖蒲町新堀地内見沼用水路堰枠の震害及路面龜裂圖(埼玉縣農林主事佐野文吾氏に據る)

報 文

西埼玉強震報告

埼玉縣熊谷測候所 一四六

内 容

- 管内氣象觀測所よりの地震報告 (一) 縣下の被害 (五)
- 各警察署管下被害一覽表 (七) 餘震の經過 (三)
- 石塔籠、墓石等の倒壊方向 (三七) 地盤龜裂の方向 (三九)
- 井水の混濁 (三一) 土砂の噴出 (三一)
- 縣下の倒壊家屋に就いて (三九) 縣下の震度分布 (四〇)
- 震央地及震源の深さ (四二) 發震機構 (四三)
- 過去の記録 (四四) 明治以後死者十六名以上ありし地震(四七)

踏査報告

- 西埼玉強震地域踏査報告(驗震時報に據る) (氣象臺技手 本多 弘吉 四一五)
- 同 右(同) 右 (氣象臺技手 本多 弘吉 三二四)
- 西埼玉強震地域踏査報告(同) (氣象臺技手 岡 四四亥 五一七)
- 熊谷町に於ける震災狀況 (熊谷町測候技手 市川 德一 五九六)
- 秩父町附近被害狀況 (秩父町測候技手 植野 隆壽 六)
- 大里郡下深谷町、藤澤村、大寄村震災地踏査報告 (大里郡測候技手 伊丹 喜逸 六一七)
- 大里、秩父兩郡下の震災地踏査報告 (大里郡測候技手 伊丹 喜逸 六一七)
- 熊谷町より妻沼町に到り及利根川沿岸の震域踏査報告 (熊谷町測候技手 植野 隆壽 七一七)
- 北足立郡吹上村震害地踏査報告 (北足立郡測候技手 石井 德治 七一七)
- 北足立郡吹上村震害地踏査報告 (北足立郡測候技手 市川 德一 七一七)
- 北足立郡吹上村震災地踏査報告 (北足立郡測候技手 内田 正作 八一七)
- 縣北西部本庄町、兒玉町附近震災地踏査報告 (縣北西部測候技手 大地 四七 八一七)
- 比企郡松山町方面震災地踏査報告 (比企郡測候技手 川本 彌七 八一七)
- 熊谷町より小川町に到る震災狀況踏査報告 (熊谷町測候技手 吉本 九平 六一七)
- 縣北西部利根川南縁震害踏査報告 (縣北西部測候技手 川本 彌七 六一七)
- 比企郡大河村南城山の龜裂及腰越の陥没地踏査報告 (比企郡測候技手 大地 四七 六一七)

秩父郡太田村地内八人峠の地入り地踏査報告
 比企郡岩殿山震災踏査報告

地震験測表

各地測候所に於ける西埼玉強震の記象験測表竝に走時曲線圖

(験震時報鷲坂、石川、岡氣象臺技手に據る)

各地震度表

(氣象要覽に據る)

九月廿一日西埼玉強震の餘震験測表

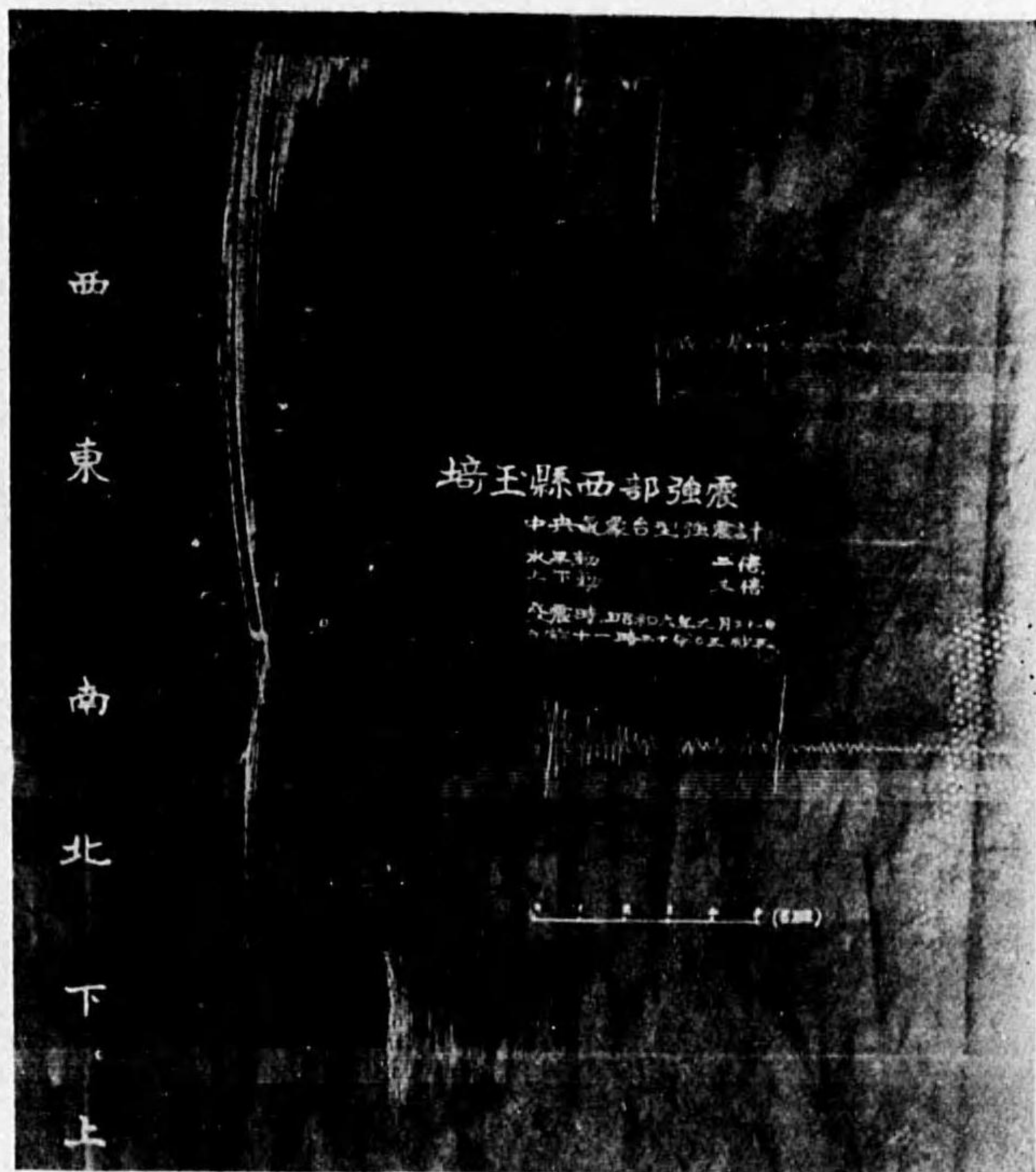
(熊谷)

埼玉縣測候技手 川本 彌七 104-106
 同埼玉縣測候技手 市川 徳一 107-110
 内田 正作

二二二七

二八二九

三三三三



中央氣象台型強震計記象

倍率 2 動平水
 倍率 3 動下上



(影撮りよ西南西) 潰倒の籠燈石・居鳥社神岩愛水清宇村忍下 圖一第



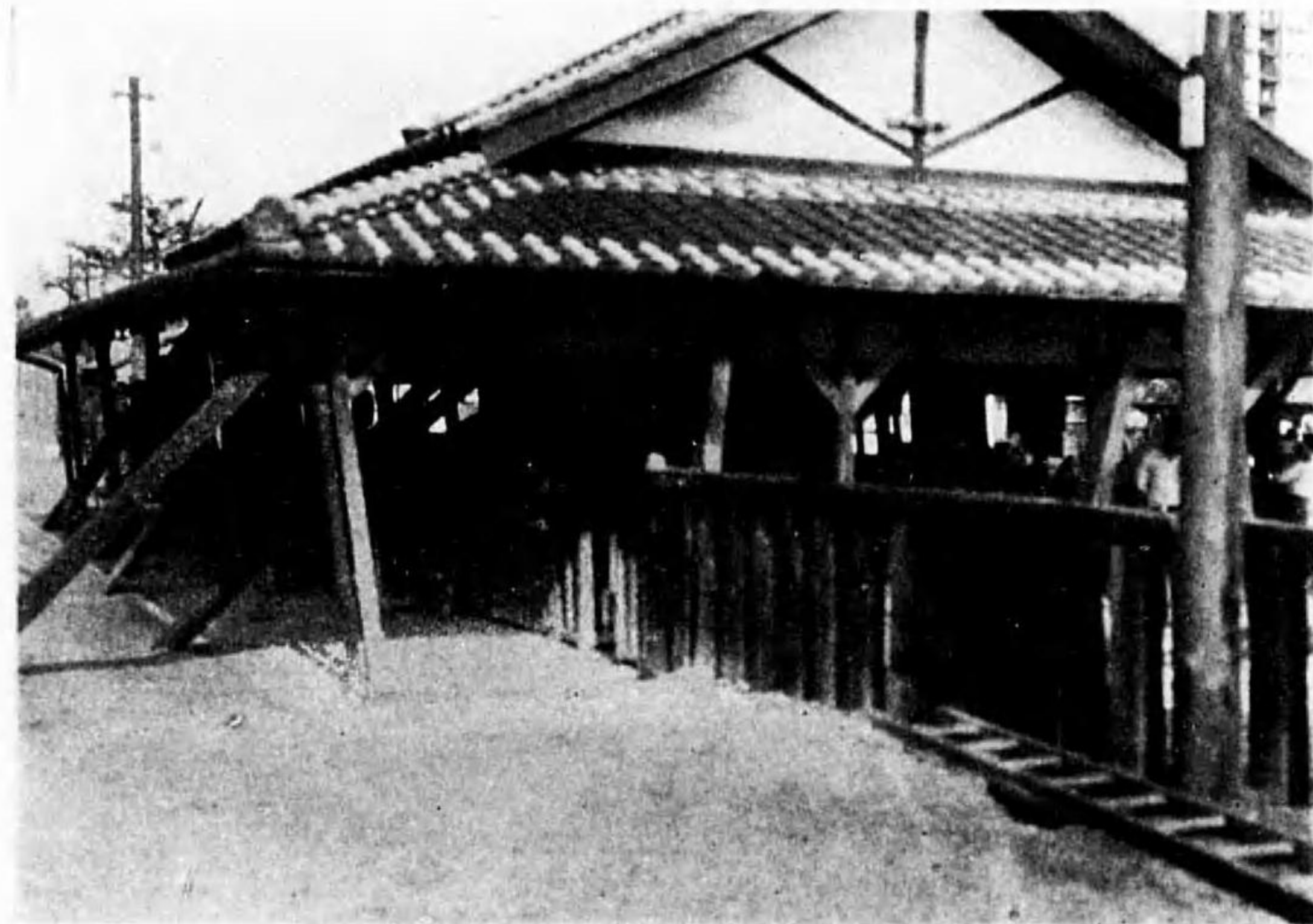
(影撮りよ東北) 柱門の場役村林小 圖二第



（影撮りよ西北）（る倒に南）門山寺福妙村林小 圖三第



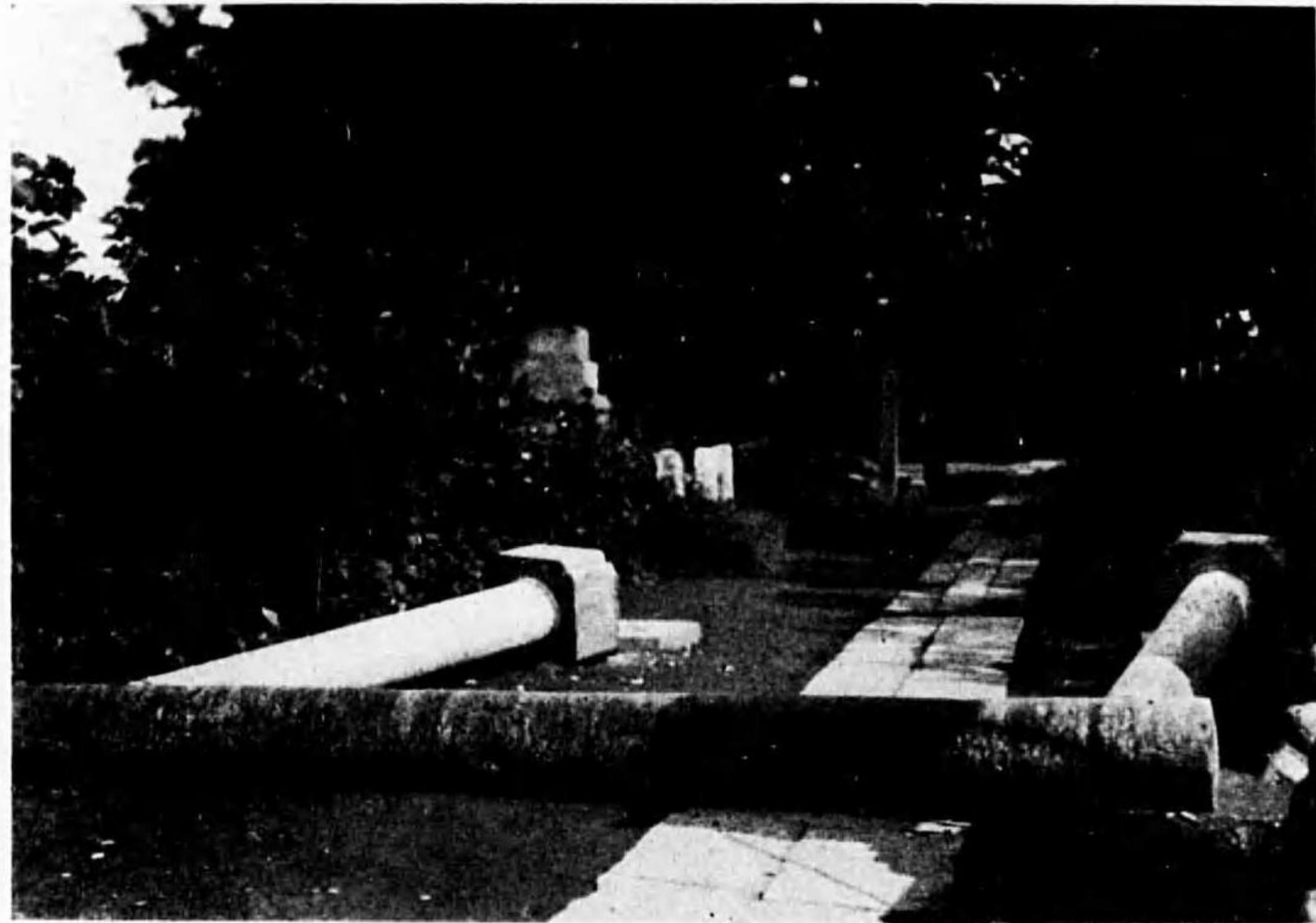
（影撮りよ東北）（る倒に南）塔石前門山上同 圖四第



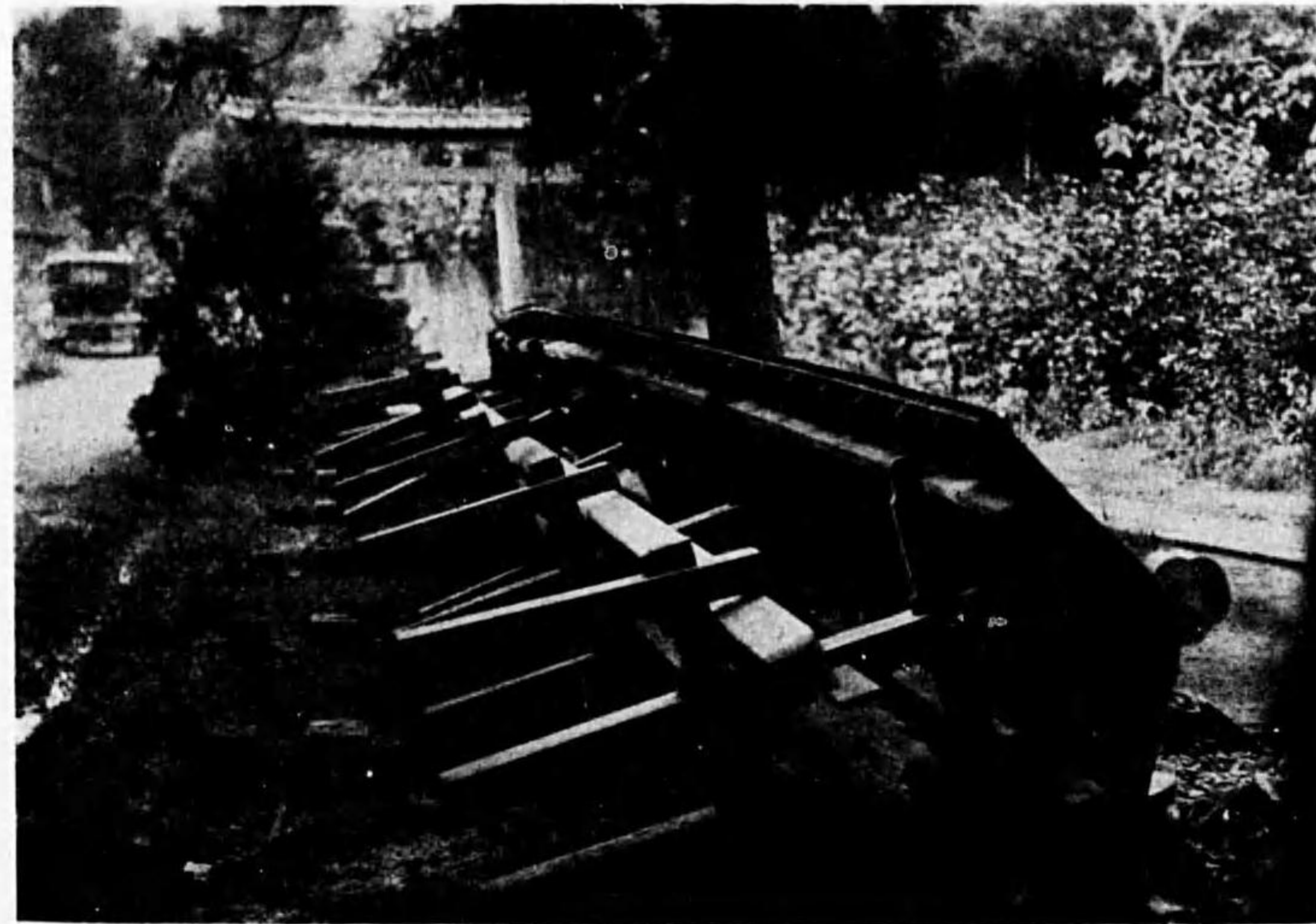
(影撮りよ東) 驛上吹線崎高るけ傾余度五十に南 圖五第



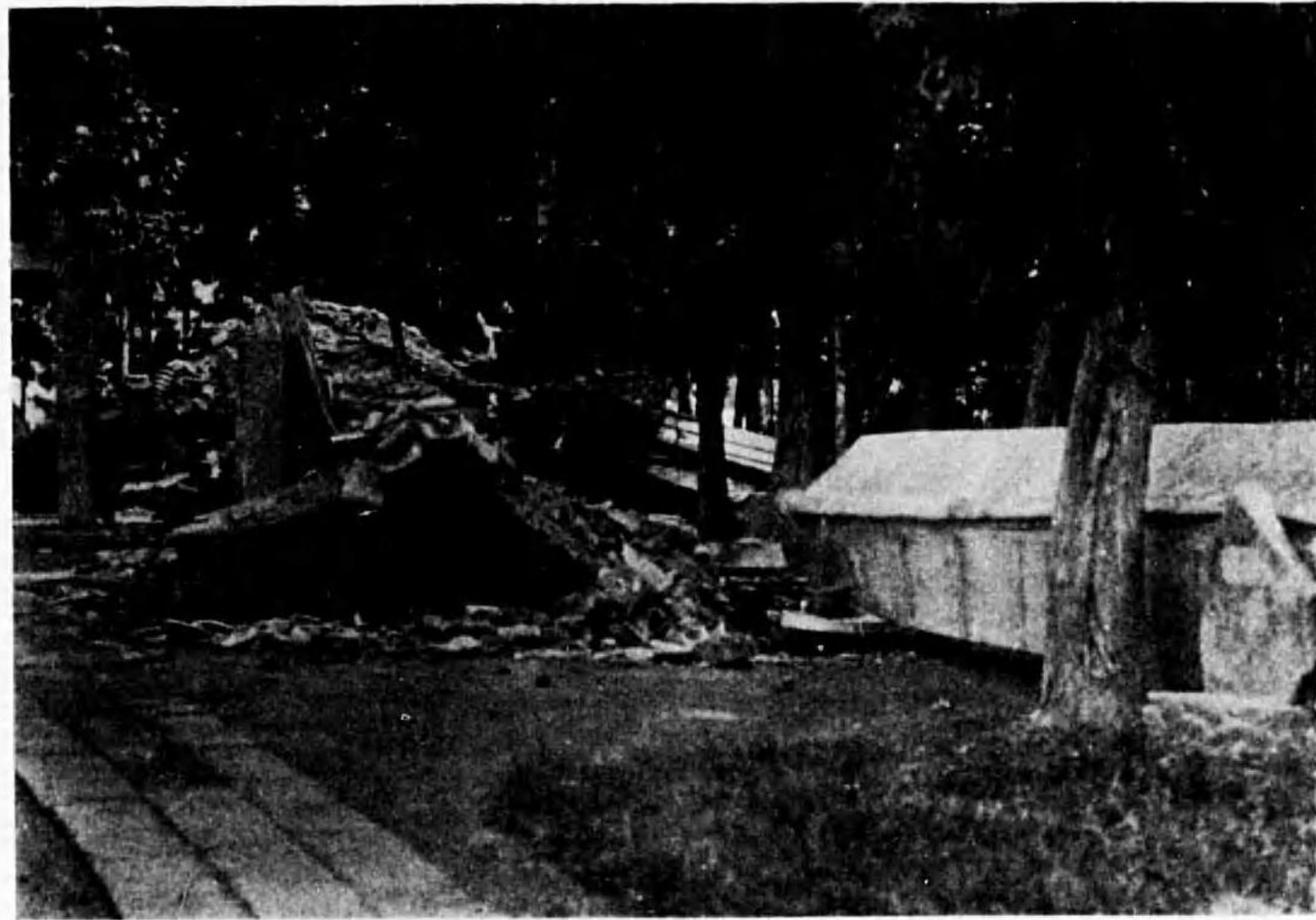
(影撮りよ東々北) (館旅屋湊上吹字村上吹)若崩の壁藏土 圖六第



(影撮りよ南) る倒に南居鳥の社神川来芦大字村上吹 圖七第



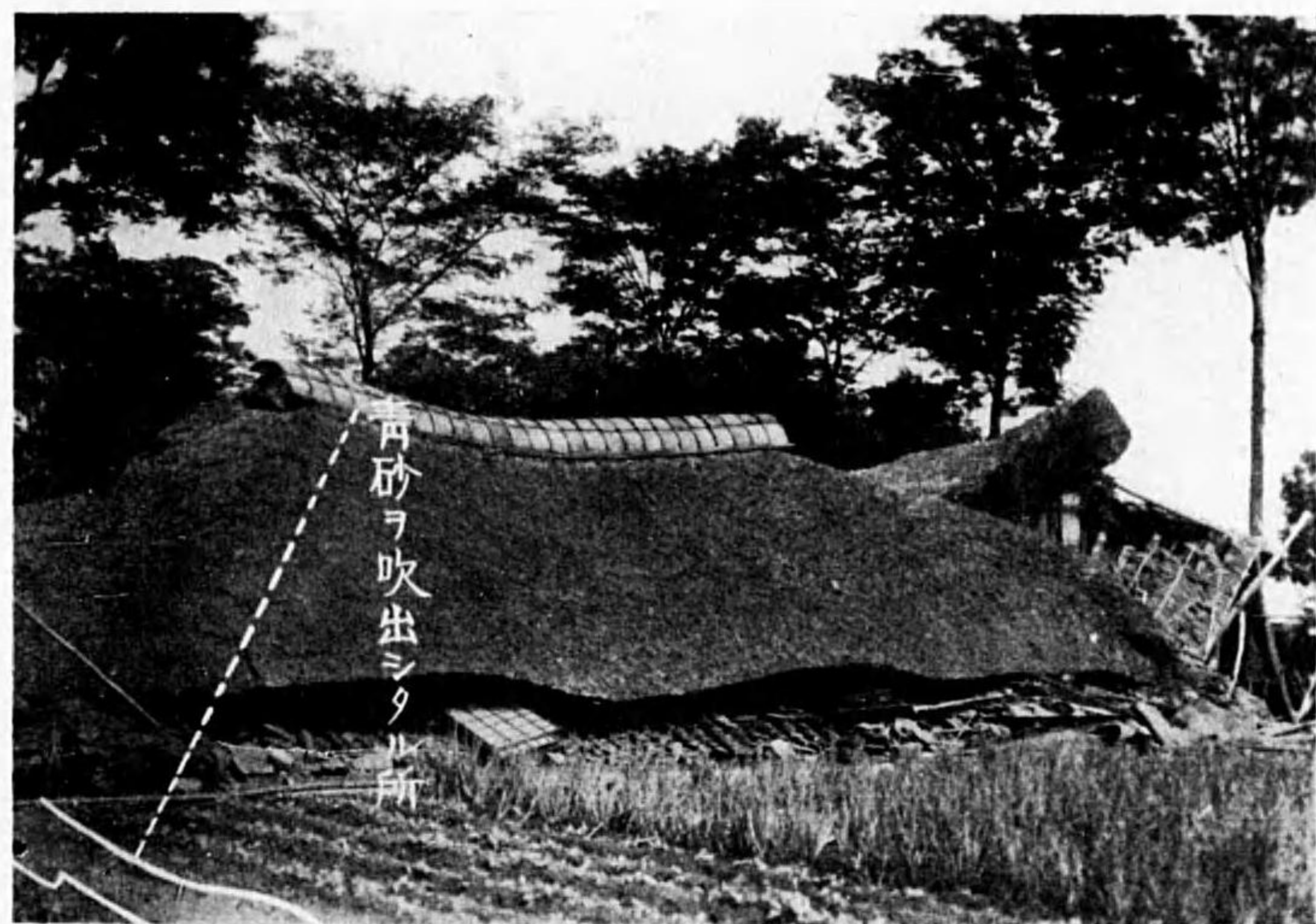
(影撮りよ方北) る倒に西所管保竿旗上同 圖八第



(る撮りよ南)る倒に西々南所務々社神川氷芦大字村上吹 圖九第



(る撮りよ東北)る倒に東南殿樂神社神川氷芦大字村上吹 圖十第



(影撮りよ西南) 屋家潰倒芦大字村上吹 圖一十第



(影撮りよ南) 上 同 圖二十第



(る撮りよ西々南 屋家潰倒芦大宇村上吹 圖三十第)



(る撮りよ西々南) 上 同 圖四十第



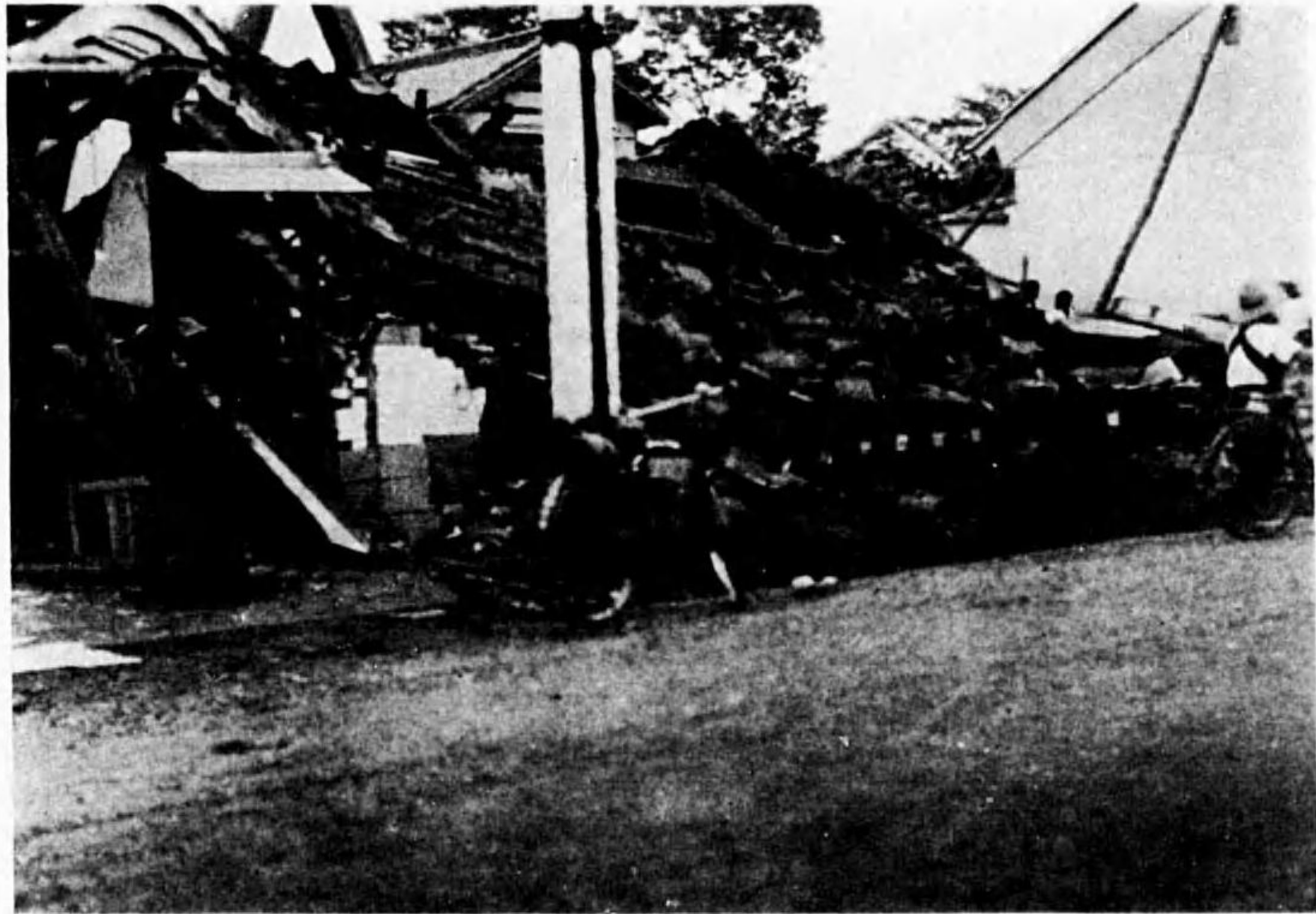
（影撮りよ東北）る倒に北籠燈石社神上吹 圖五十第



第十六圖 吹上村東曜寺境内の龜裂(北東—南西) (南西より撮影)



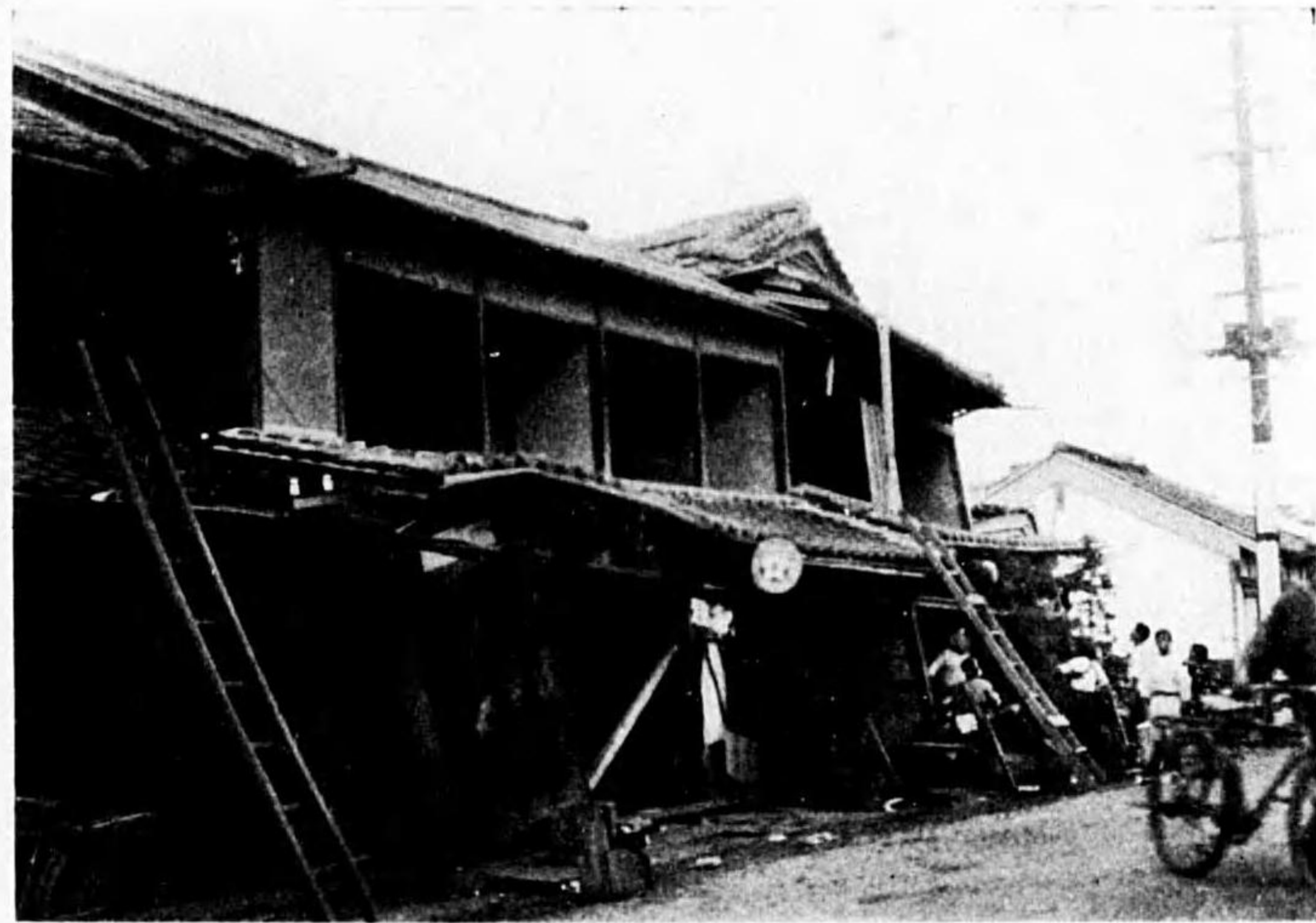
第十七圖 同寺墓石(北に倒る) (東より撮影)



(る撮りよ西南) 屋家潰倒の町谷深 圖八十第



(る撮りよ西北) (名一者死) 上 同 圖九十第



(りよ西) 屋家潰倒の町谷深 圖十二第



(影撮りよ西北) 害被の町谷深 圖一十二第



第三十二圖

深谷町富國館(紡績工場)煙突(高さ百二十尺)上部四分ノ一位より折れ北西に落下(即死三名重傷一名)(東より撮影)



以上加藤技手撮影

(る撮りよ東南) 害被の町谷熊 圖三十二第

圖四十二第



害被るけけにり通町場筑町谷熊

圖五十二第



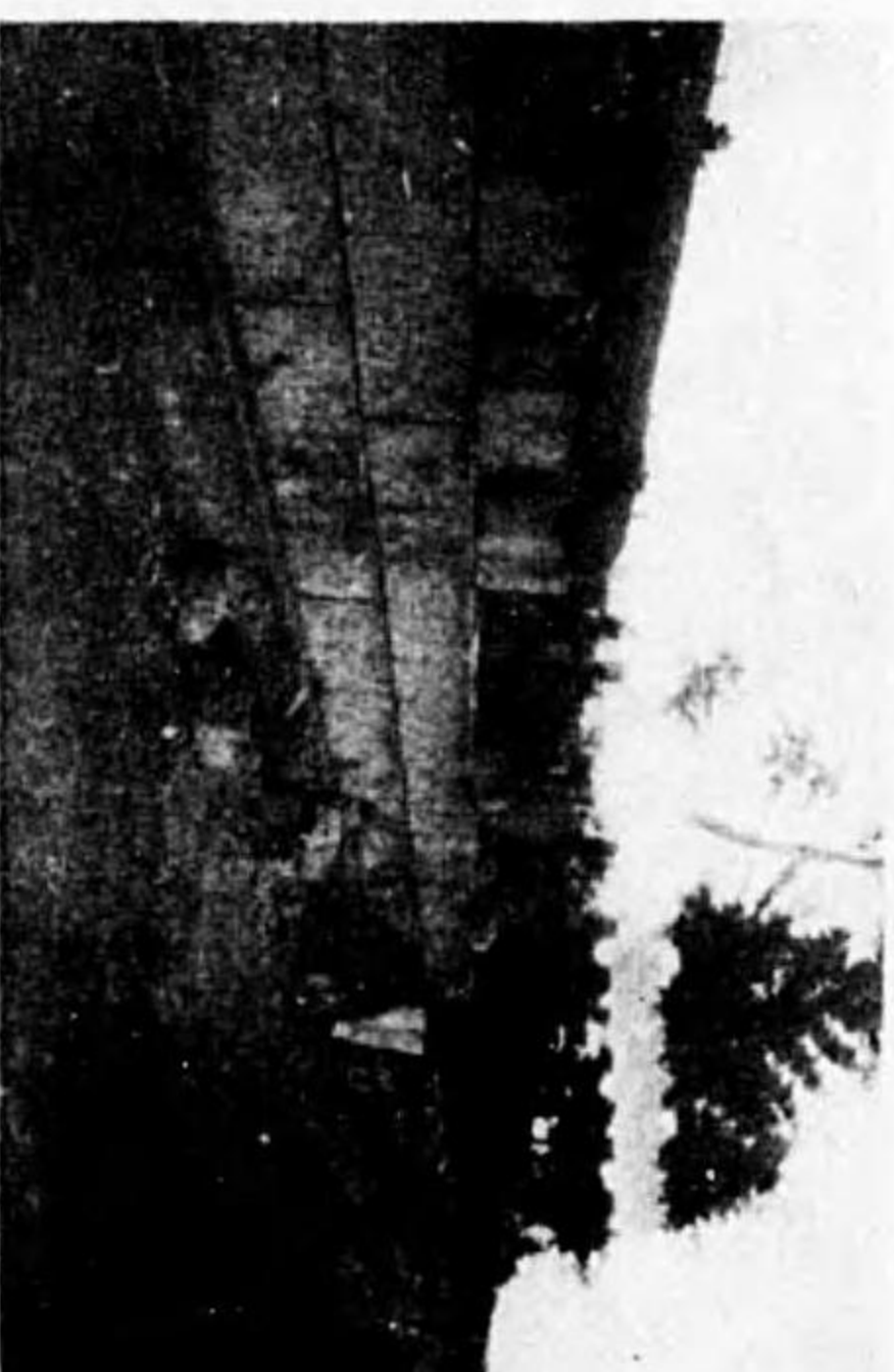
倒轉の籠燈石るけけに内境社神城高社縣町谷熊

圖六十二第



倒轉の籠燈石るけけに地墓同共町谷熊

圖七十二第



害被の塀石るけけに地墓同共町谷熊

圖九十二第



(村岡吉)遠嶺のと路道と梁橋大川荒

圖一十三第

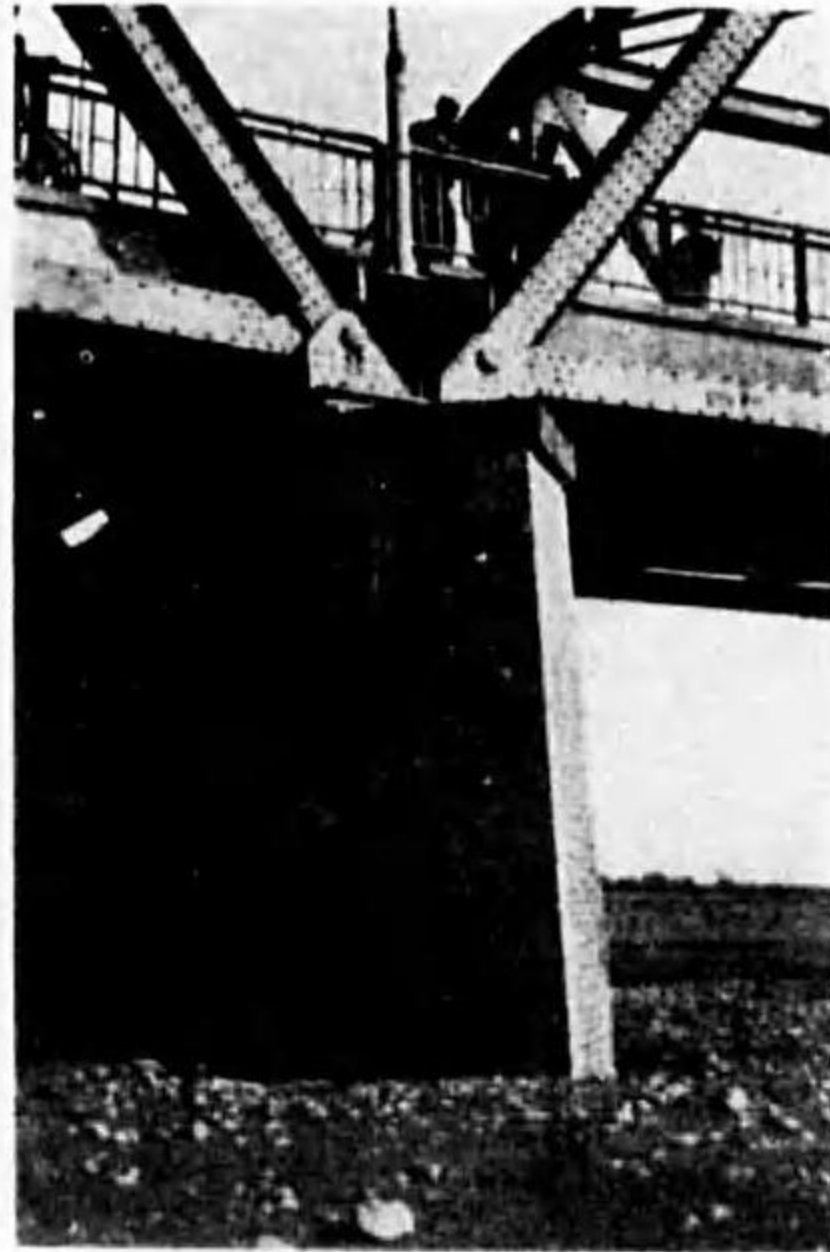


るあに前庭職工石の近附橋大川荒町谷熊
倒轉の籠燈石

圖二十三第



潰倒の庫倉社合粉製本松區原石町谷熊



第二十八圖 荒川大橋の橋脚の龜裂



第三十圖 熊谷町道路の龜裂、荒川大橋より熊谷町に向つて撮す

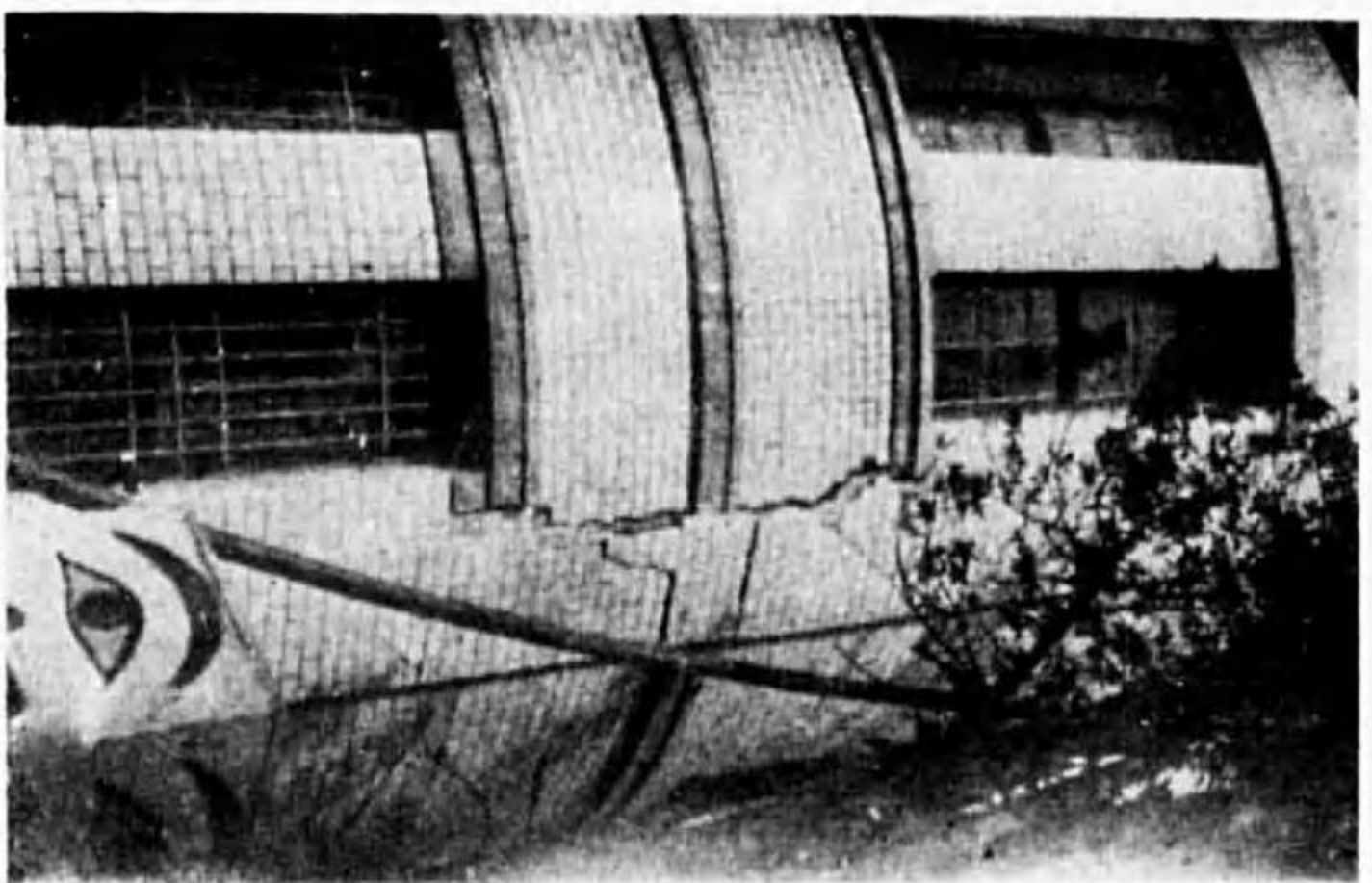
圖三十三第



屋家潰倒の町谷深郡里大

第三十四圖

大里郡深谷町足利銀行支店の龜裂



圖五十三第

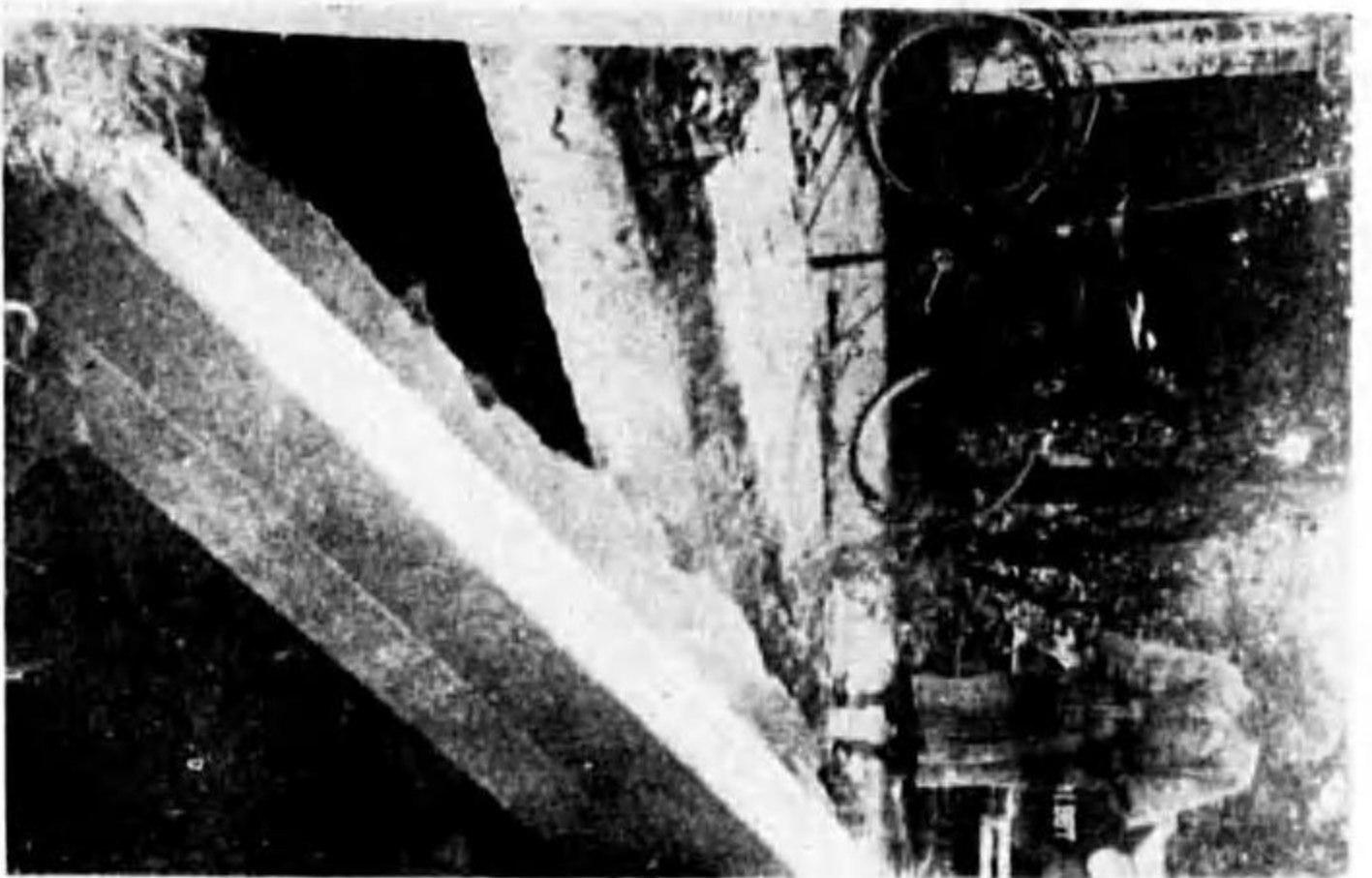


築倒碑石の内境社神間渡根山字大村澤藤郡里大

第三十六圖

大里郡深谷町元製糸株式会社
國庫工場の大煙突の崩壊





第三十七圖 大里郡花園村字原宿區に於ける
石橋の破損

圖八十三第



大里郡土用村役場前の垣石

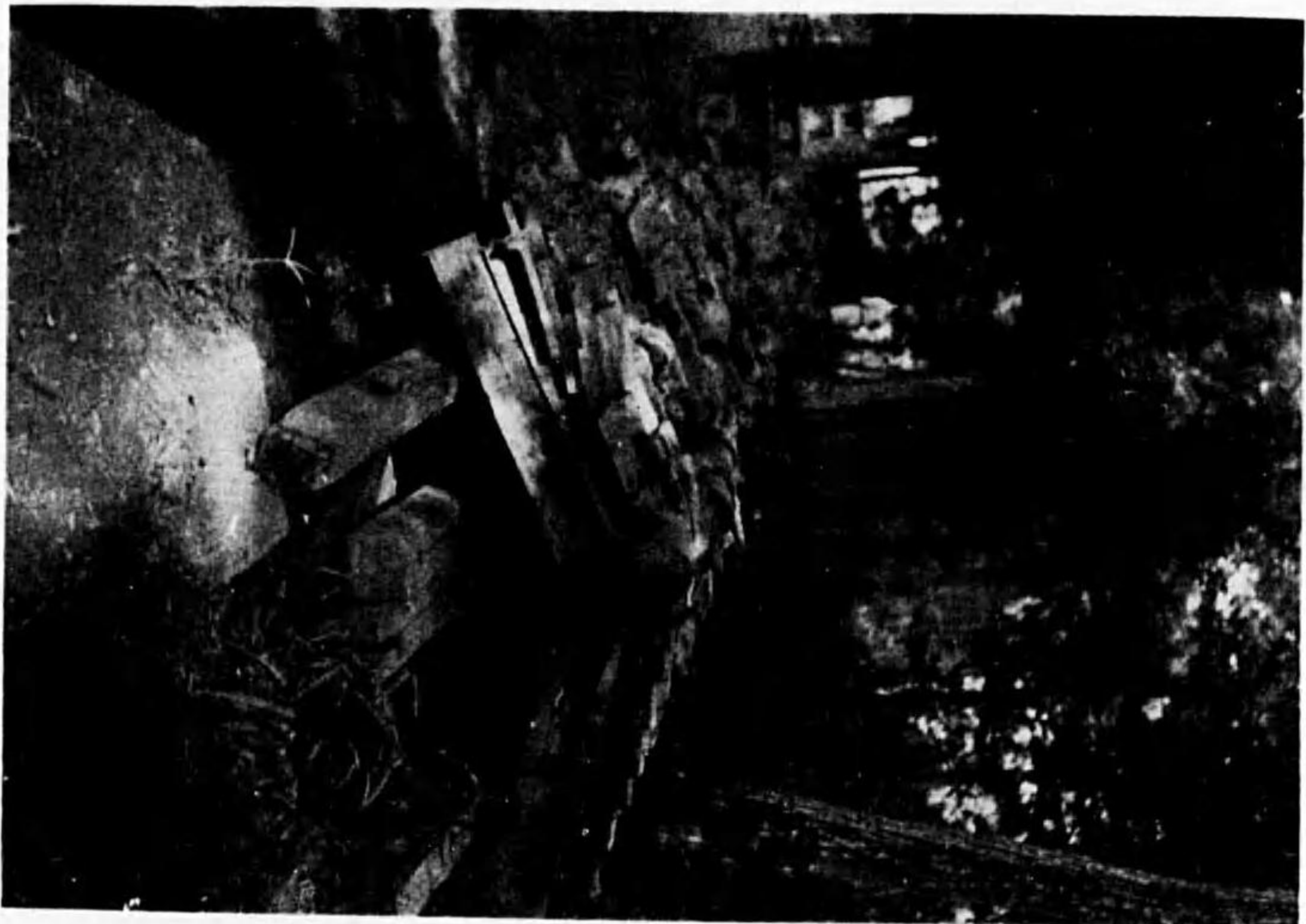


第三十九圖 大里郡土用村字馬場區に於ける
龜裂

圖十四第



大里郡土用村小字校庭の龜裂



大里郡長井村大字根上神社の
抗納屋の倒壊遺蹟

第十四圖



大里郡大幡村大字原島墓の
倒轉

第十四圖



大里郡明戸村大字石原に於ける
龜裂

第十四圖

圖四十四第

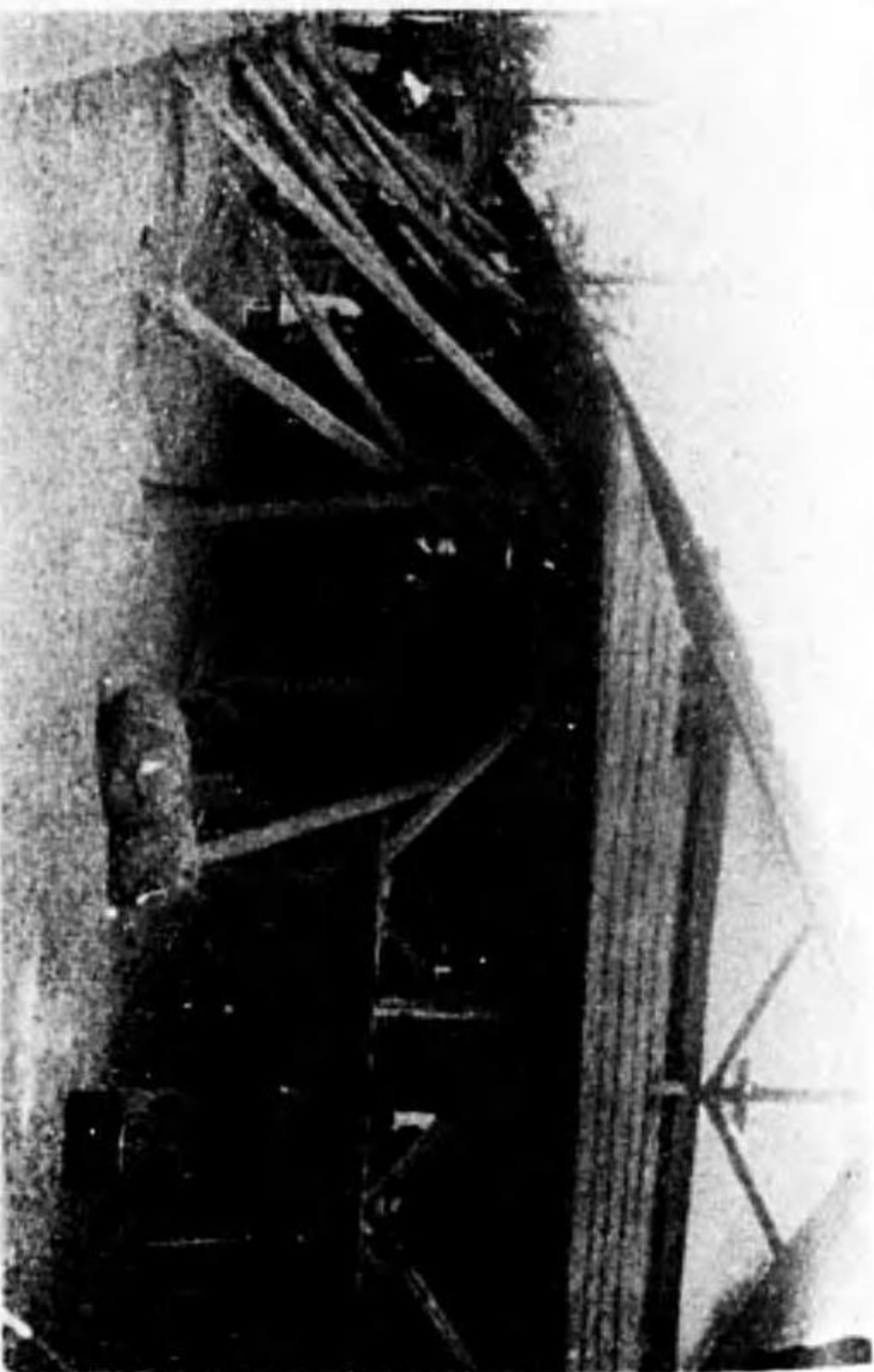


裂龜の防堤川根利先地塚石字大村戸明郡里大

圖五十四第



倒轉の龜燈石の社神市日八字大村寄大郡里大

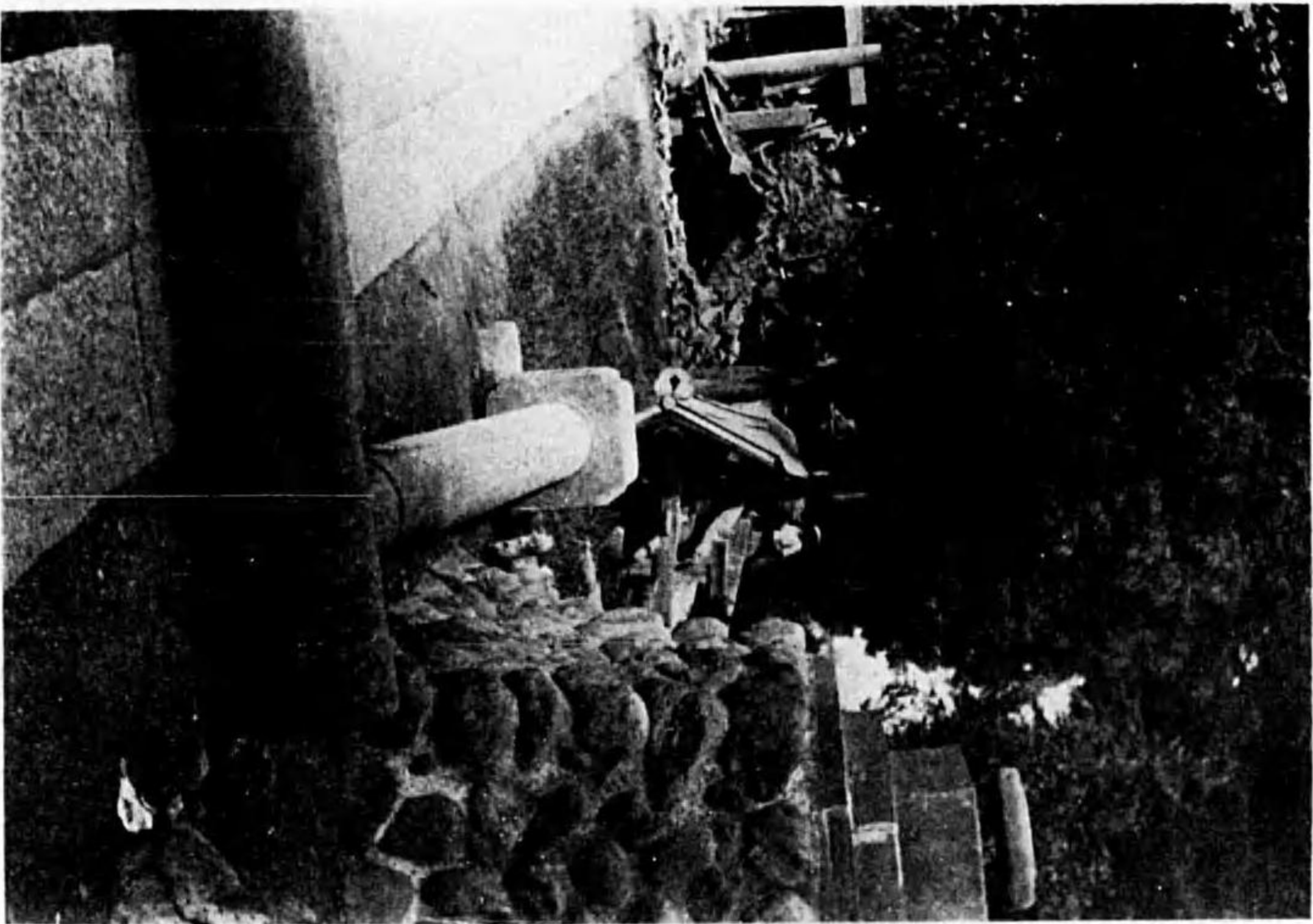


驛上吹郡立足北 圖六十四第

圖四十七第

北立足郡吹上村役場の被害

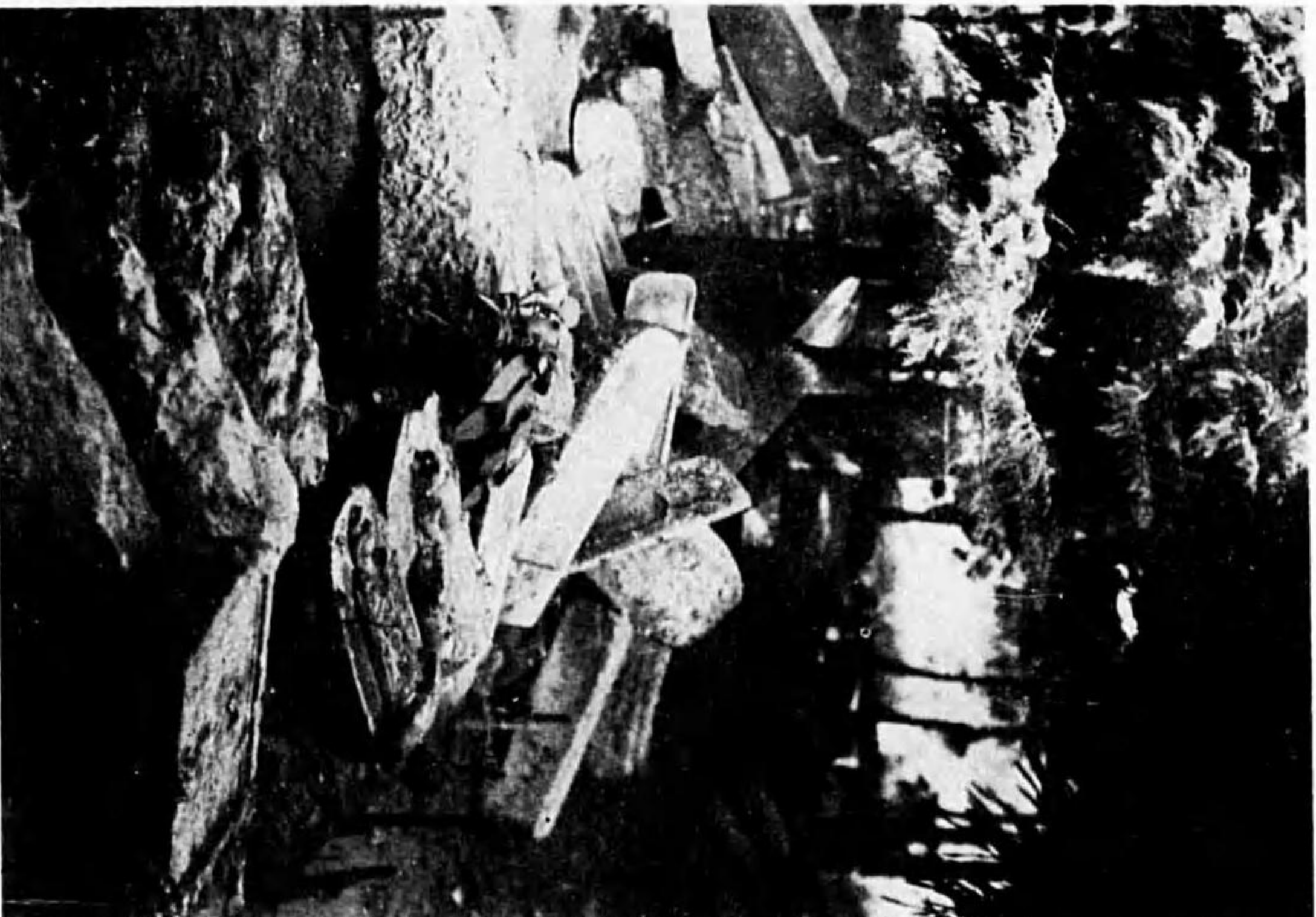




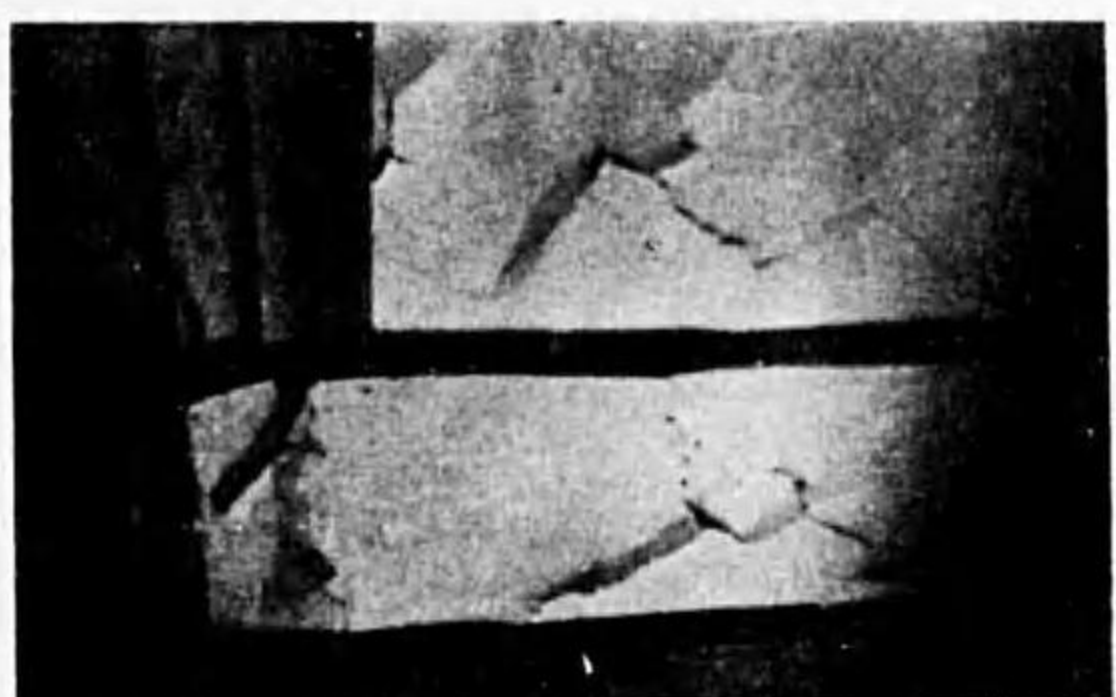
北足郡大苜水川神社の狹路 圖八十四第



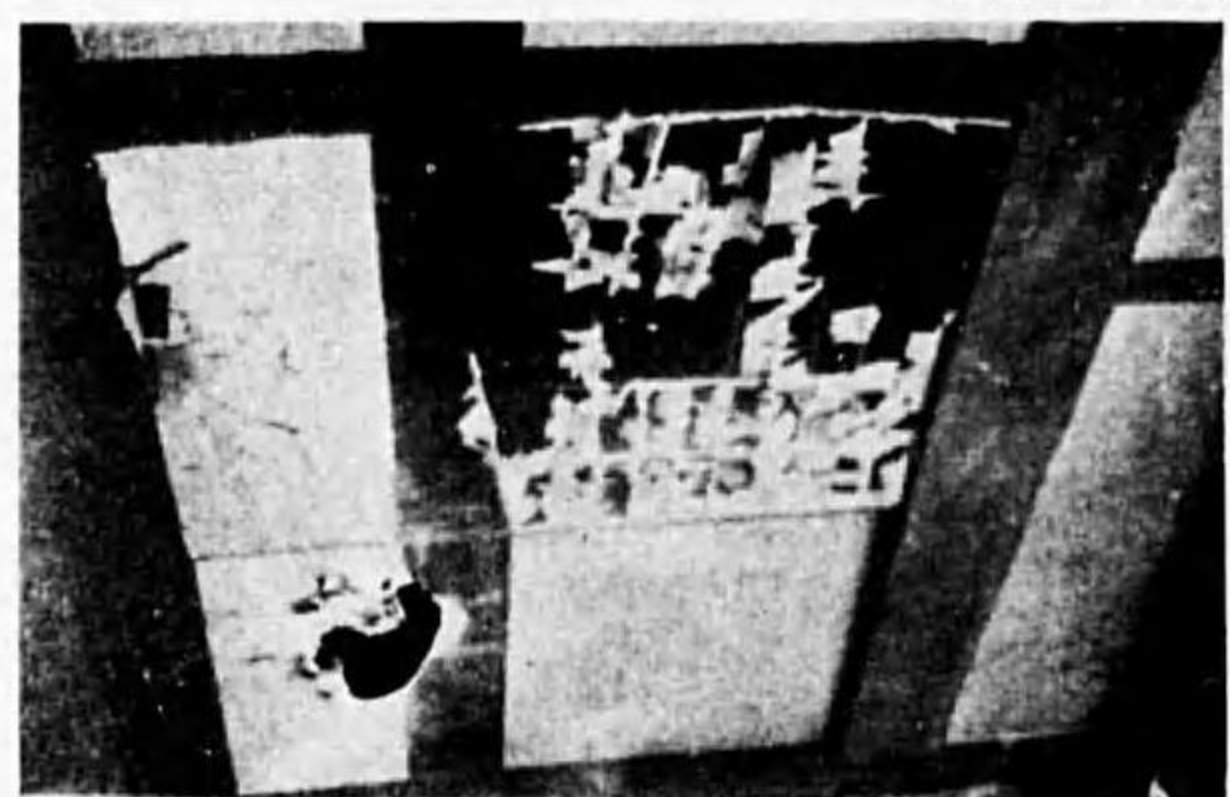
大苜水川神社境内樂殿の遺蹟 圖九十四第



第五十圖 北足立郡吹上村大字大菩薩王寺内墓石の轉倒(南東に向つて撮す)



第五十一圖 王寺内納經堂壁面の龜裂



第五十二圖 吹上村大菩薩堀口宜之民宅の障子の破損



第五十五圖
比企郡松山町本町八雲神社東側石垣の破損



第五十三圖
吹上驛の傾斜



第五十六圖
比企郡菅谷村に於ける土藏の被害



第五十四圖
桑園内に水の噴水



第五十九圖 深谷町大字大沼煙突の破損

圖七十五第



道縣里古西村郷七郡企比



第六十圖 大寄村大字戸森土藏の壁崩落

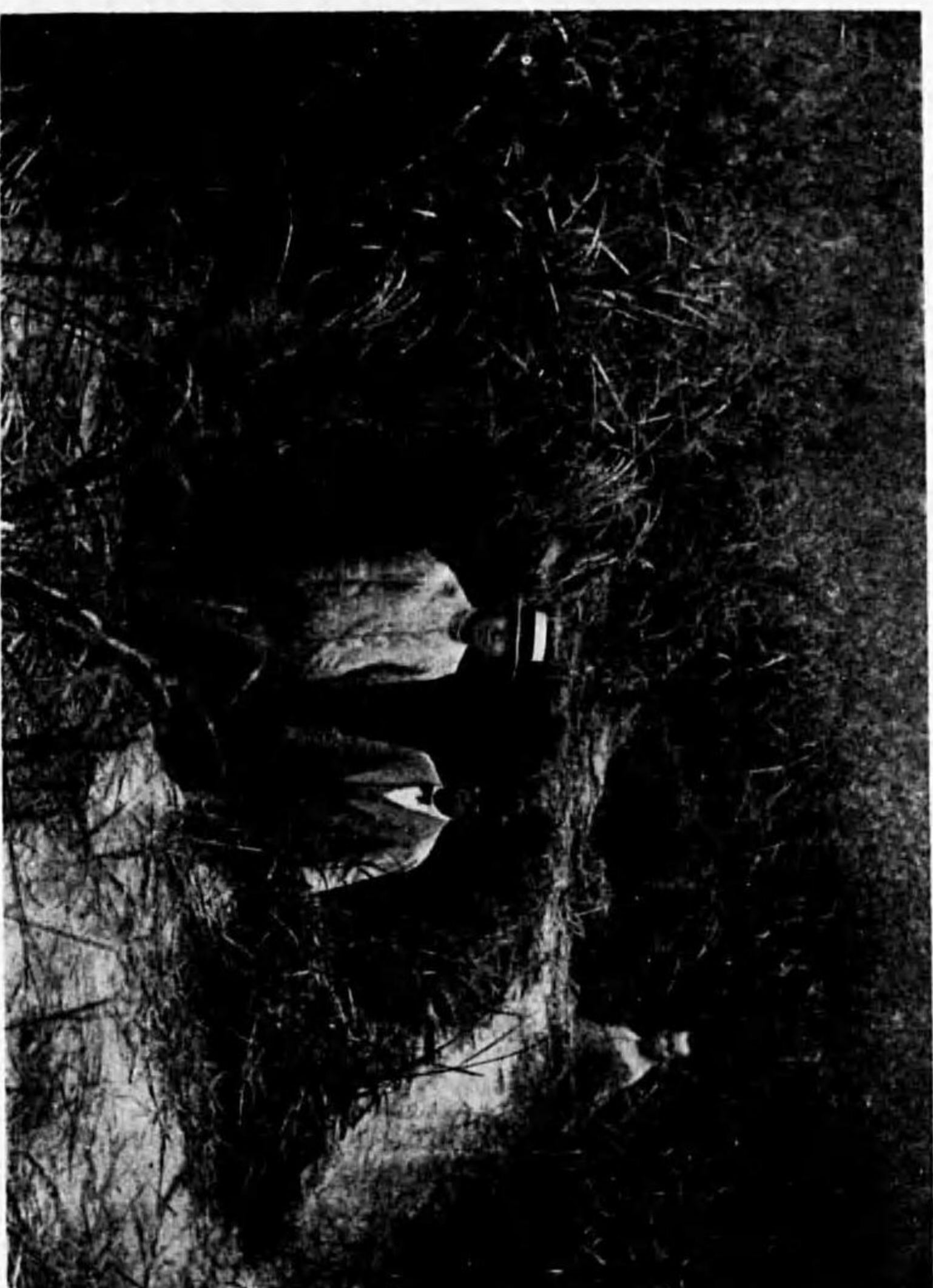
圖八十五第



市今字大衾男郡里大



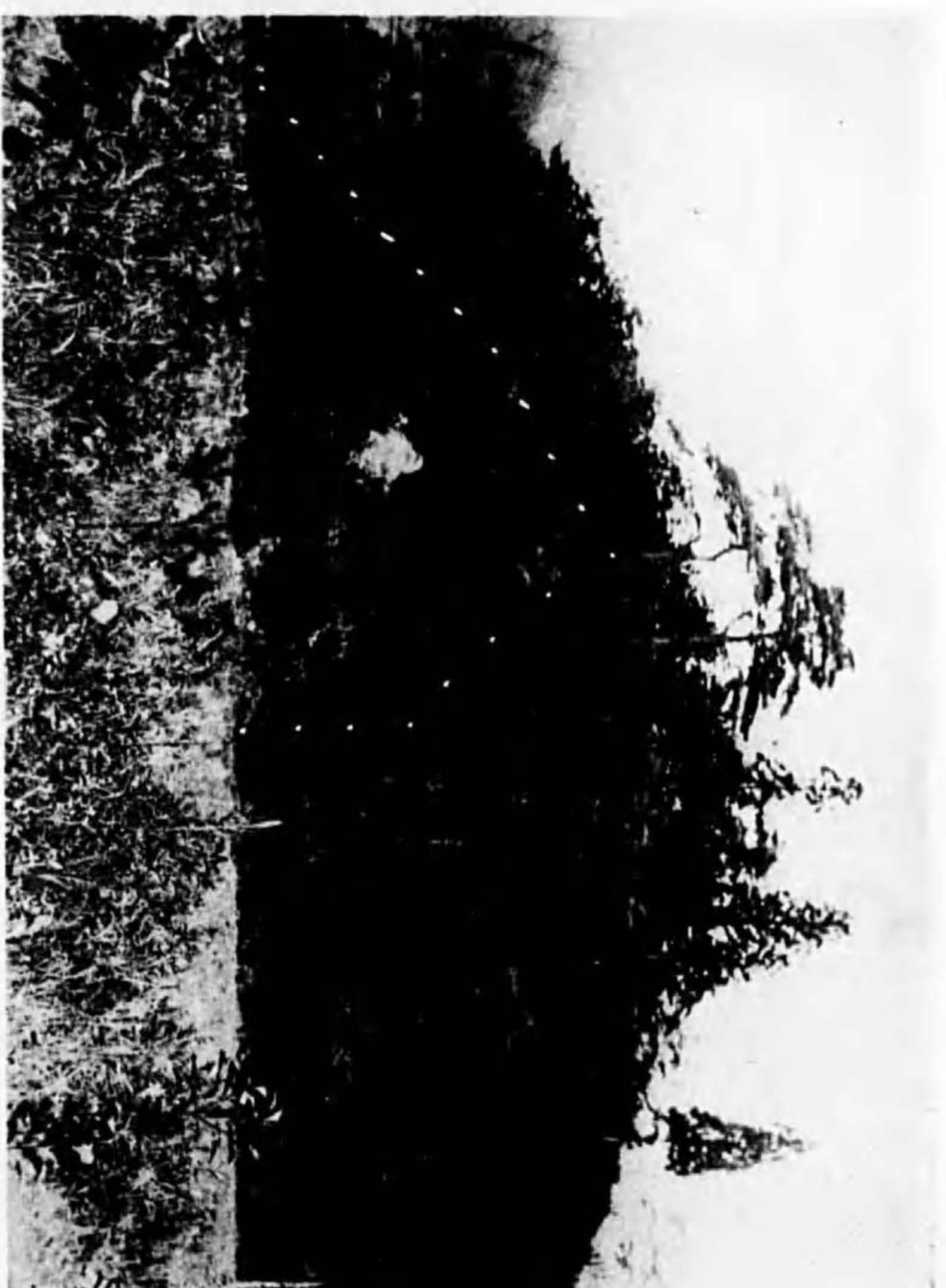
裂龜の山城南村河大郡企比 圖二十六第



地没陷の越腰村河大郡企比 圖一十六第



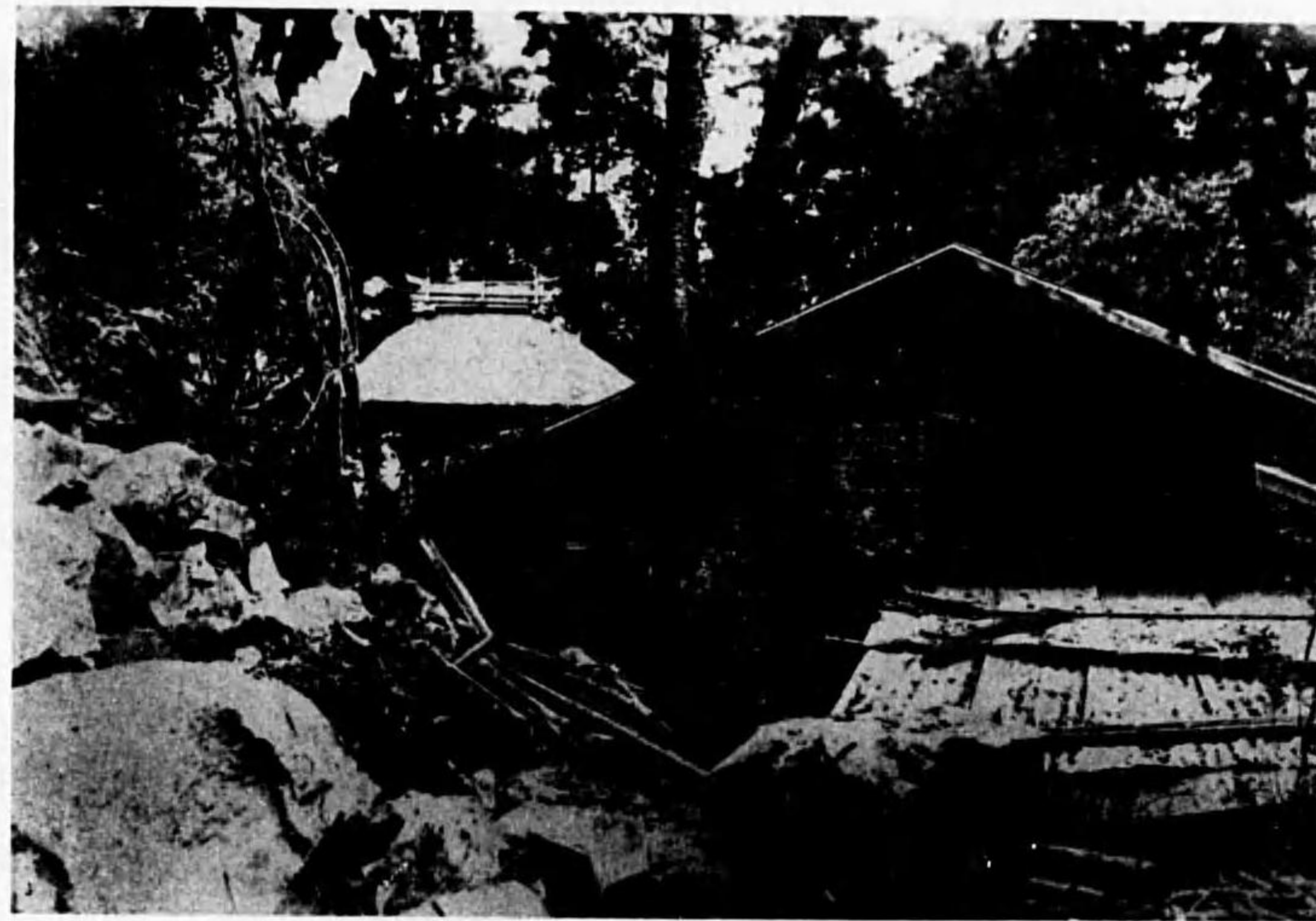
氏島中者見發は端右、大一差落れ崩山段岩 圖四十六第



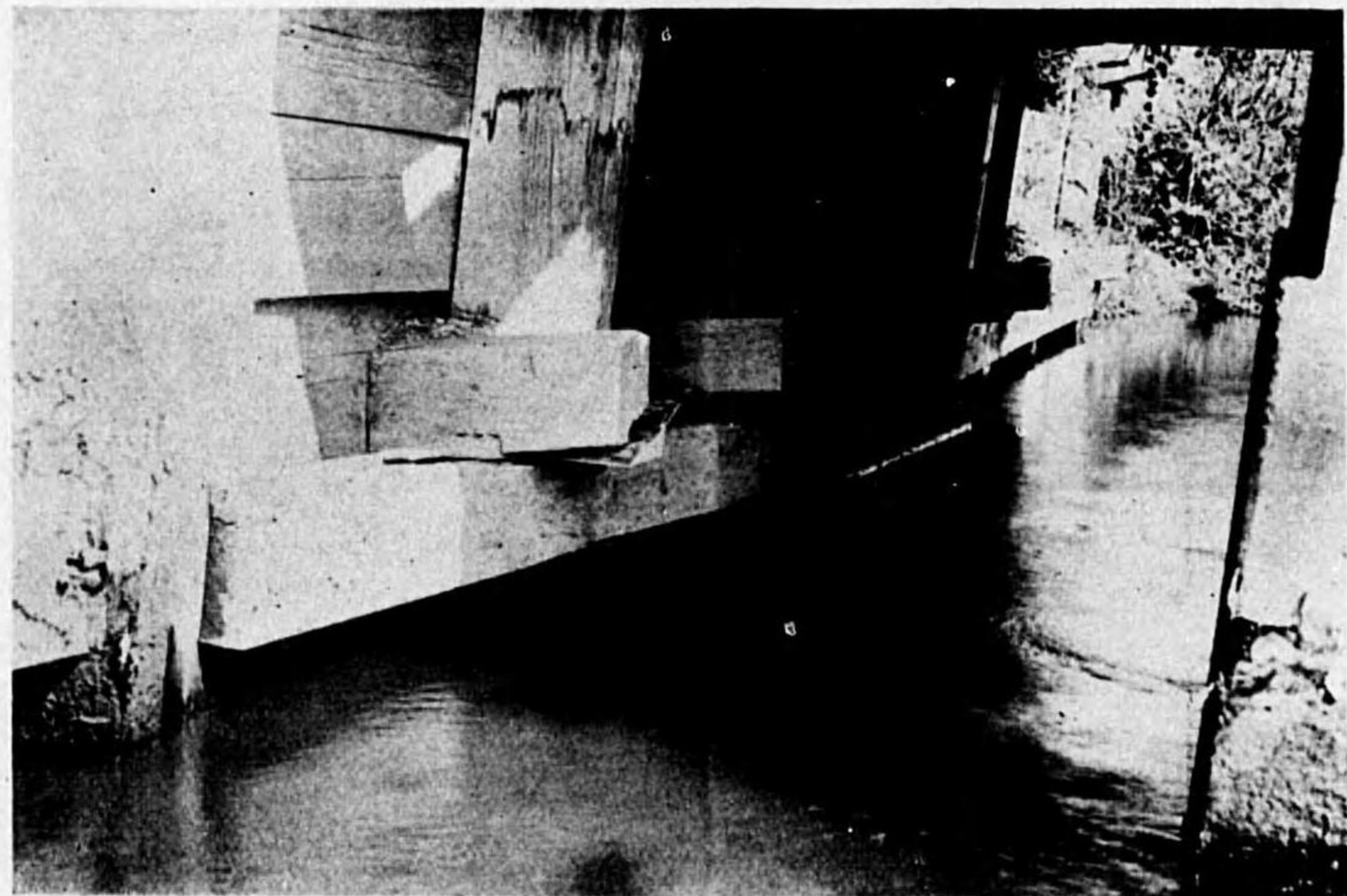
れ崩山の山段岩山入字段巖字入村坂高郡企比 圖三十六第



れ 崩 山 山 殿 岩 村 坂 高 圖 五 十 六 第



害 被 る よ に れ 崩 崖 の 内 境 音 觀 山 殿 岩 村 坂 高 圖 六 十 六 第



應狀の斜傾並折挫の梓堰間六十内地堀新宇大町蒲菖 (圖七十六第)



(圖九十六第)

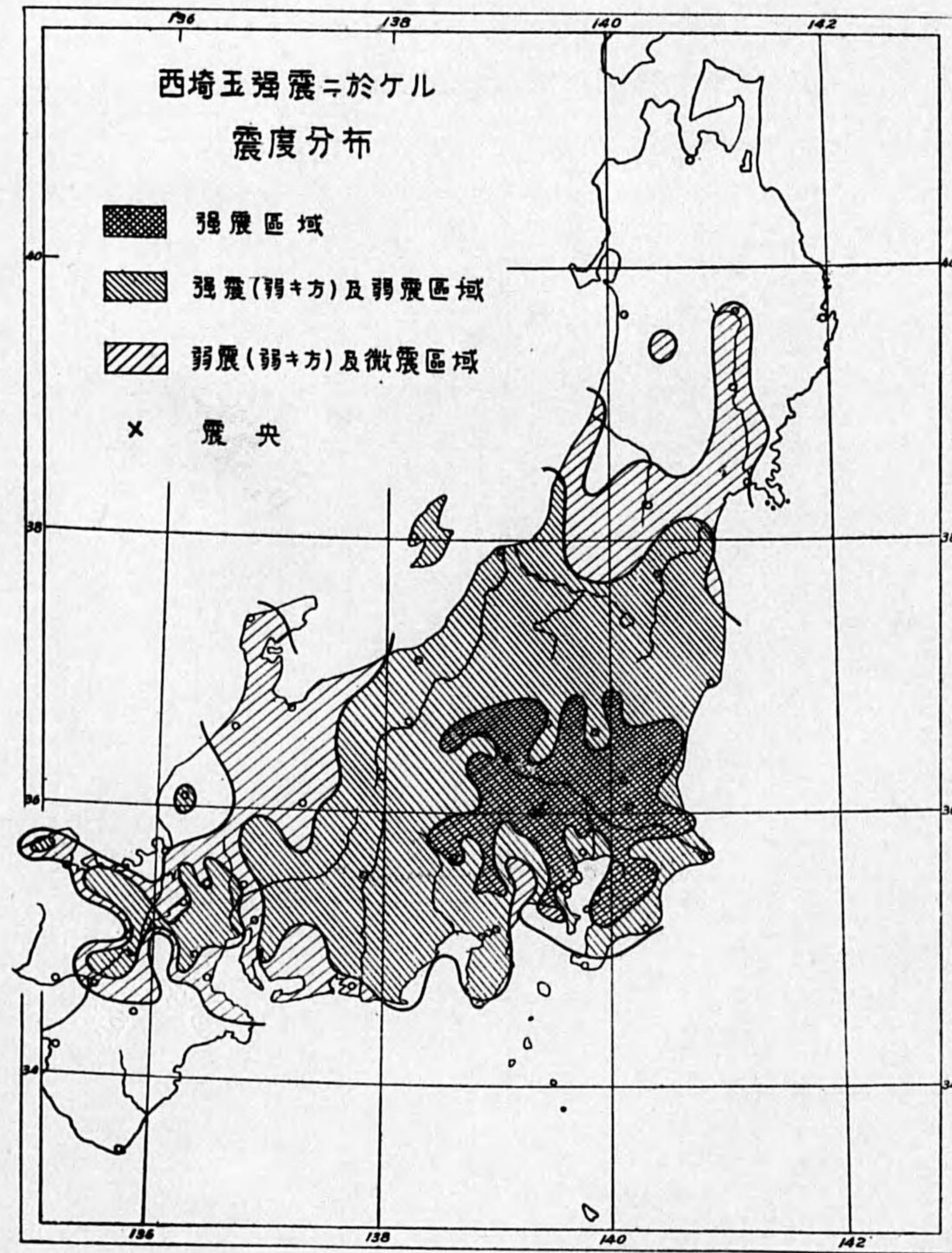
同 右



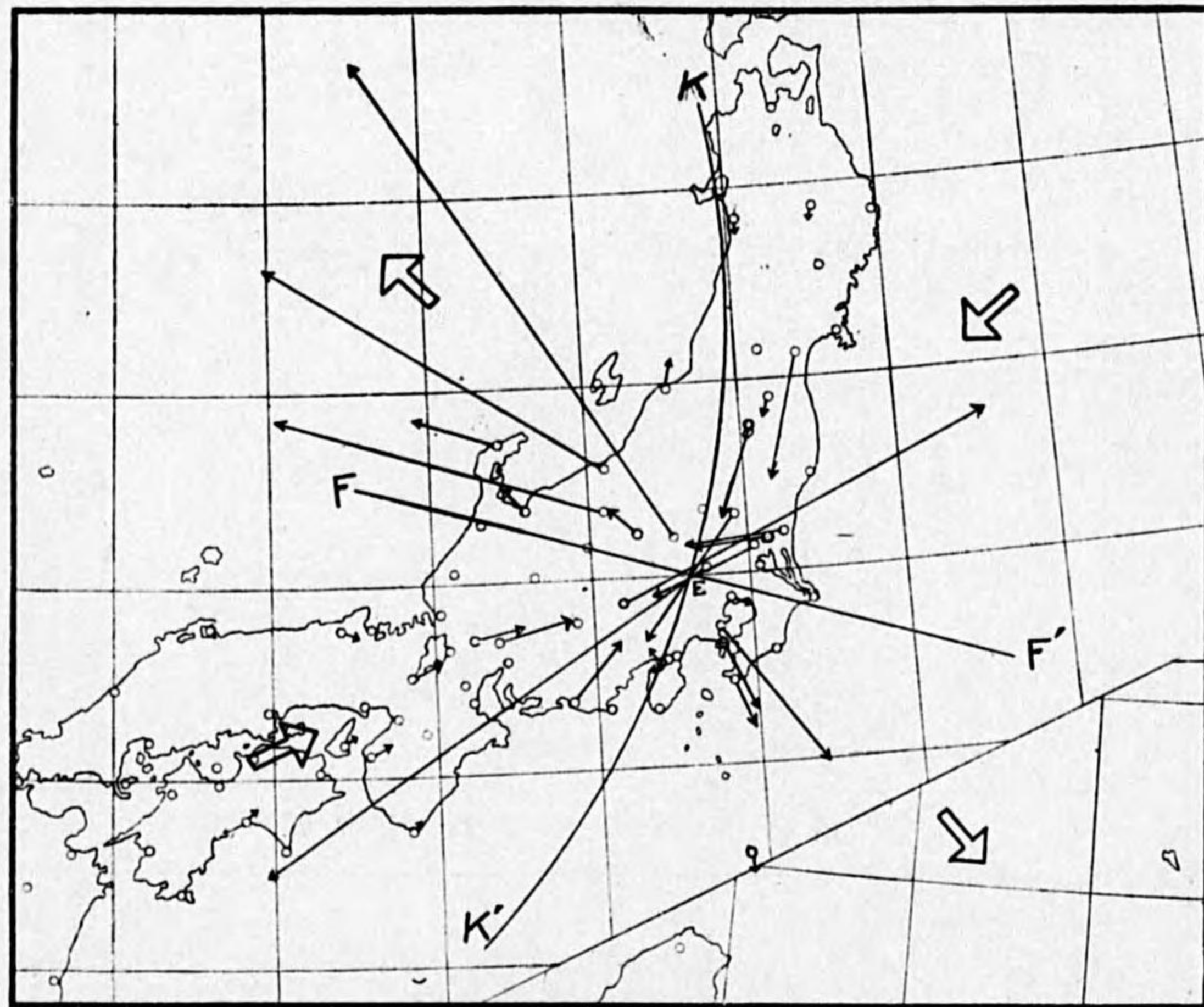
(圖八十六第)

裂龜面路内地堀新宇大町蒲菖

(埼玉縣耕地課地方農林主事 佐野文吾氏寫)

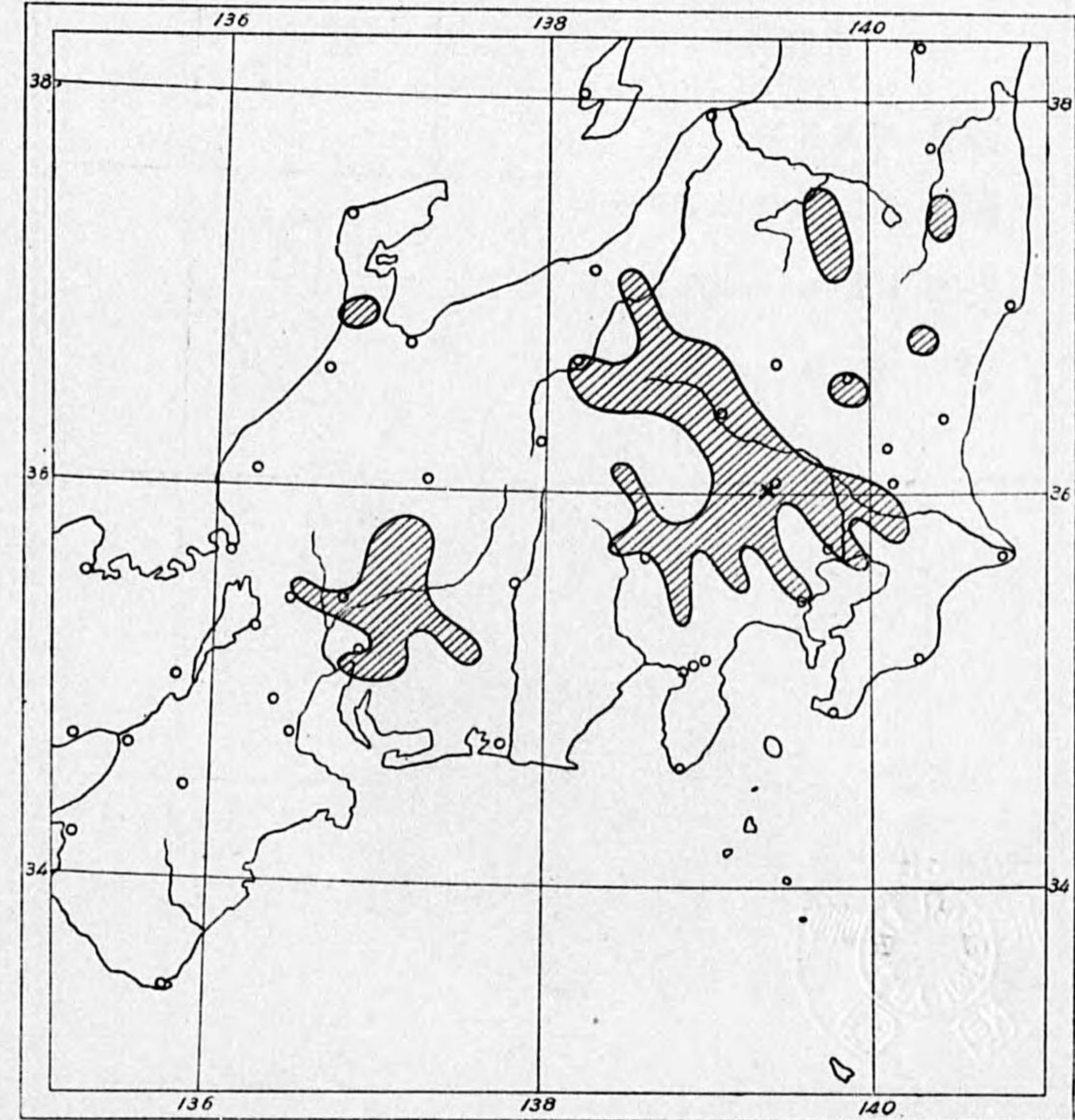


第一圖 西埼玉地震の初動方向分布圖

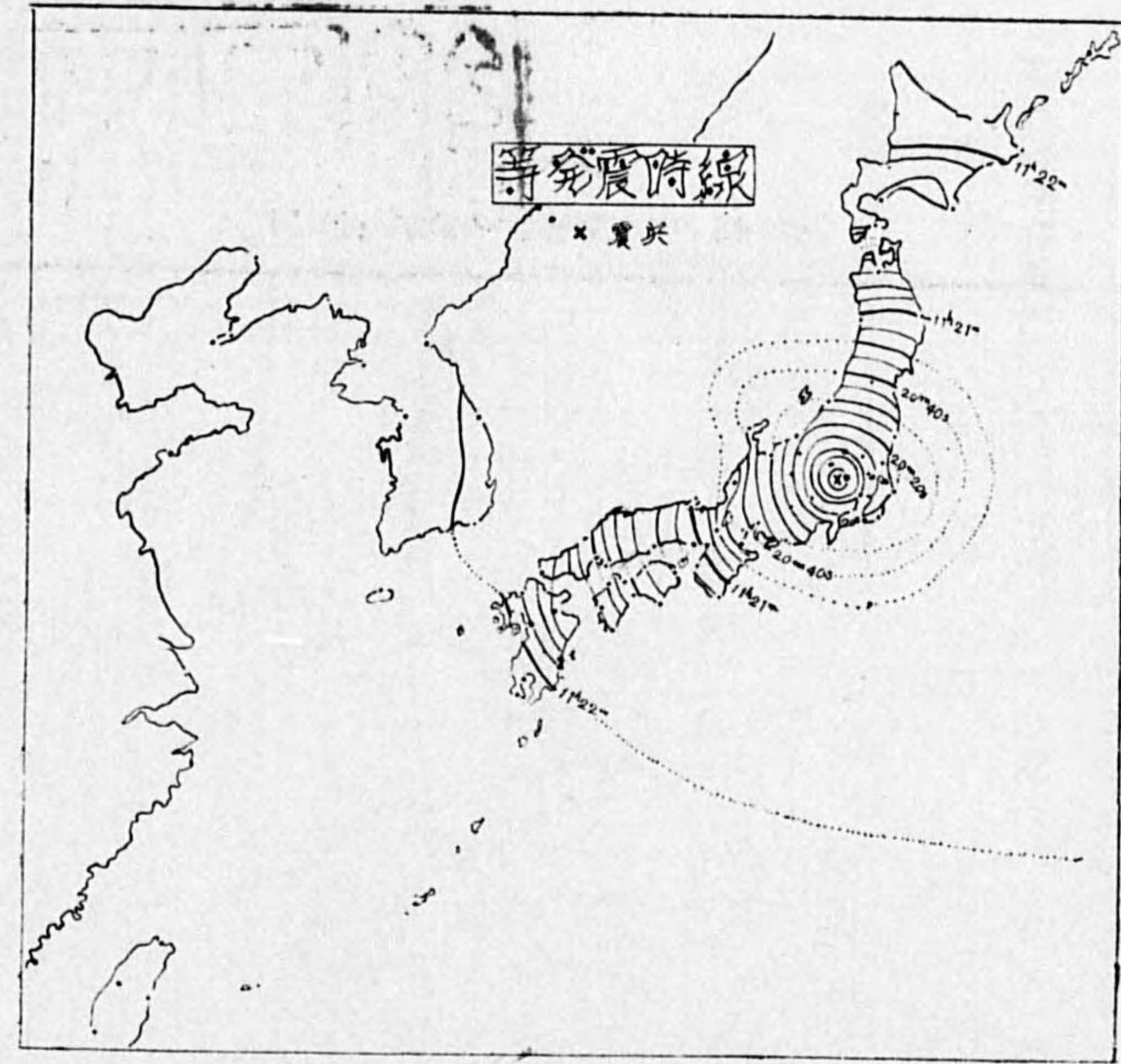


矢は初動の方向及大きさ，二重矢は至力作用方向，FF'は斷層線，KK'は節線
Eは震央を表す

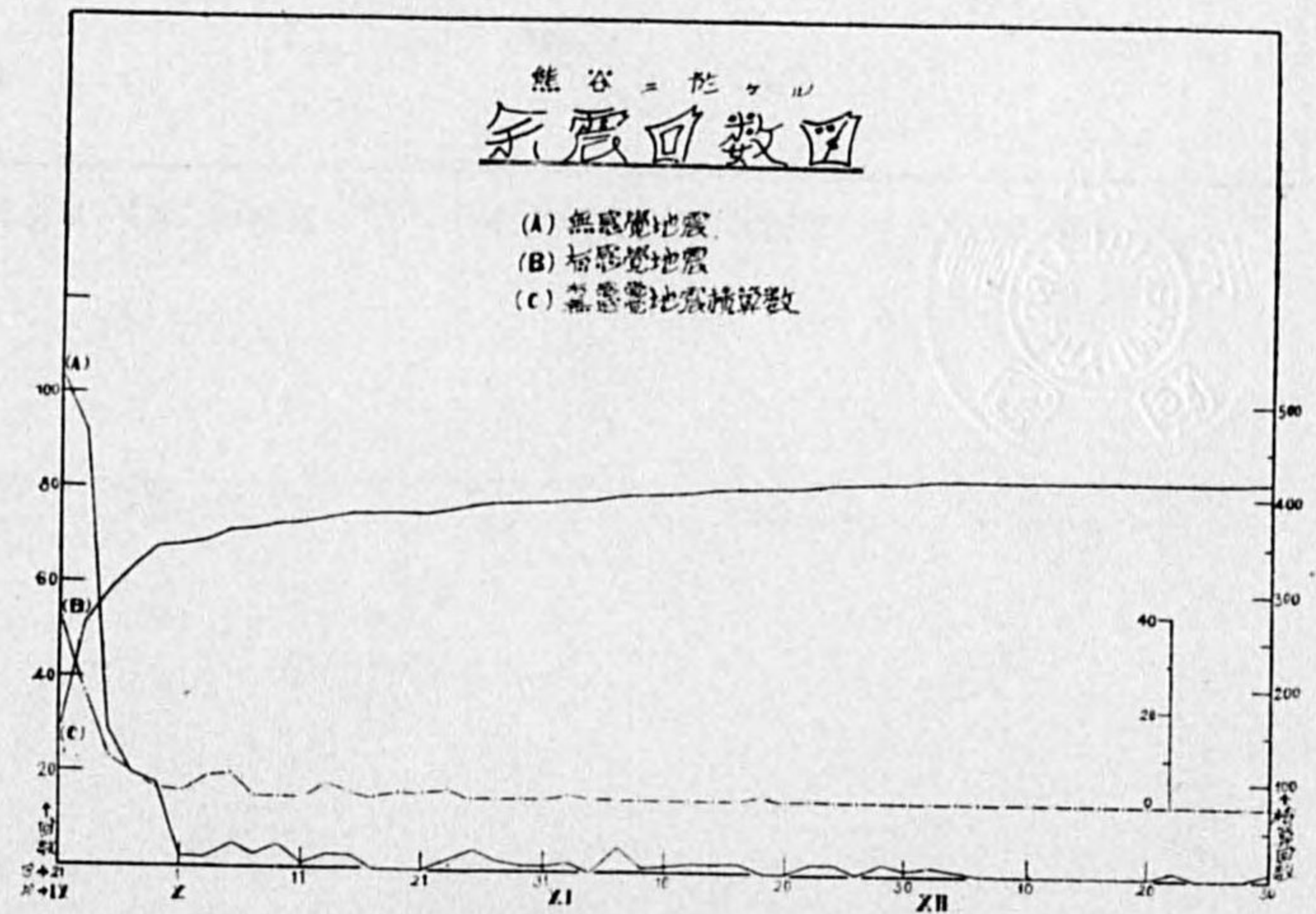
西埼玉強震ニ於ケル地鳴聴取區域



× 震 央



西埼玉強震の等震時線



熊谷に於ける余震回数圖

西埼玉強震報告

埼玉縣熊谷測候所



加月二十一日の烈震は咄嗟に起りその震動地域は頗る廣汎に亘り瓦舞ひ壁落ちて崩壊する響四境を驚かす悲鳴と叫喚とは到る處に涌きあがり不幸本縣下に於ては多數の犠牲を出し巨額の財寶を滅失したり今次の強震に關し本所備付けの各種地震計の記象其の他の調査に據り左記の如き結果を得たり。

初期微動繼續時間 三秒四

最大振幅 東西動 七十五耗以上
 南北動 三十八耗八
 上下動 七耗五

總振動時間 約三十分間

人體に感じたる時間 約七分間

管内氣象觀測所よりの地震報告 突如襲來せる今次の強震に當りては縣下各觀測所よりはその當時の狀況を詳細に且つ速に報告を寄せられ調査上頗る好資料となれり。

左に縣下三十餘の管内觀測所よりの報告を摘記すべし。

觀測所	震動時間	方向	震度	性質	記	事
浦和	二分〇〇秒	西	強(弱)	水	餘震あり。時計止りしものもあり。北西—南東に振動す。	
岩槻	二、三〇	南西—北東	強	上下動より水 平動に移る	汽車の走り来る様な音響す。人皆戶外に逃る。棚上の瓶硝子品物或は落下或ひは倒る。場所に依りては足も踏めぬ程慘憺たる所あり。壁に龜裂を生ず。	
杉戸	一、〇〇	南西—北東	強	上下急	地鳴あり。机上の品物は落下す。バケツの水溢れる。北西の向南東の向の壁に龜裂を生ず。同上向の時計も止まる。村社近津神社の石鳥居胴部より折れて破損す。餘震連續に感じつゝあり。	
葛蒲	一、一五	北西—南	強	上下動あり	壁に龜裂を生ず。	
越ヶ谷	七、〇〇	北東—南東	強	上下あり後に 水平に移る	壁に龜裂を生ず。煙突の曲りたるものあり。時計の振子止る。人戶外に逃出す。餘震度々あり。	
栗橋	一〇、〇〇	西	強	上下急	墓石の1/2倒る。鳥居の笠木落つ。壁に龜裂あり。	
所澤	二、〇〇	不明	強	稍々急	餘震あり其の際に地鳴遠雷の如く激しきもの約三、四秒にして終る物品は棚より落ちたり。時計止る。	
飯能	一、〇〇	南	強	水平急	棚上の瓶等倒れ落ちたり。人戶外に飛び出る。	
川越	〇、二〇	南—北	強	水平急		

梅園	〇、三〇	西—東	強	上下後水平	斷續的に鳴動震動あり。石垣の古きもの數ヶ所崩壊又は龜裂を生じたり。	
松山	不明	北—南	強	稍々急	高さ約三尺の戸棚の硝子瓶投出さる。硝子戸棚の戸ははづれ中の物も共に落下す。時計止る。井戸水濁る。	
小川	不明	南	強	上下動	其の後餘震時々あり。烈しき鳴動あり。極く近き場所に鳴動を感じず道路に龜裂を生ず。屋根瓦の墜落あり。人畜の支障なし。火災なし井戸水河水一時濁りたり。	
若泉	〇、一五	北—南	強	急激	急激にして大震災以上の震動と思はれる。時計の振子止る。棚の品物が落下したる位にて格別の被害なし。	
玉井	〇、二九	西—東	強	上下動あり急	十秒間位西方に近く遠雷の如き音響せり。壁は落下し或は龜裂する程度なり。	
羽生	二、〇〇	北	強	上下あり急	約三十秒北西より遠雷の如き音響あり。住家の二、三傾きたるものある程度なり。餘震あり。午後零時四十分迄に五回の餘震あり。	
本庄	三、二〇	北	強	上下あり	北西方より二十秒間非常に近き所に烈しき地鳴あり。郡農會、工區の壁處々崩れる。大正十二年のよりも烈し。	
名栗	〇、二〇	北—南	強	上下動あり	地鳴遠方より自動車を進來するが如し。各處の地面に龜裂を生ず。蒲乾燥場の倒壊、棚の物品落下す。	
浦山	〇、三〇	南	強	水平急	鳴動を伴ふ。戸障子音を出す。時計の振子止まる。	

入間川	中津川	大柵	倉尾	越生	槻川	野上	小鹿野	三峯
二、〇〇北	一、三〇東	不明	一、三〇南	〇、五〇北	一、三〇南	二、二〇南	〇、三〇北	一、三〇南
東強震	西強震	南強震	東強震	西強震	北東強震	東強震	南西強震	東強震
上下あり急	上下動	上下動あり急	水平上下あり	上下動	上下あり急	急	急	上下あり急

棚上のビール、サイダー壺落下破損す。地面、壁、コンクリートに亀裂を生ず。時計の振り止る。境内の玉垣倒壊す。書籍、茶ダンスの茶碗等振り落さる。尙餘震繼續中

約三十秒間南西―北東にかけて山崩の如き音響あり。時計全部止る屋外に皆避難す。人畜には死傷なし。山崩れ相當にあり。煙突は破損す。瀬戸物幾分被害あり。餘震あり。

可成り強き大砲の如き音響、地鳴を聞く。土蔵、屋根瓦落下す。壁に亀裂を生じ破損す。棚上物品落下。時計は停止す。貯水溢れたり發震三十秒前南西方に當り大砲の如き音響すそれに續き大震動あり全村に亘り道路、庭に龜裂を生ず。岩石は崩壊す。樹木は倒伏す。墓石の倒れしもの多し。井戸水、河水は濁る。第一回震動後約三十秒毎に一回位の餘震尙繼續中。

道路に龜裂を生ず、石垣崩壊す。土蔵の壁落ちる。棚の物品落下す北西方に近き鳴動あり。其の後數十回地震あり。

岩石崩壊す。

第一震後一、二分間おきに數回の動搖あり。トラックの遠地を走る如き音響す。時計止る。土地に龜裂を生ず。石垣崩れる。

高山の岩石崩壊す、餘震頻々。先年に比し短時間なり。午後は小震止む時なし。

机上棚上の幾分丸き物落つ。餘震あり。

豊岡	吉川
不明南西―北東強震(弱)	二、〇〇南
上下あり稍々	北強震(弱)急
道路に南西―北東の方向に三條の龜裂を生ず。最大なるもの幅約三厘あり。	應舎に龜裂あり。墓石一、二本倒る。戸外に飛び出す。時計止る。關東地震(十二年)よりも弱し。

縣下の被害 今次の強震襲來に當り不幸十一名の犠牲者を出だし重傷者二十六名輕傷者百三十三名の多數を見たり。又家屋の損傷を見るに全壊(住、非住)は百七十二戸に達し半壊(住、非住合計)は二百八十戸の多き上ぼり、煙突の倒潰は八十餘に及べり。是等の總損害見積額は殆んど壹百萬圓の巨額に達せんとす。

左に縣警察部保安課の調査による各警察署別の被害一覽表を掲記すべし。

埼玉縣震災被害調

(九月二十二日午前十時調)

埼玉縣警察部保安課

署別	被害別		死者計	重傷者計	輕傷者計	合計	家屋倒壊		合計	損害見積總額
	男	女					全壊	半壊		
浦和										
鳩ヶ谷										

羽生	忍	深谷	寄居	熊谷	兒玉	本庄	小鹿野	秩父	小川	松山	飯能	所澤	越生	川越	鴻巣	大宮	川口
	一	二													一		
		三		一	一										二		
	一	五		一	一										三		
		二		一			一	一							四	三	
	三	三	二	二											三	一	
	三	五	二	二	一		一	一							七	四	
	五	五		四	八	三			二	三			一		二	二	
	三	一四		一	四	三	二	一	一	一					三	四	
	八	一九		五	一	二	二	一	三	四			一		五	一	六
	二	二九		八	四	六	二	二	四	四			一		五	二〇	
一	六	八		四	二										三	一	
一	六	七		元	四	二			一	七			一		元	一	
二	三	五		三	六	二			一	七			一		五	一	
一	五	九		三	九				二	二					三	一	
	一	五		八	〇	三			八	三			一		六	三	
一	六	二		二	九	三			〇	二			一		元	四	
三	八	四		三	四	五			一	二			二		一	五	
	八	一六		九	一	〇			六						〇	一	
		四四		一	一	二〇									一〇	六	
		一六〇		五〇	〇	七一二									五	九〇	
二二〇	二、五〇五	四一、六〇八		一八、〇〇八	一、八〇〇	二、七一二			二、九〇〇	三、八八五			一三〇		六九五	六九〇	

合計	吉川	幸平	杉戸	久喜	越ヶ谷	岩槻	加須
四							
七							
一一							
一二							
一四							
二六							
四八			一	一	一		
四〇			三				
八八			四	一	一		
一三			四	一	一		
六一			七		一		
一九			六	三		二	
二五			三	三	一	二	
二七			四		四		
三〇			三		七	二	
四五			六	七	三	二	
八四			一			一	
九六							
二五三				一八、六九〇	二五〇	一、八〇〇	七二〇

備考 火災ハ岩槻及ビ所澤ニ各一ヶ所發生セルモ何レモ大事ニ至ラズ消シ止ム、縣道崩壞寄居一ヶ所、龜裂一九ヶ所

各警察署管下被害一覽表 本所は強震數日後縣下各警察署長宛に管下の被害状況を問合せたり、以下に

記す各町村別の被害一覽表はその回答に據れるものなり。

各警察署長の厚意に對し感謝の意を表す。

鴻巣警察署管内

町村別	種類		合計	家屋		合計	損害	損害見積額
	死者	傷者		全壊	半壊			
鴻巣町	一	一	一	一	三	一	三	六千、八〇五
男	一	一	一	一	三	一	三	
女	一	一	一	一	三	一	三	
計	一	一	一	一	三	一	三	
住家	一	一	一	一	三	一	三	
非住家	一	一	一	一	三	一	三	
計	一	一	一	一	三	一	三	
住家	一	一	一	一	三	一	三	
非住家	一	一	一	一	三	一	三	
計	一	一	一	一	三	一	三	
倒壊	一	一	一	一	三	一	三	
石垣	一	一	一	一	三	一	三	
倒壊	一	一	一	一	三	一	三	
倒壊	一	一	一	一	三	一	三	
倒壊	一	一	一	一	三	一	三	
倒壊	一	一	一	一	三	一	三	
倒壊	一	一	一	一	三	一	三	
倒壊	一	一	一	一	三	一	三	
倒壊	一	一	一	一	三	一	三	
倒壊	一	一	一	一	三	一	三	

計	笠原村	馬室村	上平村	中丸村	小針村	石戸村	川田谷村	加納村	小谷村	田間宮村	常光村	箕田村	吹山村	桶川町	被害別	
															死	傷
一															男	女
二															男	女
三															計	計
六	二								二	一			一		男	女
六						一		一					三		男	女
三	二					一			二	二			四		計	計
一	三					一		一	二	二			五		合	計
二	八							一	二		二	一	二		住家	全
一	七								四	六	三	三	四		家	家
三	七							一	六	六	五	四	六		非住	屋
一	三								一	一	二	三	一		計	壊
五	四								七	三	五		一		住家	半
一	五							一	四	七	三	三	一		家	倒
一	三								七	四	七	三	一		非住	壊
一	四								一	一	四	七	一		計	壊
一	五								一	一	四	七	一		破	損
一	八								一	一	一	一	一		合	計
一	一								一	一	一	一	一		垣石	壊
一	一								一	一	一	一	一		崩	山
一	一								一	一	一	一	一		崩	山

備考
一、損害見積額ハ單ニ家屋ノ損害ノミナラズ家財具商品等ノ損害ヲ全部含ム

兒玉警察署管内

町村別	被害別		計	家屋		破損	合計	垣石 崩壊	山崩
	死	傷		全	半				
兒玉町			一			七	八		
共和村			一			八	九		
丹莊村			一			一	五		
金屋村			一			一	五		
秋平村			一			一	五		
大澤村			一			一	五		
松久村			一			一	五		
若泉村			一			一	五		
青柳村			一			一	五		
本泉村			一			一	五		
矢納村			一			一	五		
計			一			一	五		

備考 損害見積
兒玉町 三〇萬圓
共和村 五千三十圓
丹莊村 二千圓
秋平村 二百四十圓

松山警察署管内

町村別	被害別		死傷計	死傷	全壊	半壊	倒壊	計	塀	塔	垣	石	崩	山	煙突倒壊
	人	畜													
南吉見村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
西吉見村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
小見野村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
八ッ保村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
三保谷村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
出丸村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
伊草村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
中山村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
野本村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
高坂村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
唐子村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
宮前村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
福田村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
大岡村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
松山町	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
計	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15	15

小川警察署管内

町村別	被害別		死傷計	死傷	全壊	半壊	倒壊	計	塀	塔	垣	石	崩	山	煙突倒壊
	人	畜													
北吉見村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
東吉見村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

町村別	被害別		死傷計	死傷	全壊	半壊	倒壊	計	塀	塔	垣	石	崩	山	煙突倒壊	損害見積額
	人	畜														
小川町	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	250
大河村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	200
竹澤村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	150
八和田村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
大河原村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
槻川村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
七郷村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1,500
菅谷村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	800
玉川村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
明覺村	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
計	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	6

計	平大		
	大	大	平
	村	村	村
計	計	計	計
一	一	一	一
一	一	一	一
二	一	一	一
一	一	一	一
二	一	一	一
一	一	一	一
一	一	一	一
一	一	一	一
一	一	一	一
二	一	一	一
二、九〇〇			

秩父警察署管内

計	町村別	被害別				合計
		死者		重傷者		
		男	女	男	女	
計	計	計	計	計	計	計
一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一
一	一	一	一	一	一	一

備考

秩父町字上町地内縣道ニ長サ三間位ノ小龜裂三ヶ所、秩父町字坂水地内縣道ニ長サ三間位ノ龜裂一ヶ所、秩父町小田蒔村、皆野村、原谷村、野上村、日野澤村ノ各村土藏壁數ヶ所ツ、落チタルモ被害僅少ナリ
 國神村ニテハ治療日數全治迄五日間位要スル負傷ヲ屋根上ヨリ落石ニヨリ左手ニ受ケタリ
 日野澤村ニテハ三週間位要スル負傷ヲ畑耕作中山上ヨリノ落石ニテ右足首骨折セルモノアリ

大宮警察署管内

町村別	被害別	死者	傷者	合計	家屋倒壊			煙突	橋梁	堤塘	備考
					全壊	半壊	倒壊				
計											
大宮町		一	一九	一九							氷川神社、神池ノ石垣半壊石燈籠二十基倒ル、瓦屋根ノ門一ツ倒壊、三十七八年役記念碑倒壊
片柳村											
大石村											
計		一	一九	一九	一	二	一	一	一	一	

備考

一、見沼代用水の堤塘五百米破損
 二、傷者中三名は荷馬車驚奔のため
 三、火傷二名
 四、鐵道省大宮工場に於て稍重傷一名、同工場にて打撲傷八名
 五、外何れも輕傷
 六、各動力は三時間程休止
 七、大宮川越間電車、大宮野田間電車二時間余リ運轉不能

加須警察署管内

町村別	被害別	死者			重傷者			輕傷者			家屋倒壊			煙突			見積額	備考
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	全	半	倒	全	半	倒		
計																		
加須町																	石燈籠三ヶ所倒ル	

計	高柳村	不動岡村	元和村	東足村	種足村	豊野村	三俣村	死者			重傷者			輕傷者			合計			家屋倒壊			合計	煙突倒壊	損害見積額
								男	女	計	男	女	計	男	女	計	住家	非住家	計	住家	非住家	計			
1	1	1	1	1	1	1	1																		
1	1	1	1	1	1	1	1																		
1	1	1	1	1	1	1	1																		
1	1	1	1	1	1	1	1																		
2	1	1	1	1	1	1	1																		
2	1	1	1	1	1	1	1																		
2	1	1	1	1	1	1	1																		
4	1	1	1	1	1	1	1																		
1720	150																								
	石燈籠三ヶ所倒ル			墓石二個倒ル			土壁損壞三戸			土壁損壞七戸			石燈籠三ヶ倒ル												

羽生警察署管内

計	新都村	羽生町	死者			重傷者			輕傷者			合計			家屋倒壊			合計	煙突倒壊	損害見積額				
			男	女	計	男	女	計	男	女	計	住家	非住家	計	住家	非住家	計							
1	1	1																						
1	1	1																						
1	1	1																						
1	1	1																						
1	1	1																						
1	1	1																						
3	1	2																						
1	1	1																						
2200	1000	1200																						

川越警察署管内

計	勝呂村	芳野村	植木村	川越市	死者			重傷者			輕傷者			合計			家屋倒壊			合計	煙突倒壊	損害見積額	
					男	女	計	男	女	計	男	女	計	住家	非住家	計	住家	非住家	計				
1	1	1	1	1																			
1	1	1	1	1																			
1	1	1	1	1																			
1	1	1	1	1																			
1	1	1	1	1																			
1	1	1	1	1																			
1	1	1	1	1																			
1	1	1	1	1																			
2	1	1	1	1																			
7	三七〇〇圓																						

備考 本表以外に商品の破損等により生じたる損害見積額約四百圓

杉戸警察署管内

杉戸町 神社境内の鳥居、石燈籠、寺院の墓石、石材商の商品倒壊、各商店の商品等轉落し損害相當額に上る、杉一本折損、他に於ても戸障子の破損せるもの多數あり

百間村 寺院境内及墓石大部分倒壊す

須加村 瓦の損害約一百圓、其他墓石倒壊したるものあり

幸松村 小學校の硝子障子四十枚破損。大字八丁目地内に龜裂を生じ、砂及び水を噴出す

富多村 富多神社の燈籠破損す

提郷村 大字提根一五六番地内の道路數ヶ所龜裂を生ず。同字の井戸噴水あり、外に同様のもの數ヶ所あり。
備考 高野、八代、豊岡、櫻井、寶珠花、南櫻井、川邊、豊野、田宮の各村共棚上のもの轉落し、戸障子及び壁の破損、墓石の倒れたる等同様に相當あるも人畜に及ぼしたる被害なし

越生警察署管内

- 一、死者なし
 - 一、重傷者なし
 - 一、輕傷者男女別 男一名 入間郡大家村尋常小學校生徒森田義一郎當一三年左腕骨折
 - 一、家屋、全壊、非住家 土藏一棟
 - 一、同 半壊、非住家 土藏一棟
 - 一、煙突倒壊なし
 - 一、其の他土藏の壁の落ちたるもの四五 家屋壁、屋根瓦の落ちたるもの二〇、墓石倒壊等甚し
- 損害見積 千二百三十圓位

小鹿野警察署管内

- 一、菜畑に於て菜摘に従事中岩石崩壊のため負傷したるもの女二名
- 一、岩石崩壊し、倉尾村大字藤倉、絹笠神社屋根一部破損せられ損害見積約二拾圓
- 一、土藏の一部崩壊したるもの十一棟、龜裂を生じたるもの五〇棟、此の損害二百圓位
- 一、其の他道路に龜裂を生じたるもの(幅二寸、長さ三間深三寸)吉田町大字下吉田字上ノ原地内、及び長若村大字長倉地内(長さ三間、幅二寸、深さ三寸)三ヶ所

吉川警察署管内

- 一、被害の程度輕微にして壁に龜裂を生じ墓石の轉落したる程度にして被害少し

川口警察署管内

- 一、強震なりしも時計の止りたる程度にして被害なし

餘震の經過

今回の大震には一の前震とも見らるべきもの全く無かりき。大震直後より十月末日に至るまでの餘震の經過状況を以下に略記すべし。

二十一日強震襲來以來頻々として餘震相次いで來たり地盤の搖蕩甚だしく恰も大海の上に漂ふが如く同日夜半までには有感覺地震四十回を算へ百二十五回の無感覺地震を驗測せり。而して九月三十日までには有感覺地震八十一回、無感覺地震二百八十回を觀測し合計三百六十二回の多きに達したり。尙十月中の餘震状況を見るにその回数は頓に減じ十七回の地震を感じ三十六回の無感覺地震を觀測せり。之れを九月二十一日午前十一時二十分過ぎの強震直後より十月末日迄の餘震發現回數を見るに有感覺地震九十七回にして無感覺地震は三百九十七回に上ぼり、合計四百九十四回を算したり。尙ほ當所に於て觀測せる餘震中弱震程度以上のものを摘録せば次の如し。

- 弱震 九月二十一日 十五時二十四分〇八秒五
- 弱震 九月二十一日 十六時〇七分二十五秒八
- 弱震 九月二十三日 二十一時四十六分十秒六

熊谷ニ於ケル餘震回数表(有感覺)

時	日	九月	十月	合計
0	1	1	1	2
1	1	1	1	2
2	1	1	1	2
3	1	1	1	2
4	1	1	1	2
5	1	1	1	2
6	1	1	1	2
7	1	1	1	2
8	1	1	1	2
9	1	1	1	2
10	1	1	1	2
11	1	1	1	2
12	1	1	1	2
13	1	1	1	2
14	1	1	1	2
15	1	1	1	2
16	1	1	1	2
17	1	1	1	2
18	1	1	1	2
19	1	1	1	2
20	1	1	1	2
21	1	1	1	2
22	1	1	1	2
23	1	1	1	2
24	1	1	1	2
25	1	1	1	2
26	1	1	1	2
27	1	1	1	2
28	1	1	1	2
29	1	1	1	2
30	1	1	1	2
31	1	1	1	2
32	1	1	1	2
33	1	1	1	2
34	1	1	1	2
35	1	1	1	2
36	1	1	1	2
37	1	1	1	2
38	1	1	1	2
39	1	1	1	2
40	1	1	1	2
41	1	1	1	2
42	1	1	1	2
43	1	1	1	2
44	1	1	1	2
45	1	1	1	2
46	1	1	1	2
47	1	1	1	2
48	1	1	1	2
49	1	1	1	2
50	1	1	1	2
51	1	1	1	2
52	1	1	1	2
53	1	1	1	2
54	1	1	1	2
55	1	1	1	2
56	1	1	1	2
57	1	1	1	2
58	1	1	1	2
59	1	1	1	2
60	1	1	1	2
61	1	1	1	2
62	1	1	1	2
63	1	1	1	2
64	1	1	1	2
65	1	1	1	2
66	1	1	1	2
67	1	1	1	2
68	1	1	1	2
69	1	1	1	2
70	1	1	1	2
71	1	1	1	2
72	1	1	1	2
73	1	1	1	2
74	1	1	1	2
75	1	1	1	2
76	1	1	1	2
77	1	1	1	2
78	1	1	1	2
79	1	1	1	2
80	1	1	1	2
81	1	1	1	2
82	1	1	1	2
83	1	1	1	2
84	1	1	1	2
85	1	1	1	2
86	1	1	1	2
87	1	1	1	2
88	1	1	1	2
89	1	1	1	2
90	1	1	1	2
91	1	1	1	2
92	1	1	1	2
93	1	1	1	2
94	1	1	1	2
95	1	1	1	2
96	1	1	1	2
97	1	1	1	2
98	1	1	1	2
99	1	1	1	2
100	1	1	1	2

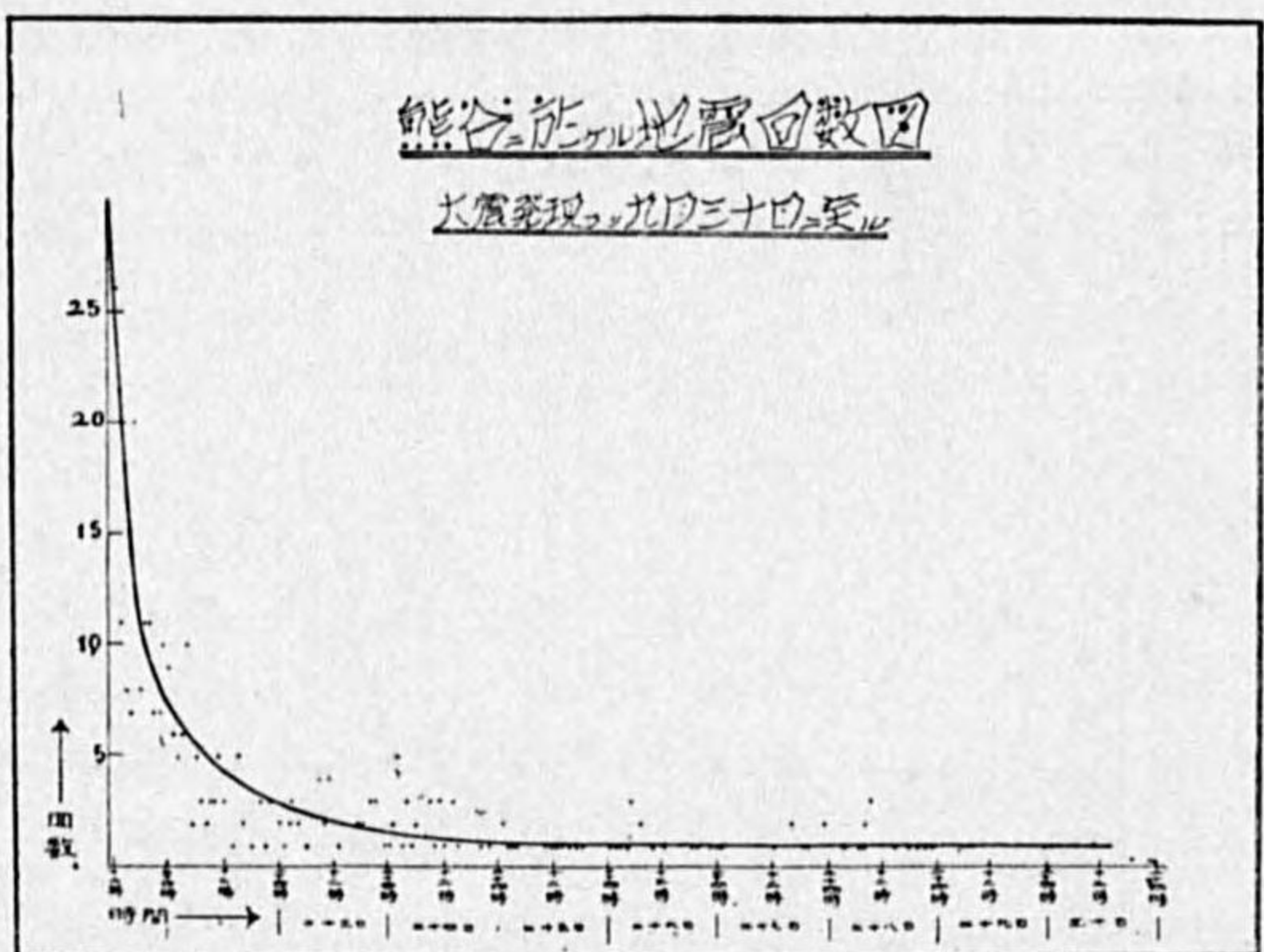
弱震 九月二十四日 一時二十二分三十四秒四
 弱震 九月二十四日 十三時十一分十一秒五
 強震(弱キ方)九月二十八日 十三時五十四分十九秒六
 強震(弱キ方)十月三日 二時三十六分四十九秒〇
 而して餘震中相當強かりしは九月二十八日十三時五十四分過ぎのものと十月三日二時三十六分過ぎのものにして孰れも小川町附近に震央を有せり、
 右兩個の地震要素を左に列記せん。

日	時	最大振幅	初期微動繼續時間
九月二十八日	十三時五十四分十九秒六	東西動西へ一二耗二 南北動南へ四耗九 上下動上へ一耗三	二秒九
十月三日	二時三十六分四十九秒〇	東西動東へ四十六耗三 南北動北へ三耗三 上下動上へ一耗六	二秒九

因みに秩父支所に於ける九月末日までの餘震回数は百二十二回に上ぼり、うち有感覺は五十三回にして無感覺地震は六十九回を驗測せり。(機器は中央氣象臺型簡單微動計に據る)

熊谷ニ於ケル餘震回数表(無感覺)

時	日	九月	十月	十一月	十二月	合計
0	1					0
1	2					1
2	3					2
3	4					3
4	5					4
5	6					5
6	7					6
7	8					7
8	9					8
9	10					9
10	11					10
11	12					11
12	13					12
13	14					13
14	15					14
15	16					15
16	17					16
17	18					17
18	19					18
19	20					19
20	21					20
21	22					21
22	23					22
23	24					23
24	25					24
25	26					25
26	27					26
27	28					27
28	29					28
29	30					29
30	31					30
31	32					31
32	33					32
33	34					33
34	35					34
35	36					35
36	37					36
37	38					37
38	39					38
39	40					39
40	41					40
41	42					41
42	43					42
43	44					43
44	45					44
45	46					45
46	47					46
47	48					47
48	49					48
49	50					49
50	51					50
51	52					51
52	53					52
53	54					53
54	55					54
55	56					55
56	57					56
57	58					57
58	59					58
59	60					59
60	61					60
61	62					61
62	63					62
63	64					63
64	65					64
65	66					65
66	67					66
67	68					67
68	69					68
69	70					69
70	71					70
71	72					71
72	73					72
73	74					73
74	75					74
75	76					75
76	77					76
77	78					77
78	79					78
79	80					79
80	81					80
81	82					81
82	83					82
83	84					83
84	85					84
85	86					85
86	87					86
87	88					87
88	89					88
89	90					89
90	91					90
91	92					91
92	93					92
93	94					93
94	95					94
95	96					95
96	97					96
97	98					97
98	99					98
99	100					99

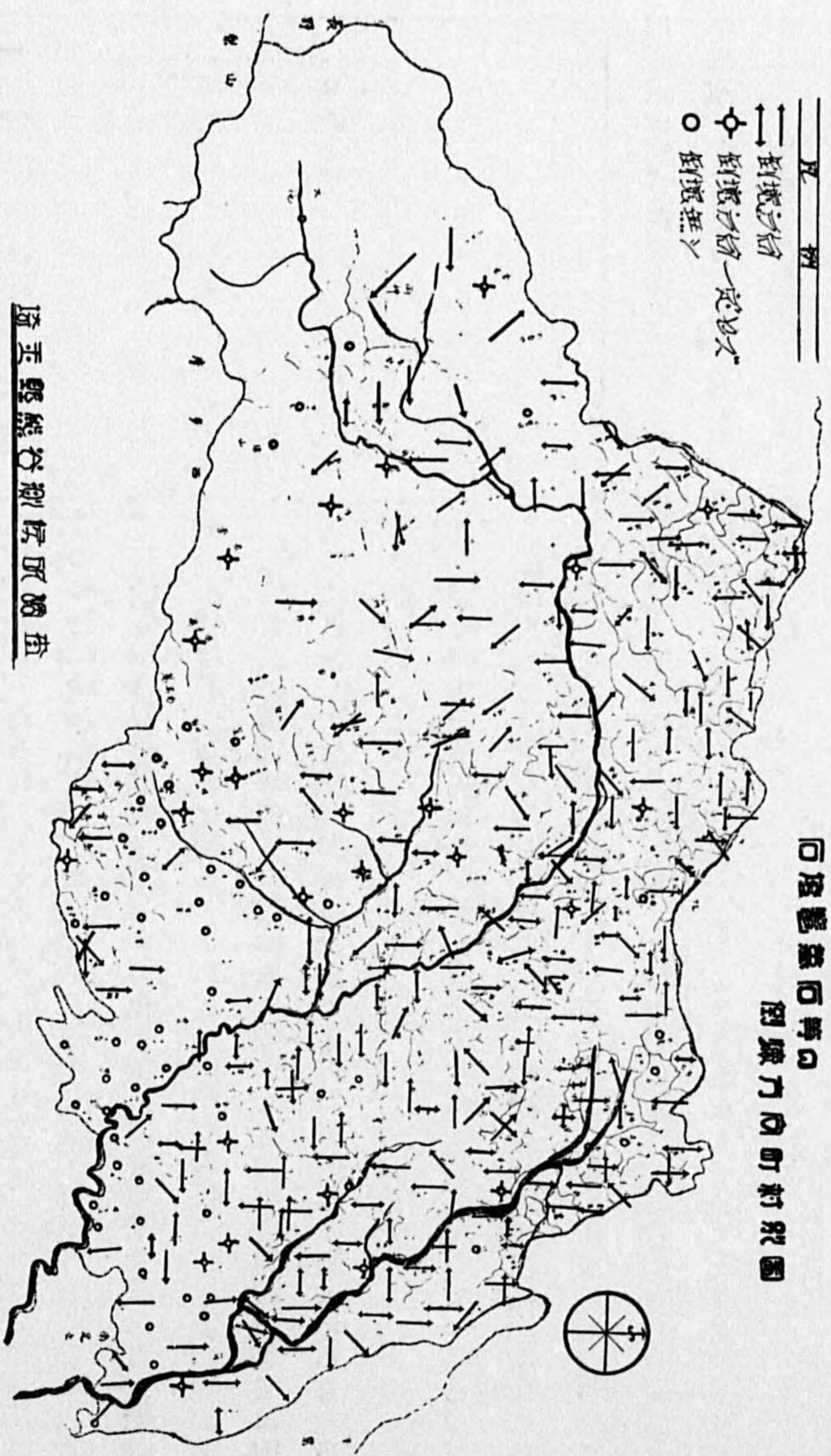


西埼玉強震の餘震經過を明瞭ならしめんが爲め熊谷に於ける餘震回数圖を附せり、更に有感覺、無感覺に分ちて十月二十三日迄の毎時間の發現回数を表示せり。

石燈籠墓石等の倒壊方向 本調査も所員の實地踏査及三百六十餘の小學校長の調査に據るものにして熊谷町附近にては石燈籠、墓石は東方に倒伏せるもの極はめて多かりき。震央地附近にては南又は北若くは北西、南東の方向に墓石、石燈籠の倒伏せしもの多きが如し。

縣北西部、兒玉郡下にては南北の方向に倒れたるもの多し。兒玉郡東部より大里郡を経て北埼玉郡に到る利根川沿岸筋にては東西に走向して倒損し、吹上村以南の荒川の左岸各町村より元荒川流域に到る區域即ち北足立郡の大部分は東西の向きに墓石等の倒伏を見たるも、縣南東部の地域即ち北葛飾、南埼玉の兩郡及北埼玉郡の東部等にては南北に倒れたるもの多きが如し。而して入間郡の大部分にては墓石、石燈籠の轉倒破壊は極めて尠なかりき。

参考のため墓石、石燈籠の倒壊方向調査圖を掲記すべし。



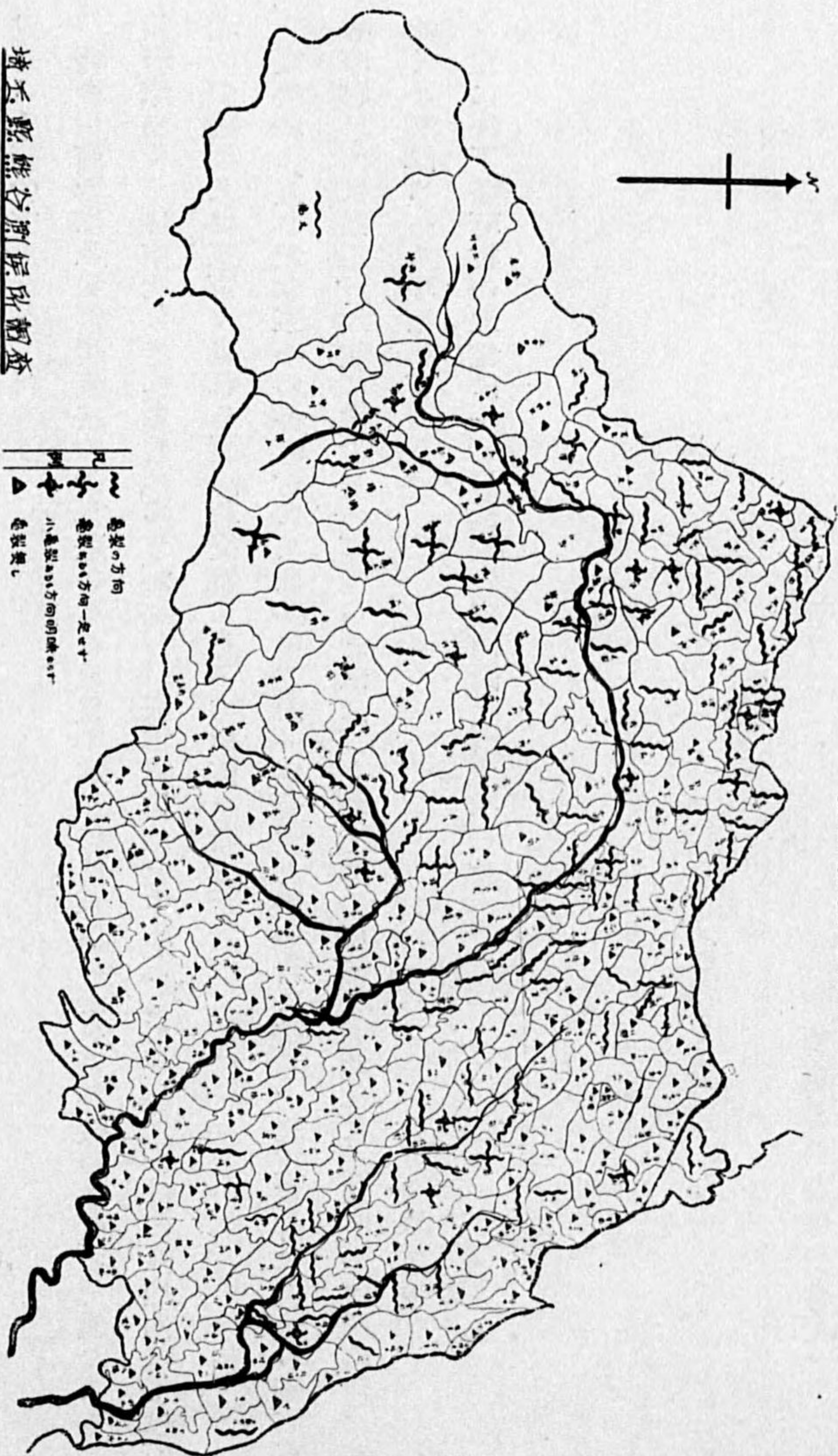
地盤龜裂の方向 本所員の震害地踏査報告及縣下各町村小學校長を通じての調査回答等に據り地盤に生
成せる龜裂の方向を知り得たり。

利根川南沿岸及元荒川流域の如き脆弱なる地盤の處にては東西に走れる龜裂の生ぜるを視たるも、荒
川沿岸筋にては南北に走れるもの多きが如し。強震震央地を中心として半徑二十軒の區域内にては南
北向の龜裂又は東西に走れる裂罅相交錯しその方向區々なり。

震央地に近き秩父東部の各町村にては其の方向一定せずとの報告に接し、又東京府に接せる縣南東部
各町村にては殆んど地盤に龜裂を見ざりしと云ふ。北埼玉郡の中部より北部にかけての數箇町村にては
全く小裂罅さへも現はれざりし。

左に縣下各町村の地盤に生ぜし龜裂の方向圖を附すべし。

本町村別濁水方面圖



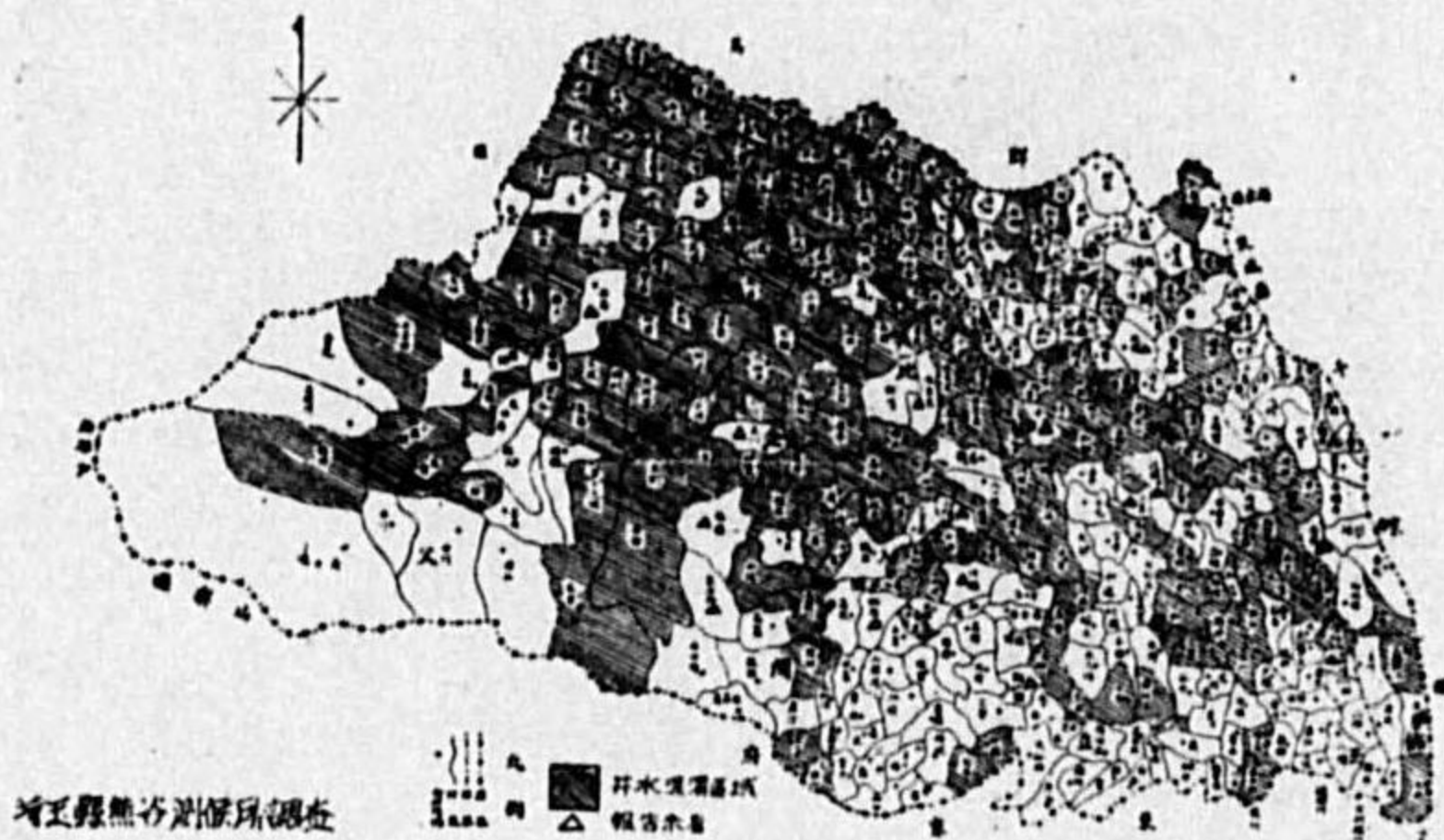
本町村別濁水方面圖

井水の混濁 稍々顯著なる地震に於ては震央地附近の井水には通例混濁を來たし、暫時の間は之れを飲用すること不可能ならむも、今回の如き強震に於て縣下の井水は一般に混濁を來たし、清澄するまでには相當の時間の経過を必要としたらん。

縣下三百六十餘町村の小學校長宛に「井水の混濁の有無」の問合せをなしその回答により縣下の混濁區域圖を得たり。強震直後井水使用の必要に迫まれ之れが汲み上げをなしたらんには、縣下井水の大半或は極く少數の井戸水を除きては殆んど全部に混濁狀況を呈したらん。されど暫時間の後井水を汲み上げし時には清澄に歸したる地方もあるべく、又混濁の程度軽く餘程注意深き者の他には混濁のありしを氣付かざりし地方もありしならむ。この「井水の混濁の有無」に關する調査には「時間」「注意」等の事項が問題になるべきも、附圖は縣下の井水濁濁に關する大勢を知るに足るべきものならむ。

縣の西部南部及北埼玉郡の北部等には井水の混濁を蒙らざりし處あり、地質の硬軟等關係する處頗る大にして震度分布圖の強震(弱キ方)區域に略々似たるものあり。また龜裂調査圖の龜裂の無き地方とかなりよく一致せるを知る。

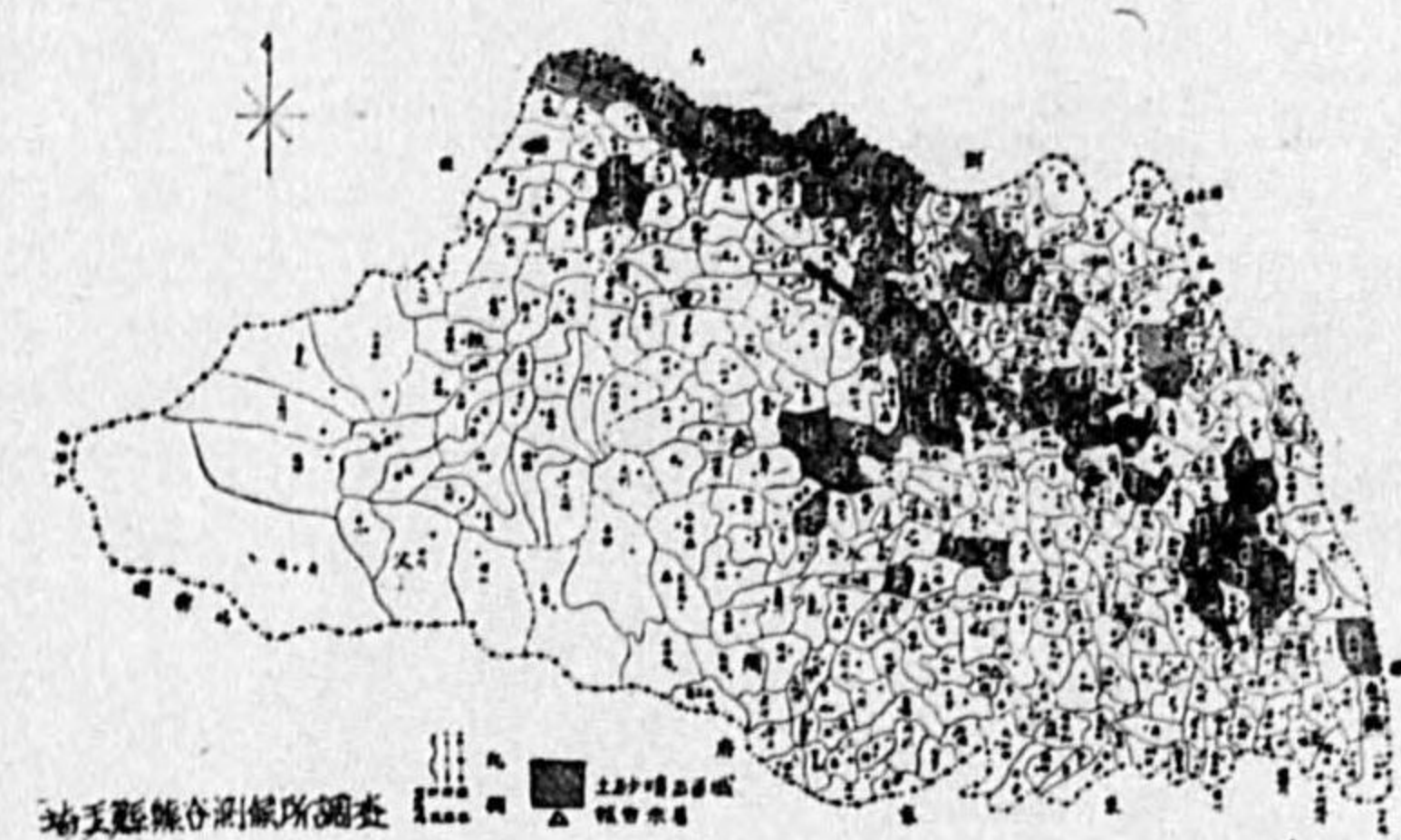
井水混濁區域圖



井水混濁區域圖

土砂の噴出 縣北部兒玉、大里、北埼玉各郡下の利根川南縁に當る各町村並びに熊谷町以南北足立郡馬室村に到る荒川兩岸各村落、舊荒川流域に當る南北埼玉郡の町村、荒川の支流たる槻川、高麗川の下流域

土砂噴出區域圖



の如き地盤の脆弱なる區域、所謂沖積地帯にては今次の強震に當りその搖蕩激甚なりし爲め、地下水は排出され地表面高く昇騰せる處多かりき。是等の地域内にては田と云はず畑と云はず道路庭園等到處に小裂隙を生じ、地下水は土砂を伴ひて其處より噴出せるにより、強震直後は到る處に泥水漲溢し宛も洪水の如き景況を現出したり。又地下水の噴出の最も旺盛なりし頃には、利根川南縁筋にては高さ四尺にも達したりと云ふ。地盤の振蕩漸次収まると共に地下水の噴出も次第に弱まり、遂に全く歇む頃には伴はれて噴出されたる細砂は裂隙の周邊に堆積し、整正なる圓錐形狀をなしその頭部のみ凹形を呈し、龜裂裂隙線上に幾基も併立せるに至りしならん。

噴出されたる細砂は一様の色彩を呈せず、多様の色合を有し青色のものあり、褐色のもの黒色を呈せるもの等あり。砂粒は極めて微細にして淺間山噴火の際當地に於て蒐集せる降灰に酷似せる程の微粒のもの多し。只だ兒玉郡藤田村の噴砂は他のものに比し極はめて大粒のものなりき。

噴出されたる土砂の多くは石英、長石の混合より成り大理石、蛇紋石、柘榴石等も微量に含有せられ居るも、木根草皮等は全くその片影をも検出し得ざりしと云ふ、左に各郡に於ける土砂の噴出せる町村を列記し其の下に噴砂の色合を附記すべく、尙ほ附圖として土砂噴出區域圖を掲記せん。各町村の噴砂の狀況は本所員の踏査に據るもの、外は當該町村の小學校長よりの報告に據りたり。縣下三百六十餘箇町村の校長先生に對しその厚意を感謝す。

縣下土砂噴出區域及其の色合

南埼玉郡

- 大田村(黒白色)粕壁町(青色)櫻井村(青色)大山村(淡綠色)篠津村(薄青色、赤色)和土村(砂普通色)平野村、黒濱村(青色)川通村(青色)新和村(綠色)三箇村(薄青灰色)栢間村(青色)大澤町(黒色)新方村(濃青色)

北葛飾郡

- 幸松村(青黒色)堤郷村(普通ノ土色)三輪野村(綠色)櫻田村

大里郡

- 熊谷町(赤褐色)秦村、八基村(南部ハ赤色、北部ハ青色)市田村(濃キ鼠色)新會村、太田村(青灰色)大

寄村(灰白色、青色、褐色)明戸村(黄色)妻沼町、奈良村(黒、青色、黄褐色)久下村(青色)中瀬村(赤黄色)佐谷田村(赤色)長井村(青色)男沼村(赤色、青色)市田村(灰綠色)吉見村(灰綠色)

北埼玉郡
星宮村(青色)太井村(淺黄色)志多見村(褐色又ハ青色)須影村(薄藍色)加須町、新郷村、北河原村(青色)中條村、太田村(暗青色)下忍村(青色)

北足立郡
小針村(青黑色)常光村(青色)吹上村(青色、赤褐色)小谷村、鴻巣町(青色)馬室村(青色)

入間郡
入西村(赤褐色)芳野村(青色)田面澤村(青色)植木村(赤色)

児玉郡
丹莊村、東兒玉村(青黄色)旭村(赤褐色)藤田村(褐色)仁手村(茶褐色)賀美村(薄青色)松久村(青色)神保原村(青色)

比企郡
唐子村、高阪村、北吉見村(青色)東吉見村、南吉見村(青色)野木村(青色)

噴砂の理化學的分析 當所に於ては強震に當り各地に於て噴出せる土砂に關しては可及的に蒐集せり。

又南埼玉郡平野村小學校長杉崎信之氏の如きは同村駒崎綾瀬川沿岸にて採取せる噴砂を郵送し來たり、縣南東部の噴砂を知るに頗る好都合なりき。

噴砂の性質を知り且つは地下幾何の深層より噴出せるものなるやを知悉せんが爲め、吹上村大芦の他四箇所より所員の持參せるものを縣農務課肥料検査室に回送依托し、物理的並びに化學的に分析を行ひ、次の如き結果を得たり。農務課關根屬並に肥料検査室埼玉縣技手澤田賴政氏の厚意を感謝す。

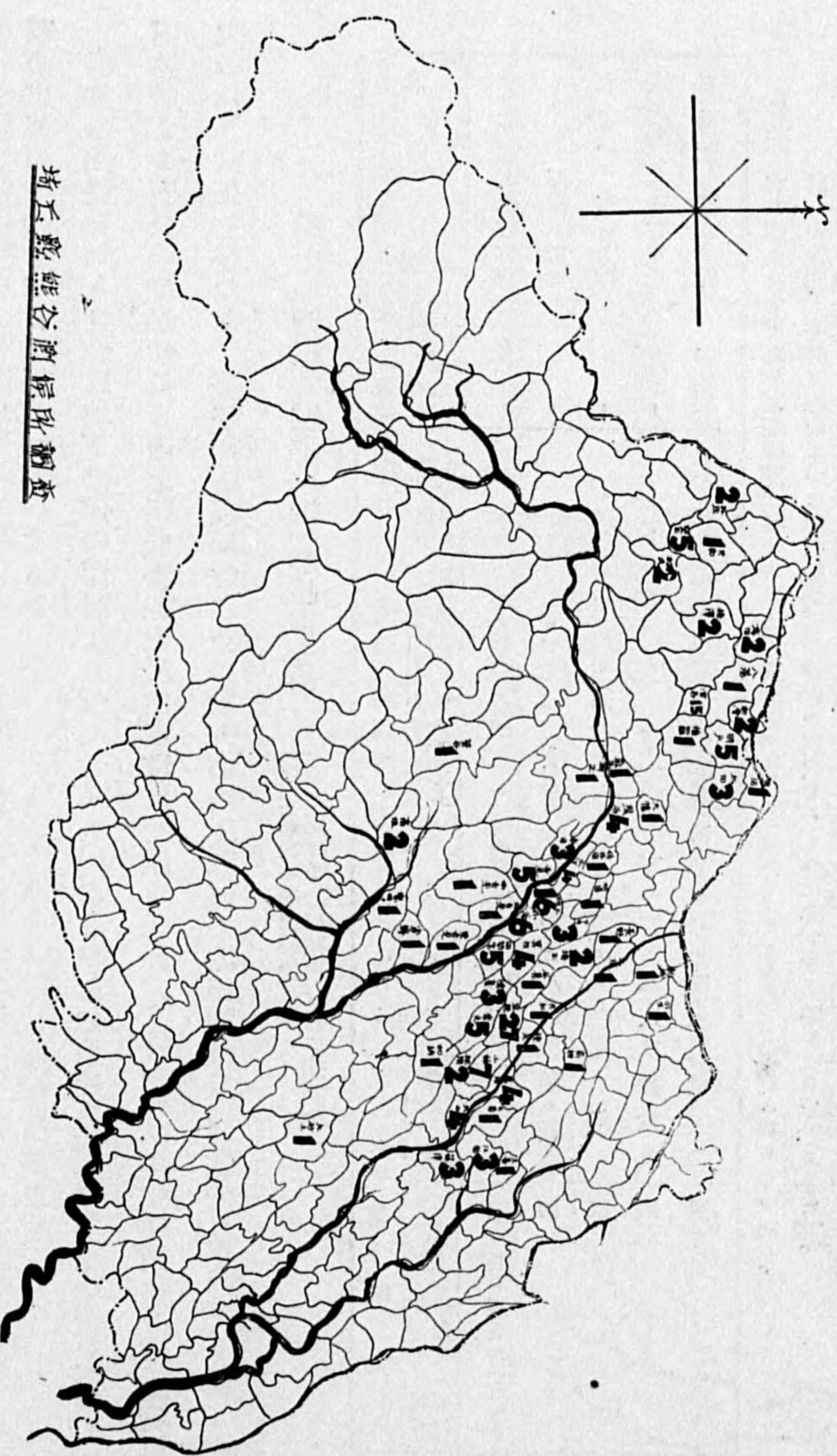
(一) 砂土の物理的鑑定成績(本品百分中) (埼玉縣農務課肥料検査室 埼玉縣技手澤田賴政氏分析に據る)

産地	粗砂		細砂		其他鑑定	
	二・〇耗以上	二・〇耗以下	〇・五耗以上	〇・五耗以下	鐵	鍍
北足立郡吹上村大芦					無	主として石英、長石なり
同村上野地					無	
大里郡吉見村		一・三三	四・三七	一・〇八三	極々微量	同
大里郡大寄村戸森				一・一六六	無	同
兒玉郡藤田村	二・四三	六・四五	一七・三三	一九・二五	微量	同
合計						
			四・五七	九五・四三		
			二〇・九七	七九・〇三		
			一・一一	九八・八九		
			四五・四六	五四・五四		

備考 右各砂土は第四紀沖積期新層に屬する河成水積土 (Fluvial, Aquatic, Silt) と認めらるゝものなり。但し大里郡大寄村戸森のものは第三紀新層の砂岩の崩壊せるものに非ずやと認めらるる點ありたり。

(二) 砂土の化學的分析成績(本品百分中)

町村別家屋(住非住)全滝数



埼玉県熊谷市河川調査

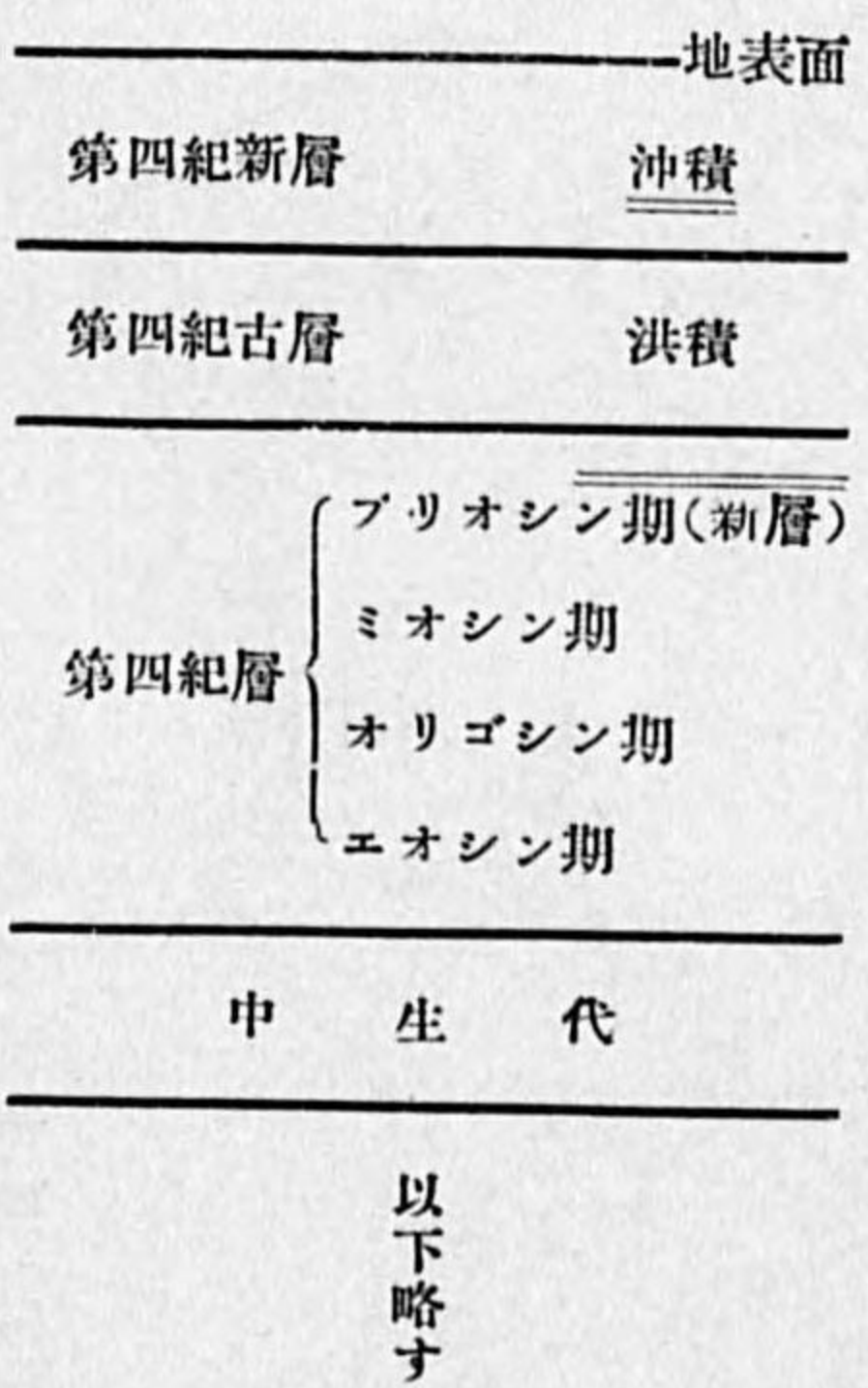
町村別家屋(全滝.平滝)即滝数



埼玉県熊谷市河川調査

産地別	鹽酸に不溶する物質	鹽酸に溶解する物質	鐵及アルミナ	滿飽鹽類	石灰鹽類	苦土鹽類	磷酸鹽類	硫酸鹽類	化合物
北足立郡吹上村大芦	八九・四四	一〇・五六	稍多量	不檢出	微量	微量	極々微量	不檢出	稍微量
同村上野地	八八・〇六	一一・九四	〃	〃	〃	〃	〃	〃	極微量
大里郡吉見村	九〇・三七	九・六三	〃	〃	〃	〃	〃	〃	稍微量
大里郡大寄村戸森	八四・六九	一五・三一	多量	〃	〃	〃	〃	〃	極微量
兒玉郡藤田村	八三・四七	一六・五三	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

右各砂土中大里郡大寄村戸森及兒玉郡藤田村のものは肥沃なるも其の他は肥沃ならず。
参考 土層横断面略圖



供試の砂土は圖中 / を描きたる箇所のものゝ如し。

縣下の倒壊家屋に就いて 縣内二十七警察署の調査に據る管内町村別被害表により、縣下の家屋倒損状況を悉知し得たり。

縣内の家屋全壊數は住家六十三戸、非住家百九戸を算へ又家屋の半壊數は住家百二十三戸、非住家百五十七戸に達して全縣下の半潰及び、全壊總數は四百五十二戸に及べり。

縣下各町村中半潰及び全壊家屋(住、非住合計)の最も多かりしは北埼玉郡笠原村の七十八戸(九月二十日現在戸數の七%三)にして北足立郡吹上村の五十一戸次位たり。大里郡深谷町の三十五戸は第三に位する多數にして北足立郡鴻巣の三十戸は第四位たり。

左に是等の倒潰家屋數と現在戸數との比を百分率に示さん。而して各町村に於ける住家、非住家の現在戸數は當所より各町村役場宛に九月二十日現在を照會せる回答に基く數値なり。

郡名	町村	全潰		半潰		合計	住家、非住家	戸數	百分率
		住家	非住家	住家	非住家				
北埼玉	笠原	一〇	一七	三七	一四	五一	七八	一、〇七四	七、三
北埼玉	吹上	一二	四	一六	一	三五	五一	一	一、二
大里	深谷	七	八	一五	一一	二〇	三五	三、〇三五	一、四
北埼玉	鴻巣	一	三	四	一	二	三	二、〇八二	一、三
北埼玉	立川	二	四	六	七	一三	二〇	七五三	三、一
南埼玉	林	二	五	七	二	九	一五	九七七	一、五

北	北	兒							
足	足	玉							
立	立	常							
田	常	兒							
間		玉							
宮	光	玉							
			一	二	四	五	五	二	七
			六	三	六	一	三	四	一
			六	五	一	二	五	七	三
			一	二	三	五	七	一	二
			三	五	四	七	一	二	三
			四	七	一	二	三	三	三
			一	〇	一	二	三	三	三
			七	〇	七	七	八	一	〇
			七	〇	七	七	八	一	〇
			一	四	一	五	〇	四	四

住、非住の家屋に區別せずして而も全潰、半潰の家屋數の十戸に満たざるものは百分率は千分の三或

ひは四の程度なるにより本文には之を省略せり。今次の最高率は笠原村の七パーセント餘なるにより北伊豆烈震の際の倒潰家屋百分率最高(八〇%位)に比し遙かに低率なりき。

縣下の震度分布 中央氣象臺派遣員國富技師、本多技師、加藤、岡兩技手の震災視察談、本所員の震害地踏査報告、及び管内氣象觀測所よりの逸早き今回の強震概況の通報等に據り震度の分布はかなり明白に判明せり。尙全縣下の模様を更に精細に知らんがため、縣下二十有餘の各警察署長に移牒し、管下各町村の被害状況の回報を求め、更に縣下三百六十餘町村の小學校長宛に今次の強震當時墓石、石燈籠の倒壊の有無(若しありし場合はその方向)地面に龜裂の有無(若し有りし場合はその方向)其他に關して問合せをなし、夫等の回答に據り精



細に調査し以て附圖「震度分布圖」を得たり。

縣の西部にて群馬、長野、山梨の諸縣に境する秩父郡下は割合に震動強からずして、縣南部の入間郡北足立郡の東京府下に接する地方と共に強震(弱キ方)の程度なるべく、北埼玉郡の群馬縣境近くの數ヶ町村も亦振動強からざる模様なり。其の他の地方は一帶に強震區域に抱合せられ、壁に龜裂を生じ石垣の倒潰、墓石及び石燈籠の轉倒は到る處にあり古き家の半壊も諸處に見受けられたり。

北足立郡吹上村より小谷、田間宮の兩村、南埼玉郡笠原村、常光村等の本縣中部地方は最も震動の強かりし地域にして家屋の倒潰、壓死者を出だしたる等により烈震の區域たるべく、縣北部大里郡深谷町より隣接明戸村に亘りても數十の倒壊家屋あり、數人の死者を出せるにより烈震の程度なるべく、又兒玉郡兒玉町、金屋村等も亦烈震の區域たるべし。而して是等吹上村―笠原村の區域深谷町附近兒玉町附近の烈震地帯と熊谷町附近との震度強烈の程度を最大加速度(推定値)により對比して参考に供せん。

- 吹上村―笠原村九〇〇―一〇〇〇 (耗/秒²) 兒玉町八〇〇―九〇〇 (耗/秒²) 深谷町七〇〇―八〇〇 (耗/秒²)
- 熊谷町六〇〇―七〇〇 (耗/秒²)

震央地及震源の深さ

強震突發後各地方測候所より提供せられし貴重なる觀測成績に據り種々なる方法を以て震央地を求めたり、是れに由れば震央地は熊谷の南西方約十二軒の地點小川町附近と推知決定され中央氣象臺の調査

に據る東經百三十九度十八分北緯三十六度二分の地點と略々同一地域なりとす。

尙震源の深さは前記の觀測成績により走時曲線圖上より測定せば地表面より約十七、八籽を有し淺所に起發せしもの如し。中央氣象臺國富技師の調査報文に據れば十數籽なりとし、又同臺鷺坂、石川、岡三技手の調査に據るときは十籽以上二十籽以内なりしと云ふ。孰れにしても本回強震の震源の深さは地表面より二十籽を超えざる比較的淺き處に起りしことは想像に難からず。

發震機構

今回の強震にて被害の激しかりしは利根川流域及熊谷以南の荒川筋なり。そのうち深谷町、吹上村、笠原村、小林村等は震動最も激しく兒玉町も亦可成りの被害を見たるにより激震地たりしことは察知するに難からず。忍町、熊谷町、鴻巣町附近は之れに亞ぎ寄居町より小川町に亘りては古生層の所謂三波川層と稱する極はめて堅牢なる地盤より成るにより被害として特記すべき程のものなく僅かに土藏壁の墜落、石燈籠の倒伏を見たる程度なり。小川町より更に槻川村方面の山地に入りては被害更らに僅少となりこの強震の震央地域にありながら不安定なる石燈籠墓石等も尙ほ倒伏を免れ弱震程度の震動なりしを思はしむるに充分なりとす。

現在の利根川は關東山地に發し南東方に流れて太平洋に注入し、荒川は別流となり關東の山地より南東方に流域をつくり東京灣に朝するも太古草昧治水事業の充分に行はれざりし頃に於ては本縣北半部は

所謂舊利根の流域なりしなるべく山地よりの土砂は是等の流域内に沈澱し、沖積層上に建設せられたる町村は地盤脆弱のため震動著しく大にして不幸今回の強震にあたりては土砂及地下水の噴出堤防の龜裂を生じ家屋に相當の被害を見たり。又震央地域たる槻川都幾川の抱擁する山地方面は何等被害の見るべきものなかりしは全く地質關係に據るものにして、今後同地方に地震の發生を見るとしても三波川層の如き堅牢なる地盤上にありては家屋の倒潰及死傷者を出す如き悲惨なる狀況を現出するが如きことは萬なかるべしと思推せらる。

今回の強震の發震機構を見るに各地の初動方向は前出「初動方向分布圖」により明瞭なるが如く斷層地塊が水平に運動せる結果として生じたるものなり。震央地附近の倒伏又は移動せる物體の方向より推察して當時の震動が東—西にありたること。地形上より見て寄居町の南東方に起り大岡吉見方面に走向せる第三紀層が略東西に走り太古斷層のありしかを思はしめ、既往この地方に發震せる小地震の震源は荒川流域槻川流域に沿ひて東西に分布したる等により今回の強震は槻川を境界として其の南方の斷層地塊の東方運動と北方斷層地塊の西進運動に起因するものと思推せられ、又大局的に各地の初動分布圖より見るときは秋田附近より南に走り伊豆半島の西部を縦斷せる假想の線と銚子附近より西行し金澤附近より日本海に入る假想線とは本縣下西部即ち熊谷町の南西方と秩父町の北東方と殆んど等距離の地點にて相合するを認められる。此の交點は即ち今回の強震の震央地と推定せらるべき地點なり。而して圖中初

動の方向(↓)が第一象限にては南西に、第二象限にては北西に、第三象限にては北東に、第四象限にては南東に向ふにより今回の強震は銚子-金澤線、秋田-伊豆三島線を境とせる斷層地塊の運動によるものと思はれ幾多の事例により銚子-金澤を連絡すべき線の北方地塊が西方に又その線の南方地塊が東方に推移せる結果發せしものなるべし。

過去の記録 頼朝の鎌倉に幕府を開きてより關東の地震記録も漸く整ひ八十七年間に總數百九回に達し、そのうち強震のみにも三十六回に上ぼりたり。更に徳川家康の江戸の地に幕府を置きてより愈々その記事史料も豊富となり、大日本地震史料に據れば文祿元年より慶應三年に至る二百七十五年間に強震以上のもの約五十回あり、破壊的のもの十五回以上に達したり。而して是等の地震はその震源を東海の濱又はその海岸に近き陸地に有し、今回の強震の如く武藏國北西部に震源のありたるは太古はいざ知らず近世時に於ては極めて稀れなる現象に屬し未だその記録を有せざるが如し。今一步をゆずり地震の起發ありたりとするも是等の地方の地盤は頗る堅牢なるに因り著しき慘狀を呈せず、従つて文献記録に留らざりしなるべし。

左に有史以來武藏國に被害を齎せしと思はるゝ大地震の記録を震災豫防調査會刊行の本邦大地震概要より摘記すべし。

有史以來武藏國に被害ありし大地震

年	代	西	曆	震	央	地	記	事
弘仁九年	七月	八	一八、八、	關	東	山崩れ谷埋ること數里、死者百餘計ふ可からず、相模武藏等に甚しく公私の屋舍破到し、死者象し一つも全きものなし		
元慶二年	九月二十九日	八	七八、一一、一	關	東	鎌倉の地大いに震ひ、大地裂け、倉屋破壞す		
建保元年	五月二十一日	一一	一三、六、一八	鎌	倉	鎌倉の地震ひ、大地裂け、所々門扉架垣等顛倒す		
安貞元年	三月七日	一一	二七、四、一	鎌	倉	鎌倉の地震強く、海嘯由比濱の八幡宮拜殿を壞る		
仁治二年	四月三日	一一	四一、五、二二	鎌	倉	鎌倉の地大いに震ひ、神社佛閣民屋顛倒す、山岳崩落		
正嘉元年	八月二十三日	一一	五七、一〇、九	鎌	倉	鎌倉大地震、谷々山々崩壞し、倉屋顛倒す		
永仁元年	四月十三日	一一	九三、五、二七	鎌	倉	鎌倉大地震、地裂け、所々門扉架垣等顛倒す		
永享五年	九月十六日	一一	四三、一一、七	相	模(會津)	鎌倉大地震、地裂け、所々門扉架垣等顛倒す		
明應七年	八月二十五日	一一	四八、一一、二〇	東	海	伊勢國大湊にては家千軒津浪に押し流され、五千人溺死、鎌倉にては水勢大佛殿、由比濱にては二百人溺死す、濱名湖口壞れて湖水と潮海相通す		
大永五年	八月二十三日	一一	二五、九、二〇	相	模	鎌倉由比濱の江河埋没して平地となる		
慶長九年	十二月十六日	一一	〇五、一、三一	上總	安房、武藏、相模	房總山崩れ、東海道より紀伊土佐大隅薩摩沿岸津浪、津浪の殊に甚だしかりしは房總半島の外面部にして海上俄かに潮引きて三十餘丁干潮となれり、土佐國突噴して三千八百六人溺死者を出せり		
元和元年	六月一日	一一	一五、六、二六	江	戸	倉屋倒れ死傷多し		
寬永五年	七月十一日	一一	二八、八、一〇	江	戸	強震あり、江戸城石垣所々崩れる		
寬永七年	六月二十三日	一一	三〇、八、一	江	戸	江戸強震あり、西丸門口石垣等少しく崩れる		
寬永十年	一月二十一日	一一	三三、三、一	小	田	城郭破損し、市内潰家夥しく死者百五十人		
寬永十二年	一月二十三日	一一	三五、三、一二	江	戸	強震長屋塀等少しく損し、増上寺の石燈籠悉く轉倒す		

慶安二年七月二十五日	一六四九、九、一	武藏	川崎驛の人家百軒潰る
寛文十年六月五日	一六七〇、七、二	相模國大住	民家百餘軒潰る、植田二百町損す
元祿十年十月十二日	一六九七、一、二五	相模、武藏	鎌倉八幡宮の堂社華表及び民家傾倒す江戸城平川口梅林坂田門の石垣崩る
元祿十六年十一月二十三日	一七〇三、二、三一	武藏、相模	濱邊八、九町乃至一里程干瀉になる
嘉永六年二月二日	一八五三、三、一一	小田原	潰家三、三〇〇軒、死者七九名、大砲臺場三ヶ所破損
安政元年十一月四日	一八五四、二、二三	東海	倒潰及流出家屋約八、三〇〇戸、墜死者三〇〇人、溺死者三〇〇人全潰區域は伊豆西北端より駿河の海岸に沿ひ天龍川口附近に達する延長約三十一里、津浪は房總半島より土佐灣に及ぶ津浪の最も激烈なりし伊豆下田にては流出六〇〇軒
安政二年十月二日	一八五五、一、一一	江戸	潰家一四、三四六軒、死者約七、〇〇〇人、市内にて二、三の二一人、津浪あり、近郊龜有にては田畑の内に山の如きもの一時に出来し、側に沼の如きものを生ず
明治廿七年六月二十日	一八九四、	東京	死者二六名、全潰一九棟、煙突倒潰一七一本
大正十二年九月一日	一九二三、	關東大地震	全潰家屋一一二八、二六六戸 半潰家屋四四七、二八三戸 燒失家屋四九、三八八戸 流失家屋四三、四七六戸 行方不明者四三、四七六戸
大正十三年一月十五日	一九二四、	相模國丹澤山	死潰潰者一、二九三戸 半潰潰者五、二三五戸
昭和五年十一月二十六日	一九三〇、	北伊豆	死潰潰者二、六一人 行方不明者五、七一人 半潰潰者五、一六五戸 全潰潰者五、一六五戸

明治以後死者十六名以上ありし地震 今回の強震に際し不幸十六名の貴き生命を隕したり。對照する意味に於て左に明治初年以來本邦に於ける死者十六名以上に達したる著名なる地震を死者の多數なるものより順次に列記せん。

昭和六年九月二十一日	一九三一、	武藏北西部	死潰潰者一、一六名 輕傷者一、一五名 輕傷者一、一五名 全潰潰者一、一五名 半潰潰者一、一五名 煙突倒潰一、一五名
大正十二年九月一日	關東地方	九九、五九七	行方不明四三、四七六人、全潰家屋一二六、二三三戸 燒失家屋四四七、二八八戸、流出家屋八六八戸
明治二十九年六月十五日	三陸大津浪	二一、九五三	津浪による被害家屋一〇、三七〇棟
明治二十四年十月二十八日	濃尾地方	七、二七三	全潰家屋一四二、一七七棟
昭和二年三月七日	奥丹後	二、九一四	全潰家屋四、九四二棟、全燒家屋三、七〇〇棟
明治三十九年三月十七日	臺灣嘉義	一、二五八	家屋全潰六、七六九棟
明治二十七年十月二十三日	庄内	七、二三	全潰家屋二、七七七戸、燒失家屋一、四八九戸
明治五年二月六日	島根縣濱田町	六、三四	倒家四、五九二軒、燒失家屋三三二軒
大正十四年五月二十三日	津居山港沖合(北但馬)	三、九〇	全潰家屋一、三三五戸、全半燒三、七〇〇戸
昭和五年十一月二十六日	北伊豆	二、六一	傷者五七二名、行方不明一名、全潰二、一六五戸、半潰五、五一六戸、全燒七五戸、浸水二二戸、

明治二十九年八月三十一日	陸羽	二〇九 全潰四、三八七棟
明治三十七年十一月六日	臺灣水道	一四五 全潰家屋六一戸
大正三年三月十五日	秋田縣仙北郡	九四 全潰家屋六四〇戸、半潰五七五戸
大正六年一月五日	臺灣南投	五四 家屋全潰一三〇戸
明治四十二年八月十四日	滋賀縣姉川(江濃)	四一 傷者七八七名、全潰家屋九七六戸 半潰五、一四五戸
大正十一年十二月八日	有明千々岩灘	二七 住家半住家の全潰六五四戸
明治二十七年六月二十日	東京	二六 全潰家屋一九戸
大正七年十一月八日	千島得撫島沖	二三 得撫島岩美灘にて津浪のため二三名行方不明となる
明治二十二年七月二十八日	熊本市附近	二〇 潰家二〇〇軒
明治三十八年六月二日	臺灣海峽底	一九 傷者二九八名、全潰一〇六戸、半潰五二四戸
大正十二年一月十五日	相模丹澤山塊	一九 全潰家屋一、二九二戸、半潰家屋五、二三五戸
明治三十四年八月九日	陸奥八戸	一八 潰家八棟、家屋破損六一五棟
明治三十九年四月十四日	臺灣店仔口	一七 家屋全潰一、七九四戸
大正五年八月二十八日	臺灣南投	一六 家屋全潰六一四戸
昭和六年九月二十一日	武藏國北西部	一六 重傷三一名、輕傷一一五名 全潰二〇七戸、半潰二八五戸、煙突倒潰一三三

報 告

西埼玉強震地域踏査報告

氣象臺技手 本 多 弘 吉
同 岡 四 四 亥

九月二十一日午前十一時二十分頃東京地方では近頃珍らしい強震(弱き方)を感じた。本臺に於ける観測及び各測候所よりの電報に基いて按ずるに、震央は東京を距る北西約六十軒、埼玉縣仙元山附近と推定せられた。本臺に於ける最大振幅五十五軒よりすると震央地方では可なりの被害があること、思はれ、中央氣象臺長の命に依り地震後直ちに同地方踏査に急行することとなり、午後一時國富技師、加藤技手と同行、自動車で浦和を経て熊谷に向ふ。

浦 和 車上から瞥見するに建築物等には殆んど異状を認めないが電柱等に貼紙あり、鴻巣町深谷町等に相當の被害ある由を報じてゐる。

鴻巣町 警察で聞く所に依ると、同町死者二名負傷者十數名、全潰家屋二十餘戸の由であるが、實見

する所震度は左程強くはなかつたらうと思はれる。右の死者も道路を通行してゐた人の上に土藏の壁が崩れ落ち壓死したものである。本町ばかりでなく、本調査を通じて土藏が一番被害を受け易く震度は左程強くなくとも土藏の壁、屋根、棟等の剝落するのは注目し價する事柄であらう。

吹上村 倒潰十數戸、壓死者一名、震度は鴻巣町より大分強かつたやうである。此處で國富技師、加藤技手と分れる。吹上驛の構舎傾き木材で支へて辛うじて執務してゐる。同驛以西は不通。

行田 殆んど被害を認めない。電報が辛うじて通じてゐるので本臺に報告し、再び吹上に引き返す。

吹上村 と下忍村字鎌塚との境界近くの所で道路を北東から南西に横切る小龜裂線あり、東側が三寸餘り陥落してゐるが水平移動は認められない。同龜裂の北東及び南西端は何れも元荒川岸に終り延長一町餘しか追跡する事は出来なかつた。尙大正十二年關東地震の時にも同一地點に同様な龜裂が出来た由である。

吹上村字大芦 吹上から大芦にかけて、殊に大芦は震度が非常に強かつたやうである。同字内神社の拜殿、其の他家屋十數戸全潰、薄綠色を帯びた泥水を噴出した形跡が到る所に見出される。井戸側の崩れなかつた井戸にも底から泥を噴出し、淺くなり濁つてゐる所が多い。

小八ッ林の邊りには依然として各所に泥水を噴出した跡があるが暫く丘陵地に入り、東平に至れば震度は急に減少したかのやうで殆んど異状が見當らない。

松山町 この邊りから日暮れる。土藏の半潰三四ヶ所其の他壁の落ちた所數ヶ所の由で被害は著しく小さいものゝやうである。

菅谷では死傷なく、土藏倒潰一二、神社の記念碑倒れ、所々の壁の落ちた位である。菅谷附近東上線の築堤が一尺餘沈下し不通となつた。

小川町 橋梁に龜裂を生じたもの二ヶ所、土藏全潰一、半潰二、壁の落ちた所、石垣が崩れた所各十餘ヶ所、死傷なく被害は著しく少い。町の人々に訊くに時計も止らないものが多かつた程で震度も精々強震(弱き方)位と思はれる。町内の極めて不安定に見へる石燈籠なども倒れてゐないので全く奇異の感に打たれる程である。郵便局で電報を認めてゐる間に餘震を二回感じた。何れもドオンと云ふ極めて急な大砲でも打つた様な音がして二三秒してからガタガタとゆれて直ぐ靜止する性質のものであつた。

小川町から寄居町に至る道路一二破損した所もあつたが大した事はない。

寄居町 四五個所の壁が落ちた程度で震度も至つて低い様である。町民も平靜である。寄居町から闇を衝いて熊谷測候所に至る。

熊谷 死者一名、負傷者七名、住家の全潰四、半潰三戸位。震度は左程大きくない。大地所長外所員御一同と情報を交換する。ヴィーヘルト式上下動地震計には從來重錘の横ぶれを止める装置がないが、斯様な強震に遭遇する際は是非装備する必要があると思はれる。

西埼玉強震地域踏査報告

氣象臺技手 本 多 弘 吉

五二

九月二十二日熊谷測候所員市川、伊丹の兩氏と共に深谷町を経て寄居町小川町から槻川上流を踏査する。

深谷町 熊谷から深谷町に至る途中は著しい被害は殆んど見當らないが同町に入るに従つて被害が急増加した様に見へる。町の所々に倒潰家屋があるが、何れも耐震的に不良の家屋が倒潰したのであつて一寸丈夫に出来上つてゐる建築物には殆んど異状がないやうである。此の地方で土藏造りと云つて家の兩横面が厚い土壁からなつてゐる家屋が倒潰してその隣の家を押し倒し更に其の隣の家と四戸餘り將棋倒しになつてゐるのもあつた。

同町西端の製糸工場の煉瓦煙突(高さ百二十尺餘)の上から三分の一位の所で折れて西側に崩れ落ちてゐる。此の爲に附近で遊戯中の小兒三名氣の毒にも即死したとのこと。同煙突の折損した箇所を覗く見ると煉瓦を積み重ねた丈の様であつた。

尙同町死者五名、負傷二十數名、住家全潰八、半潰九戸の由。

用土村 被害は大分少い。同村字井の岡にある用土小學校庭を北西から南東方向に走る二三條の小さな龜裂線が横斷してゐる。各々の間隔は二間餘であるが注意して見なければ追跡出来ぬ程小さなものである。同校長井上先生の御案内で校庭から北方三町餘桑畑の中に所々龜裂の斷續してゐるのを追跡出来た。

更に南行して字下宿の役場前の道路を北東から南西に走る小龜裂二本あり、その南北の家屋の土臺下を横切り裏の桑畑に續いてゐる。土臺下に龜裂が入つても家屋には殆んど被害を及ぼしてないし勿論大したものではない。

更に南西の馬場部落の福島米吉氏方の宅地にも龜裂が表はれてゐて、恰も井の岡小學校邊りから下宿の役場前を通り馬場に抜ける北々東から南々西に走る小さな龜裂線が十町餘斷續してゐるのであるまいかと思はれるが、何しろ龜裂が小さいのと、桑や稻が繁茂してゐる爲に詳細を知るのに困難である。

櫻澤村南飯塚の貯水池に沿うた道路が長さ四・五間餘り崩れてゐる。

寄居を経て小川町に向ふ。

竹澤村 字靱負で井戸水が濁つた位、同村駐在警察官の談に依ると最初に上下動強く、北西の方向に當つてドドロドシンと大砲の様な音を聞いた由である。

小川町を経て槻川村に向ふ、この途に被害は全く無いと云つた程度で、極めて不安定と思はれる高い石

柱等も一つも倒れてゐない。

槻川村 役場で様子を訊くに、此の邊りは井戸水濁り、水量多少増加した位の他には殆んど被害はない。唯同村字居用の野口氏方には崖が崩れたり地割があつたとの事に現場を観ると、非常に急峻な坂を昇つた所にあることゝして普通の崖崩れと思はれる。役場では時計も止らず多くの本箱のうちで南向きのもの一、二傾き、他は倒れず、震度は強震(弱き方)或は弱震程度ではなかつたらうかと思はれる。

小川町から小原を経て熊谷に歸る。此の途中も殆んど被害がない。熊谷に近づくに従つて急に震度が増したものの如く、荒川の鐵橋の橋脚の殆んど全部は二ヶ位づゝ龜裂の入つてゐるのが認められた。

西埼玉強震地域踏査報告

氣象臺技手 加藤 倫 祐

同 岡 四 四 亥

埼玉縣測候技手 川 本 彌 七

吹上村

大字吹上では家屋の全潰はないが半潰、土藏の壁、石垣の崩潰、墓石の轉倒、地割多く強震程度。

東暉寺境内の墓石は殆んど皆倒れて居る。その方向は一定せず各倒れ易い方向をとつて居る。ほとん平
行した幾條かの地割がそれ等の間を縫ひ北東―南西に走つて居る。一きわ目立つた地割に數ヶ所の穴が
あり黄褐色の泥水を噴出した跡が歴然として居る(寫眞參照)寺の人の話によると此等の地割は大正十
二年の關東大地震で出來た大地割の跡に當つて居る。泥水は地震と共に約一米程湧出し二十分程つゞい
た。井戸も埋つた。又境内に見取圖に示す様に墓石の廻轉したものがある。

寺に隣る吹上神社では石塔(高さ約二米)の頭が北へ墜落してゐる。(寫眞參照)南北方向の石玉垣が無
事なるに東西方向のは倒れてゐるのは南北の震動の激しかつた事を想はせる。

道路を北東—南西に走る著しい地割が一本。その北側が南側より五糎程高い。この地割は延びて元荒川の岸の畑に及び所々黄泥水を湧出した跡を残してゐる。この邊一帶に極めて軟い土で出来てゐる。

吹上驛(木造)は柱が地上一米餘の處で折れた爲約十五度南へ傾き四方から支へられて危く形體を支持してゐる。「危険ですから長居をしないで下さい」と貼紙してある。

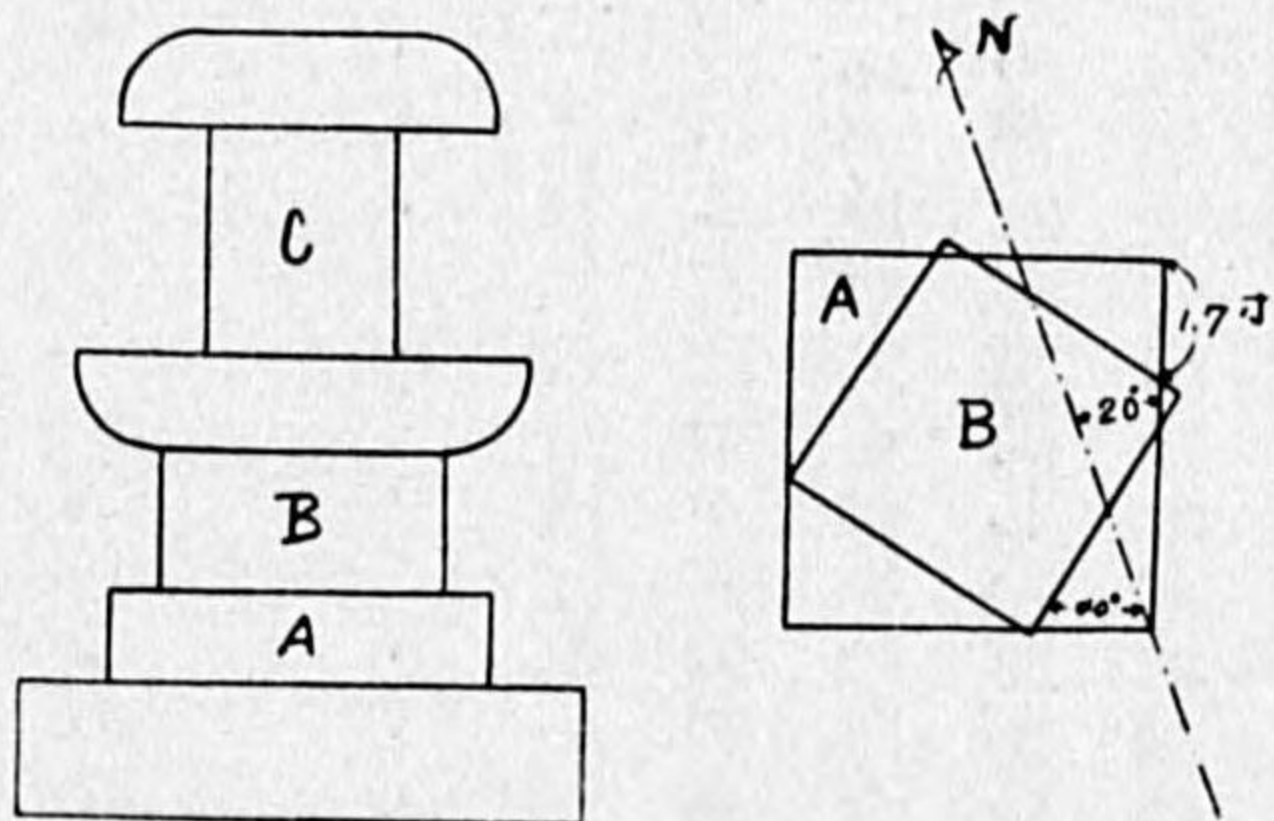
吹上から南西約一軒しか離れて居ない大芦(約二〇〇戸)では全潰家屋十數戸、糞膏の重さうな家は皆全潰してゐる。(寫眞参照) 優に烈震の程度である。

可成しつかりした氷川神社の社務所、神樂殿は崩潰、南向き石の大鳥居は南方へ倒れ、石の臺の上にあつた大砲の彈丸は北へころがり落ち、南北に長い旗保管所は西方へ倒れて居る(寫眞参照)。南方へ約二〇度程傾いてゐる南向の御堂もある。附近の桑畑には縦横に地割が走り、到る處青い土砂を湧出した跡は寧ろ奇觀である。

土地の人の話をきくと「地震に先立ち西方からオートバイが走つてゐる様な地鳴が聞こえ、續いて上下動が激しく感ぜられ、總震動時間は大正十二年のに比し短かゝつた。南隣の家が先づ倒れ順々に北

見 取 圖

C 東へ轉落



へ傳つて行つた」と。墓地の中を數多くの地割が通りほゞ南北方向のものと東西方向のものがあり、前者にては主に青土砂を多く湧出してゐる。きけばこのあたり水面が極めて浅く墓をたてる時にも非常に困る程であるとか。

下忍村 字清水の愛宕神社では南向の石の鳥居がその頭を北方に落し、すぐ傍の石燈籠(南向き)は南方に倒れて居る(寫眞参照)。

埼玉村 屈巢村共に被害少く屋根瓦が落ちた程度。

鴻巣村 元荒川岸に沿ひ所々崖崩れ、地割を見る。石垣崩れ壁落つる程度。土藏の壁が落ちて下を通行中の二人を即死せしめた。

笠原村 全潰數戸、既に片付けられては居るが可なりの被害らしい。附近に梨の被害が多い。

小林村 東向の妙福寺山門が南に倒潰(寫眞)、南向の石碑は南微西へ轉倒してゐる。墓石は殆んど皆倒れてゐるが東西に倒れ易い形で南方へ倒れてゐるのがある。

役場の石門柱が東側に崩れてゐる。

熊谷町に於ける震災状況

埼玉縣測候技手 市川 徳 一

昭和六年九月二十一日午前十一時二十分の強震直後命に依り、當熊谷町の被害状況を踏査する。左に其の概要を記し報告とする。

縣社高城神社境内に於ては、拜殿前右側の（拜殿に向つて）大石燈籠一基東に倒れ、尙ほ境内入口大鳥居附近のもの頭部のみ落下せるもの數個あり、又本殿前の神庭に列立せる八個の石燈籠も全部東に向ひて倒潰せりと云ふ。本所の北方約一畝の地に在る熊谷町共同墓地に於る墓石全數の約四分の一は東に倒伏し居たり。尙ほ墓地の東側にある高さ五尺の石塀は十數間の長さに亘りその上端部のみは東方に落下せるを観る。筑波町通りに於ては震害を受けたりと見るべきもの二戸あり。内一戸は庇破損し瓦の落下を見たり。他はその東隣りにして壁に龜裂入り庇は歪み辛ふじて落下を免れたるものなり。

鎌倉町を横切る星川は略東西に流るるものなるが星川橋の西端附近に石垣の崩落二間あり。其の爲め家屋の一部傾斜せるものあり。是より荒川に至る間は井水濁り濁水を噴出せり。尙井水の濁れるは彌生

町にもあれども水は噴出せざりき。

熊谷町の南西荒川大橋の兩側に於ては道路上に之と並行に龜裂を生じ最大なるものは幅六寸長さ十三間に及びたり。尙ほ荒川大橋右側の橋臺と道路面とは地震動の爲め落差三寸を生じたり。又該橋梁の橋脚は八本を數ふ。皆煉瓦及花崗岩にて建設されたるが、一寸乃至二寸の龜裂縦に入り、可成危険あるらしく觀察せり。尙ほ荒川の流水は地震と共に褐色に濁り午後三時半に觀たる時にも未だ清澄するに至らざりき。

石原方面に於ては本松製粉會社の土藏造り倉庫間口十八間半、奥行五間の一棟倒潰せるものありたり。右の外土藏壁の龜裂、少數の瓦落下程度の被害は散在せるも皆差して支障を來さざる程度のものなり。辨天町の某家の打込鐵管井戸は震災後一寸も上方に抜け上れり。又附近の消防用心井戸は通常地表面から八尺位の處に井水面ありしも、強震直後には出水甚だしく約四尺四方の鐵板を押し上げ溢出する迄井中に満水したりと云ふ。

最後に當熊谷測候所に於ける模様を列記せん。當所に於ては書棚の轉倒せるもの二ヶありて一は構内北東隅に建てる書庫内にあるものにして東に倒れたり。他の一は應接室にありしものにして前記同様東に轉倒せり。其他事務室内手洗用水はその水溢出し井水も一時濁りたり。尙ほ屋根瓦の落下數枚あり此外窓硝子及壁等には諸所に小龜裂を生じたり。

秩父町附近被害状況

六〇

埼玉縣測候技手 植野隆壽

雇 高岸登久壽

秩父町附近は一般に被害輕微にして極く古き家にて壁に龜裂を生じ、又壁の一部脱落したるものありたる程度なり。据り悪しき小墓石の倒れしもの、石垣の小崩れ道路の小龜裂等もあり、尾田蒔村の一部にては井水の濁りたる所ありたるも特に記す程の被害なし、秩父町附近を踏査せし結果を次に記さむ。

坂米の龜裂、秩父町より横瀬村、高篠村方面に通ずる縣道、秩父セメント會社の東方に北東より南西に向ふ龜裂あり、長さ三十間餘、幅五寸餘なり。同所道路南側の石垣約六尺崩壊せり。

秩父町視目坂の龜裂 秩父町より小鹿野町に通ずる縣道、秩父町下郷視目坂に小龜裂あり。桑園中より出でて縣道を横ぎり、民家の庭に至る。長さ約十間、幅一寸内外にしてその走向は北西―南東なり。それより約三丁南方に石垣の崩壊せるあり、長さ二間餘にして一部民家の床下にまで達し（民家は坂の上と下と二階建なり）幅三尺餘に及びたる所ありしも建物に被害なし。

石燈籠の倒潰 秩父町札所十四番今宮坊の石燈籠二基北方に向ひて倒潰せり。

大里郡下深谷町、藤澤村、大寄村震災地踏査報告

埼玉縣測候技手 伊丹喜逸

雇 石井徳治

九月二十一日強震突發直後大里郡深谷町、藤澤村並びに大寄村の震災の踏査を命ぜられ出張す。其の概略を記して報告とせん。

熊谷町の西北西三里を距てたる深谷町に到る。自動車中より視察せるも中仙道の國道筋に於てはさしたる震害の跡を見受けず。

大里郡深谷町

深谷町に到り直ちに同町警察署を訪れ、被害の程度狀況を聴取せしに、午後三時發表として左の如く公表せり。

町村名	死者	傷者	倒壊家屋	備考
深谷町	五	三	一八	重傷者のみにして輕傷者は多數ある見込み
藤澤村	一	一	一	

新會村	一	一
八基村	一	一
榛澤村	一	二
幡羅村	一	一

右の如く表示せしも電話線の不通のため、同署管内に属する其の他の五箇村の被害状況は不明なりき。而して前述の概況を測候所長に急遽報告するため警察電話を利用して通報せり。

深谷町の東半部に於ては壁の落下せし處、多數見受けしも倒壊家屋の如きは更になく、目立ちたる被害等はなかりき。市街地の西半部にては倒壊家屋可成り多く何れも眞西に向ひ、三、四戸宛將棋倒しに倒れし處三箇所ありき。其他將に倒壊せんばかりに傾ける住家も可成りあり何れも西方に向へり。

中にも相當星霜を経たる半土藏造りの大谷榮次郎氏宅にては、地震發現と同時に家屋は眞西に倒壊し然も其の餘勢は新築せし(二階家木造り)西隣りの福住氏方を半ば傾倒せしめ、尙ほ其の傾斜は更に其の西側三棟迄をも一勢に傾斜せしめ居住不能の状態となせり。

前記大谷氏宅にては倒壊に際し老夫妻のみは逃げ遅れ遂ひにその下敷となり重傷を負ひたりと云ふ。

同町の中央交叉點に在る足利銀行深谷支店は高さ約四十尺の二階建の煉瓦造りなしも地上より二十尺位の處に地面に平行する割れ目を生じ、割れ目を境として上部は西方へずれて崩落の危険充分ある様見

受けたり。(因みに二十四日大地所長同町視察の際には板圍ひをなし取毀しの最中なりと。)銀行西側の道路に沿ひ南北に走れる約四間の鐵柵は眞西に倒れ居たり。

町の西方場末にある元製糸株式會社富國館工場跡に残立せる、高さ百二十五尺の煉瓦造りの大煙突は地上八十五尺の部分より眞西に倒壊せり、其のため西側を流れる幅一丈位の河中に戯れ居りし子供(男二人、女二人)四人は其の下敷となり、三名は即死、一名は重傷し後間もなく死亡せり。尙其の附近に在る墓石の多くは西方に倒れ、西嶋稻荷境内の石燈籠(底部の丸きもの)は二箇共に東方に向ひて倒れ居たり。

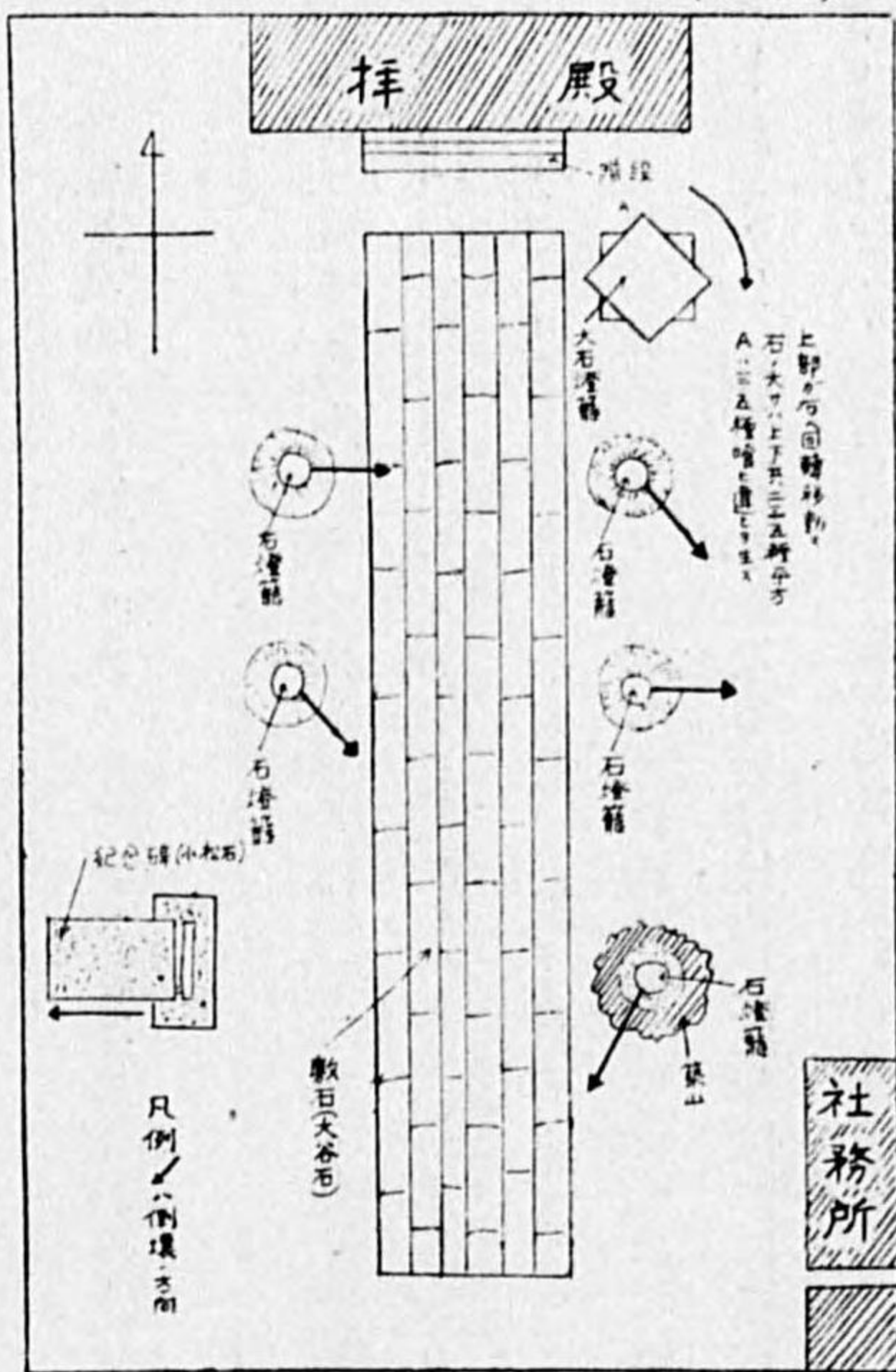
尙同町の西部に於ては各家屋共全部戸障子の張り紙は目茶苦茶に破れたり。

大里郡藤澤村

深谷町を踏査後直ちに同地に向ひたり。同地は深谷町より南方約一里の地點に位し、大里郡寄居町に通ずる縣道の道沿ひに聚落せり。此の間に墓石或は指導標(石造り)等多數あり不安定のもの、可成り見受けしも一箇も轉倒せるを見ざりき。

淺間山は同村大字山根に在り海拔約九十八米にして同山は概して赤土にて構成さるるもの如し、然して其の頂上にある淺間神社境内(頂上の平坦なる面積は約二反歩位)に建立せられたる石燈籠、紀念碑等の轉倒状況は次圖の如し。

浅間神社境内鳥瞰圖 (附録)



拜殿南面の屋根瓦は数枚剝落せしも社務所は更に被害なかりき。同村に於ては大體土藏の破損屋根瓦の落下等多少の被害を蒙りしも、さしたる事なく只土藏の半ば傾きしもの一棟のみあり、其の方向は北東なりき。

因みに同村小學校にては強震の當時丁度授業中にて發震と共に兒童は周章狼狽し、何れも總立ちとなり、教員之れを整理中逃げ遅れたる一教員は二階の窓より飛び降りしたため足部に重傷を蒙りし由なり。藤澤村より深谷町に向ひ歸路の折、一通行人に震災の状況を尋ねし處、大寄村方面は相當の被害ある

由なるを以つて直ちに同村に向ひたり。

大里郡大寄村

大寄村は深谷町を北東方へ約三十町を距てたる地點にして、深谷町より大里郡妻沼町に通ずる縣道の道沿ひに聚落す。

此の附近は大概水田にして多少の桑畑あるのみ。深谷町近郊より同村大字戸森に到る間は土管の製造工場多數を占め、是等の工場に於て製造せる土管は大半破損する浮目に遇ひたり。該戸森に在る墓石は凡て真西に向ひて倒れ、附近の縣道の處々には龜裂を生じて濁水の噴出せし跡あり。又東西に面せる土藏の壁は殆んど剝落し、屋根瓦の大半落下せしものを見る。小龜裂は稻妻狀をなし床下、道路、田畑等に無數に生じ、中にも西北西より東南東に走れる龜裂は割合に多く、大なるものは幅二糎五ありしも何れも連續せず、數條平行して生ぜしを見たり。前記の小龜裂よりは灰色狀様の砂を多量に混へたる泥水を一時間餘も噴出し、其の高さは約一尺位に迄及びたる處あり。

發震と同時に同村の井水は全部混濁し泥水と化し、時を経るに従ひ次第にその量を増し、遂に地上に迄漲溢流出せりと云ふ。

或る農家の井戸の如きは井水面迄通常深さ約一丈五尺位にして同村地内にては最深の井戸なりと云ふも、地震發現と同時に前記と同様な状態となり約六時間後にして漸く平常水位に復したり。

泥水の噴出せし場所は大寄村より藤田村の一部並びに八基村、新會村、明戸村、中瀬村等の利根川沿岸各町村に亘り擴張せる模様あり。

該戸森區に於ては倒壊家屋なし。

而して前記の三箇町村を踏査中に於て數限り無く餘震を感じたるも何れも其の近邊に於て放つ大砲様のドンと云ふ音響を聞くと同時に人體に震動を感じたり。

以上を總括するに被害の分布状態は深谷町最も激甚にして、被害状況より察するに震度階級の烈震區域なるべく大寄村之に次ぎ藤澤村は割合輕微なりき。

大里秩父兩郡下の震災地踏査報告

埼玉縣測候技手

市川 徳一

同

伊丹 喜逸

九月二十二日熊谷測候所長の命に依り、大里郡用土及秩父郡槻川兩村並に其の附近の震災被害状況踏査の爲出張す。順路として大里郡深谷町を通り藤澤、花園、用土の各村を調査し比企郡竹澤村に出で同郡小川町を経て秩父郡槻川村に到る。左に其の概略を記し以て報告とせん。

大里郡花園村

同村には多少の被害あるを観る、其の通路に當り倒壊家屋二戸を見受けたるも何れも兩方に向ひて倒潰す。其の他屋根瓦の落下、土藏の破損等數多あり、尙ほ川幅六尺前後の小川に架せる石橋の崩壊諸處にありて車馬の交通不能の場所二、三ありたり。(附圖第一參照)

大里郡櫻澤村の一部

兒玉郡本庄町より大里郡寄居町に到る縣道の途中大字南飯塚區に直徑約四十間の貯水池あり、東及南北の三方は堤を以て圍まれ、西方のみは幅三間の縣道となりて池に望めり。この縣道路面上には道路と

相平行せる相當大なる龜裂を生じ、幅三寸其の長さ約七間に及ぶもの二條あり。此龜裂を境として貯水池側の土砂約二坪程は池中に崩落せり。

大里郡用土村

南飯塚より用土村に入りてよりは土藏の破損石垣の崩壊等諸處に見受けらる。而して用土村役場所在地に到れば可成の被害ありて役場前の道路に於ては四條の龜裂を生じ居るを觀たり。此龜裂は北東より南西に走り道路を横切れるものにして一方は役場、片方は農家の床下を通り約二町の長さ及びたり。又屋根瓦の全部落下せる家數軒石垣の崩壊七、八個所あり。尙ほ土藏の破損井水の濁れるもの等殆んど全區に亘り其の被害の相當ありたるを觀る。

次で南藤田に在る用土小學校に至れば、校舎は震動の爲め土臺石の北方に約一寸程ズレ又土臺石も整然たらずして區々の位置をとれり。尙ほ便所の屋根瓦は三分之一程落下し、又高さ約五尺の盛土の上に安置せる奉安殿は、土臺石より約二寸北方に移動せり。尙ほ本校庭より北方井ノ岡に達する南北の大龜裂線は幅一寸長さ約五町に及べり。

井ノ岡區に於ては震動の爲め畑土振出され畑中にある小路は約三分の二に狭められたる所もありたり。當區は倒潰家屋更に無かりしも殆んど各戸毎に井戸の破損を蒙り又井水も濁りたり。

馬場區附近も被害相當にあり、福島米吉氏宅の如きは、床下に幅二寸乃至三寸の龜裂を無數に生じ、

柱及壁の間隙も地割同様二、三寸に及び辛ふじて家の倒潰を免れ得たる状態なりき。又同家の井水は濁り、吸上げ用ポンプは破壊され使用に堪へざるものとなりたり。尙ほ附近には長さ一間幅一間半の石橋の半壊一ヶ所あり、又畔の龜裂も數個所ありて、内最も大なるものは、幅四尺長さ六間半に亘るものなり。其他同區にては皆土藏壁の一部剝落せるものあり。

又同村南西部に位する杉森區に於ては、縣道の南北に走るものありて之を横切る龜裂あり、其の方向は北東より南西に走る。同地點には縣道の西隣に高さ約五間の貯水池ありたるも何等破壊されたる所なかりき。同區には其他の被害殆んどなし。

比企郡竹澤村

駐在所を訪ひ同所巡查及來所中なりし同村々長の談話を綜合し左に記述せん。

同村に於ては殆んど毎回地鳴を聞き、音響も淺間山の噴火の如く、或は大砲の如くにして北西より聞へたり。又家屋の震動は地鳴直後に來り上下動のみの如くにして水平動は餘り感ぜず、其の程度は大正十二年九月に於ける關東大震の夫れよりも今回の方遙かに強し。今回の地震に際しては一般に時計止り、又土藏は全村に亘り破損多く、河川の護岸石垣の崩壊、及び井水の混濁等諸處に起れり。尙ほ小川、寄居兩町間の縣道には諸處に龜裂を生ぜりと。

竹澤村駐在所を去りてより槻川村に到る間、比企郡小川町、大河村及秩父郡大河原村を通過せるも同道

路附近には家屋の倒壊等更に無く、只大河原村字安土に於て墓地の石塔約半數轉倒せるを見受けたるのみなり。

秩父郡槻川村

同村役場を訪ひ、助役福島氏の談を聽くに、當村に於ては被害割合に少く、今次の地震に際し時計の止らざる家多し。又倒壊、半壊家屋等更に無しとの事なり。尙ほ井水は一般に濁り、又同村を縦走せる槻川は半濁水に化し其の上流地方に於ては崖崩れ數個所ありたりと語れり。

熊谷町より妻沼町に到り及利根川沿岸の

震域踏査報告

埼玉縣測候技手 植野隆壽
雇 石井徳治

廿二日大地震の命により次の順序により郡北部の震害地域を踏査せり。その概況次の如し。

(一) 大幡村 倒潰家屋土藏一、半潰家屋一、大原字島地内にある墓石はその三分の一程は東又は西に轉倒したり。又大字柿沼地内の墓石はその二分の一程は東又は西に倒れ、一部は南又は北に倒れたるものもあり、井水等には何等異常なかりし由なり。

(二) 奈良村 縣道筋には被害といふ程のもの見當らざりしも、それより一軒餘東方に入りたる大字時花にては水田中に龜裂を生じ、盛んに泥砂を噴出し、井水は著しく混濁せりと。大字下奈良の縣道傍に建てる長谷川酒造所の煙突は崩壊し、又土藏の壁も脱落せるを見たり。

(三) 長井村 大字上根、上根神社の石燈籠三基東及び西に倒れ、旗杭納屋は西方に倒潰せり、大字西城にても水田中に多數の小龜裂を生じ泥砂を噴出せり。

(四) 妻沼町 有名なる歡喜院(通稱聖天様)の石燈籠七基は何れも東南東又は西北西の方向に倒れ居た。同市中の土藏の壁には龜裂を生じたものありたるも、隣接町村の夫れよりは、比較的被害輕微の由なり。

(五) 男沼村 大字五十石には北西より南東に向ふ龜裂數條あり。そのうち大なるものは幅七寸長さ二十間餘に及ぶものあり。道路と云はず田と云はず人家の臺所等にも小龜裂を生じその小裂罅よりは泥水と共に茶褐色の細砂を噴出し、中には「ゴーゴー」と云ふ音を立て、砂礫をも噴出したと云ふ、何れも地震直後に起りたるものにして、大抵二十分程にて止みたりと云ふ。又同字區内にある六十餘戸の堀抜井戸は全部泥砂を以て埋められたり、而して同地方の井戸は地表而より約二十尺位の處に井水湛へ居たるも、今回の強震により地盤の振蕩著しきためその多くは水面より七八尺の高さにまで砂泥を以て埋積され井水は乾缺し用水の缺乏は著しく不自由を感じたりと。又堀井戸の或るものは泥砂を地表面にまで噴き出したるものもあると云ふ。區内にある墓石、石燈籠は殆んど全部東又は西に倒れたり。

(六) 太田村 男沼村五十石より明戸村に到る中間にある太田町永井大字太田區内にては被害極めて輕微にして据り悪るき墓石の漸くにして倒れたる程度にて、地盤の龜裂等は見當らざりき。

(七) 明戸村 大字石塚にては南東—北西の龜裂あり幅七寸長さ五十間を超ゆるものあり。一部斷層狀に落差三寸を測りたるものもあり。中にも妻沼町より深谷町に到る縣道に生じたるものは幅一尺を超

え長さ五十間餘深さ三尺餘にして、縣道を眞二ツに裁斷せるものもありたり。走向は南東より北西なり。附近に倒潰家屋一戸あり、墓石は東又は西に轉倒し居たり。同村大字新井にある煉瓦工場の高さ約百五十尺の煙突は四本の中南方より向つて左端のものは上部より約二十尺の處(鉢卷の施しある處)より崩壊せり。

北足立郡吹上村震害地踏査報告

七四

測候技師 大地 四郎
埼玉縣測候技手 市川 徳一
同 内田 正作

強震發現の三日目なる九月二十三日、今次の強震に當り、被害の激甚なりし吹上村大字大芦へ出張し調査をなす。(筆者の一人大地は二十三日午前七時より八時の間に、又市川、内田の兩人は同日午後より夕刻に亘り調査し更に内田は翌日も引き續き實地踏査をなせり。)以下に其の見聞せし處を記して報告となさん。

小職等は強震後一日措きて現場に赴きたるを以て同地方民衆の當時の驚愕氣分も稍々安靜に歸し、調査上好都合の點ありたるも倒潰家屋の如きは其の跡片付けを爲したるものもありて、調査上幾分遺憾の點も無きにもあらざりき。

吹上村殊に字大芦は今次の強震に際し縣下第一位の被害を受けし地方なるべく、倒潰家屋の如きも十餘戸に達し噴砂噴水等も頗る多量のやう見受けたり。

同地域は北足立郡の最北端に位し熊谷町の南東約二里の地點に在り、高崎線は同村内を北西より南東に向ひて走り大字吹上に省線吹上驛あり。元荒川は同村北部を南東方に流れ荒川は大芦の西部を南東に流れ同村地域一帯は沖積層上に在り。地盤極めて軟弱にして太古は沼濱地區なるべく、現在は大部分水田及桑園よりなり、土地豊饒と思はれたり。

便宜上大芦區の被害調査を眞先となし上郷區を後にせり、吹上驛の近くにある同村役場を訪れる。役場吏員は震災復舊善後策を講ずるため頗る多忙の様子なりしも同村助役の厚意により同村の被害状況の大略を知り得たり。同役場は吹上驛の西方數町先きの田圃の中に在り、盛土の上に建設せられたるものらしく、強震當時の震動著大なりしやう想像せられたり。玄關の柱二本は何れも敷石より南方へ約三寸移動し廳舎全體は南方に稍々傾きたり。廳舎内の棚、押入等南面せるもの又は北向きのものは皆な激動を蒙り、硝子戸の如きは少しも動かすこと不可能と云ふ程に損傷し、棧の部分ねじられ歪みたり。壁も同方向の處は被害甚だしく壁土は殆んど振ひ落され、骨部は露出し透かして視るときは眞向ふの道を走る自動車の覆蓋を認めらるゝに至れり。玄關は北向きにして、廳舎は東西に走れるも、この建物と直角の向きに隣接して建てられたる會議室は余り震害を受けざりき。小使室の南東方にありし手洗水臺の轉倒せし方向は南南東にして臺所土間「コンクリート」面と土臺木との接觸部位とは約七分の間隙あり。屋根瓦は總體的に搖ぎ崩落は免れたるも大修理を要するやう見受けたり。井水は強震後暫時の間は増水したるも、後次第に減水し現在(二十三日)にては反つて地震前よりも約一尺程減少せりとの話なり。

七五

同助役は小職等の爲めに役場吏員某氏をして倒壊家屋の在所を案内せしめたり。四五町の田圃を横ぎるときは區端れの老杉鬱蒼として繁れる裡に大芦區の鎮守村社氷川神社あり、檜の鳥居は完全なるも右側の石燈籠(高さ一間位か)の上半分を墜落しあり、南方に倒れたる花崗岩の鳥居を見ながら神庭を北進すればその右側に建てられたる旗竿置場(長さ四間、高さ一間内外)御水屋、社務所等は地震動來ると同時に倒潰せしもの、如く(南西方に向ひて倒れる)、御水屋近くに立てる花崗岩の華表は轉倒の浮目に遭はざるも、その笠木は大略南方に墜落し三個に割れたり。一禮の後拜殿の損傷を視たるに内部壁の龜裂も甚だしく當時南北の振動の強かりしを物語るものありたり。拜殿に向つて左側の神樂殿は完全に南東方に倒潰し慘狀を呈し、夫れに連續して南方に建てられたる住家は危く倒潰を免れたる程度にしてその損傷は甚大なるもの、如し。

田、畑、道路其の他到る處に小龜裂を生じ、其の割れ目より多量の地下水を噴き出し、同時に可成り深き地下層より細砂を噴き上げたり、砂の色は灰色にして少しく青味を帯びその粒々は極めて微にして磨粉に似て少しく粘氣もありたるやう見受けたり。筆者の一人は二十三日午前七時に氷川神社傍の桑園中に多數の噴砂孔を發見したり。幾條も小龜裂ありこの裂罅線上には五個乃至七個或は夫れ以上の所謂泥錐(マッドコーン)の併立せるあり、是等は孰れも高さ五分頭部に於て七分ありたり。拜殿の南西方日戰露役紀念碑の前、村人のため可成り踏み締められたる堅き神庭にも小龜裂の跡あり、青灰色の噴砂

ありしも、神社境内の倒潰せるものは視察の人々により蹂躪されたり。(この噴砂の分析成績は別項にあり)常時區内の路傍小排水路には清澄の水滾々と流れ、その底部には噴出せられたる青灰色の細砂一面に擴がり頗る美麗なりき。

附近の村民に直後の模様を聞くに噴水量は各場所によりて異り、地表面に水深二寸位は流出したりと云ふ。其れが爲に小川には時ならぬ満水を來し、宛も夕立後の如き有様を現出せりと云ふ。因みにこの氷川神社附近は地震に何時も強く感じ、過ぐる大正十二年の大震災の折にも附近に比して震動強く被害最も多かりしと云ふ。

氷川神社より南西方に續き點在する倒潰家屋を順次に調査せり。同地は別の如く大部分田畑にして人家は點々と配在す。氷川神社傍を走り比企郡松山町に到る縣道を南東に進むこと約一町の地點に間口三間程なる農家倒潰しあれ共、殆んど片付け終りたる後なれば調査資料として得るものなかりき。細道を右に折れて行くに間口六間奥行四間の柳定藏氏宅あり。同氏宅は南南西に倒れ、床下には東西に長さ四間幅一寸なる龜裂あり。調査の時機少し遅れたれば取り片付け中にてその慘狀を目にすること能はざりき。此處より大芦區長の案内により被害家屋の大部分を視察す。同字は全般に亘りて被害ありしことは前記の如くなれ共、尙ほ倒潰を免れたる家、土藏等と雖も直に修築を要するもの多し。家屋の倒壊せし方向及び龜裂狀況は別圖の如し。

次に龜裂中最も大なるは當區南西方の堀口某氏宅の土間に生じたるものにして幅四寸三分に達し、其の方向は西北西より東南東に走り長さ約四間に亘る。又他の龜裂に於ても多少の相違はあるも大體北西より南東寄りのもの如し。

強震當時地鳴に就きては西南西方より汽車の走り來るが如き音響ありて一瞬間後には強震となり、數分間後地面の割目より噴水を始め午後四時頃迄は噴砂を伴ひて湧出を續けたりと云ふ。井水の如きは（當地は全部堀抜き井戸なり）一時全く濁り使用に堪へざるに至れる所も夥多ありたりと。地震直後は通常より約一尺も井戸水は増水を示したりと。

大芦區百八十餘戸中全潰住宅十三棟、非住宅四棟を數へ半潰家屋は住宅二十棟非住宅二棟にして、尙ほ死者一名負傷者三名を出せり。日中採桑のため農圃に在りしもの多く且つ二階建の藪きことは死傷者の數を著しく減少せしめたりと想像せらる。尙ほ聞く處によれば強震當日は消防手、青年團員等總出動し罹災者の慰問復舊作業に務め又餘震に備へ居たりと云ふ。

夕刻大芦區の調査も終りたれば區長に訣別を告げ「バラ原」を通過し榎戸に向ふ。途中を荒川堤に出でたるも此の邊にては龜裂は更になし。榎戸に到れば倒損せる家屋もなく地割れさへも極めて小にしてその方向等は孰れも東西に走れり。同宇を一週して再び久下村を通過し吹上村に歸る。途中にて石塀の崩れ落ちたるを見る。東より西に連なる高さ一間厚さ八寸の石材塀にして地上より三尺以上の上端部は

全部北方に崩落し居るを見たり。

高崎線吹上驛の概況を見るに同驛建物は盛土の上に建設されたる爲か附近第一位の被害地なり。驛本屋は十五度餘も南東方に傾き丸太棒にて僅かに倒るゝを支へ、屋根瓦は全部搖ぎて全く雨水に對して其の効をなさざるべく、硝子戸等は悉く毀損し全く使用に堪えざるに至れり。尙プラットホーム又は地面とコンクリート面の接合部にも電光形に或は線狀の龜裂を生じ、電柱とコンクリートとの接觸箇所も離脱せるを認めたり。

附記 強震の翌日横濱測候所長高木技師の震災地視察後當所に立ち寄られ大地に語る處によれば、汽車中より認めたる所吹上驛附近の鐵道沿線のコンクリート電信電話柱は今次の震動により孰れも更に深處に沈入し鐵道工夫は控線の張替へをなしつつありたりと。

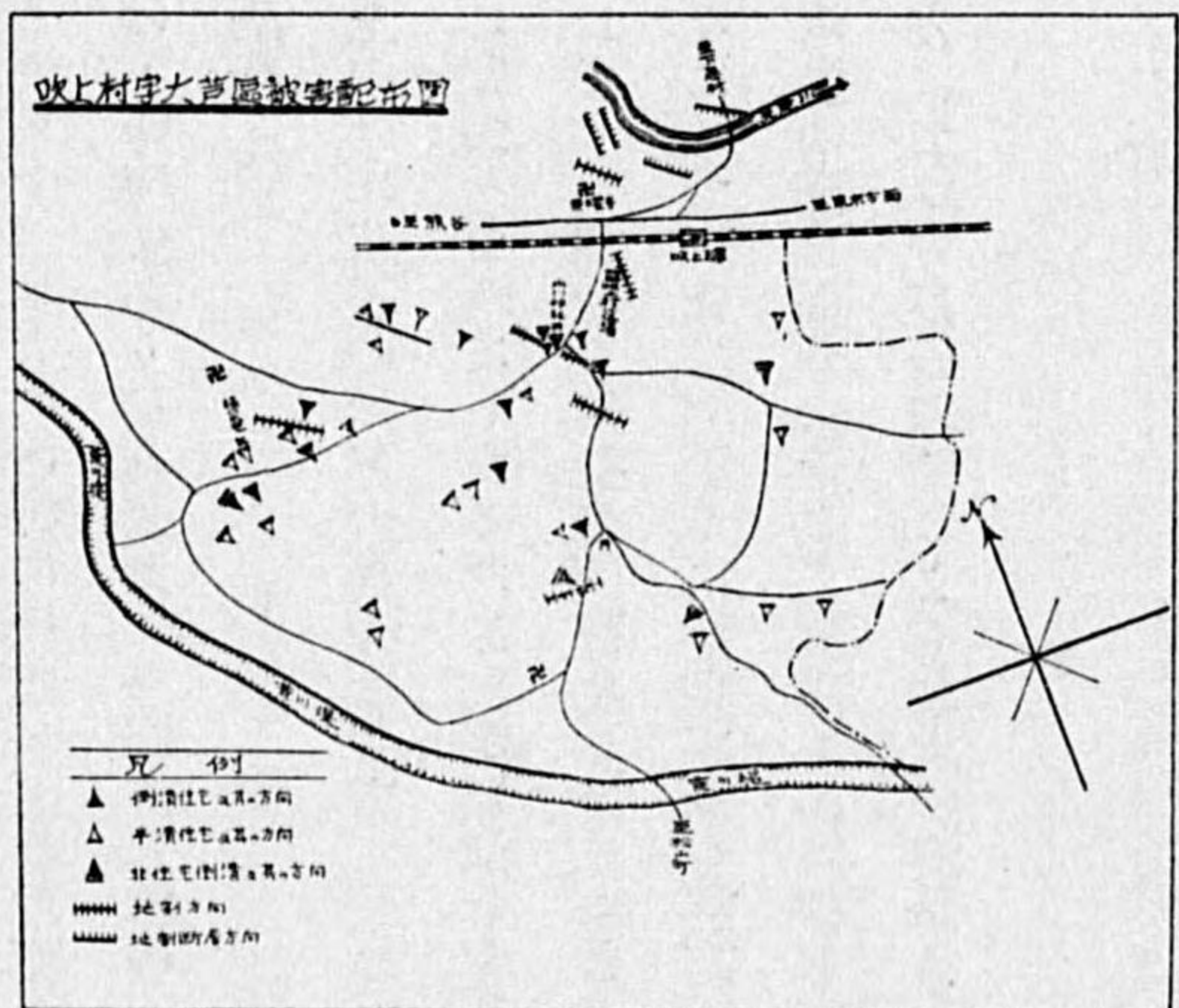
北足立郡吹上村震災地踏査報告

埼玉縣測候技手 内田 正作

九月二十三日市川技手と共に吹上村大字大芦區の調査を了へたるも、尙上郷區のみ残りたれば本日は小職一人にて踏査を命ぜられ、役場にて昨日よりの追加情報を訊ねて夫れより書記某氏の案内にて吹上街を通り抜け、行田方面行きの方岐點附近に出で、これより少しく北方元荒川を渡りて北埼玉郡と北足立郡との境界の縣道上に龜裂あるを観たり。吹上村に於ける龜裂中の最大なるものと思はる。概略なれども幅三十糎にして約三糎の落差あり。而してその延長は東西に約十間程なり。附近の元荒川は川幅十間あり川筋は此の邊にて大なる彎曲をなし東北東に向ひて流れ去る。其の彎曲の弧の部を上郷區と云ふ。同地方は沖積地帯なれば地中皆砂地にして村人の語る處に據れば電柱などを立つるにも亦穴を掘るにもザクザクと土砂崩落し非常に苦心を要すると。

大芦區のものと比較し大差なき程の地割れ噴砂噴水等ありたるも倒潰家屋を見ざりしは不幸中の幸ひなり。此の地方に噴き出したる細砂は大芦區のものと全く異りて普通の砂（河原にあるもの）と同じく赤灰色にて大芦區のものよりかなり大粒なり。

然し量に於ては驚くべき程多量にして道路上には尺餘も堆積せし處あり。桑畑、庭園、家屋内等到處に噴出し盛り上りて砂山を築き、東暉寺北西方は最も甚だし。故に裂罅中よりの噴水の量も非常に多く



即ち元荒川に到るまでは次第に低し、龜裂は川岸に平行即ち東西に走る。

同字の井水も又變調を來たし地震直後にはかなりの増水ありたるも漸次減水し現在にては反つて平水

地上（當時は水面上）一尺餘も吹き上げ其の邊の水は實に五寸に及べる處もありたりと云ふ。噴水孔を調べたるに口徑約三十糎にして地中へ漏斗状をなし、中心深度は不明なり。上記のものはこの邊一帯に現出せるものうち最大なるものなり。此の如き漏斗形の噴水孔は到る處に列をなし、其の數は僅かなる面積にも尙ほ數百を算するを得べし。又其の地割れのみにて噴水なき少しく高位置の處は僅かなる斷落をなせり。東暉寺の庭に生じたるものは落差二十糎幅四十糎あり、その走向は東西にして延長は六米に達したり。此の邊の地面は一帯に北方に低落し

より低くやゝ清澄を呈するに至れり。某氏宅の井戸筒は今回の大震に際し移動し二寸程食ひ違ひを生じたりと云ふ。

去る大正十二年大震の折には此の邊の地面は一夜のうち一寸位も低下し、約一ヶ月内外の間地盤に多少の下降現象ありしと云ふ。今回も又家の土臺木より昨夜(二十三日)は三寸近くも地面下れりと村人は語れり。

以上の外に墓石の殆ど大部分は北方に倒れたりとの事なるも、當時秋の彼岸なるにより村人は早速に墓石の顛倒を整理なしたるため實際状況を視る能はざりき。

昨日よりの調査を總括せば南北に倒れたるもの最も多く、龜裂方向は概ね東西寄なり。又鳴動の方向は區々にして充分信を置くに足らざるも南西方の如し。次に噴水噴砂に於ては地形上低地に多量にして地下水道の淺き部分に量多く噴砂も亦同様と觀察せり。地割れ噴水噴砂は直接井戸に其の害を與へ又或る地方にては井戸の埋積により井水の涸渇さえ生じたる處もありたりと云ふ。

縣北西部本庄町兒玉町附近震災地踏査報告

測候技師 大地 四郎

埼玉縣測候技手 川本 彌七

九月二十四日縣北西部本庄町、兒玉町方面の震災地踏査をなす爲め出發す。中仙道を北西に進み一路本庄町に向ふ。本庄町の南東方約四軒の地點即ち兒玉郡北泉村を東方に流れる小山川に架せる龍岡橋の附近堤上には多數の龜裂あり、大なるは長さ約七米幅員〇・二米のものあり孰れも龜裂は東より西に走れるを視たり。

國道を捨てて右折し行くこと約二軒にして藤田村に到達す。宇牧西と稱する部落は同村の西部に位し本庄町の近くに聚落せり。而して此の牧西部落を境界として西方には地面裂罅より噴水の箇所なきが如きも、東方は殆んど全般に亘りて噴水吐砂の現象ありて東方隣接の八基村に迄擴張するもの如し。

藤田村にては田畑、道路庭園等の區別なく到る處に地割れ、小龜裂を生じその主方向は南より北に走れる模様なり。強震當時の噴水状況を聽くにその繼續時間は約三分間にして最盛時の噴出の高さは〇・六米餘にも及び又餘震の度毎に地鳴あり、恰も大風の吹き來るが如く南西の方向より聞えしと云ふ。ポンプ

式採用の吸上げ井戸は強震直後濁れるも數時間後には清澄し使用可能となりたりと。堀抜き井戸は全部その底部に一米二より一米八内外の砂礫周邊部より浸入堆積し全く使用に堪えざるに至れりと。牧西に鎮座せる同村神社の境内にある石燈籠の笠石は北々東に向ひて轉倒せるを認めたり。正午本庄町に到達す、同町の被害は極めて寡少にして特記すべきもの殆んど無く本庄警察署を訪れ管内の被害状況を聴取し直ちに同町の南西方約七軒の兒玉町目指して急ぐ。途中北泉村地内縣道傍に立てる一小祠の瓦の數枚剝落せるを觀たるも其他附近一帶には全く損傷なきが如し、共和村の一神社の石燈籠の上半部は南面のもの約十度西方に廻轉せるを觀る。兒玉町に到らんとする同街外れの省線鐵道(最近開通せるもの)ガード下右側のコンクリート造り土砂押へには長さ約三米餘幅員三厘餘の龜裂の斜めに生ぜざるを觀たり。街の兩側に建てる瓦葺き家の殆んど全部は多少の差こそあれ孰れも損傷を蒙り、又建築年數の經過せる家の障子の棧はゆがみ、障子紙の破れたるもの多く(この障子の破損程度より見て震動の強さは北足立郡吹上村驛附近と同じ程度か?)酒、醬油醸造家の土藏、銀行の倉庫等多くの土砂をもつて建築されたるもの崩落は著しく見受けたり。同町の北方部に在る競進社(蠶糸業關係)の建物には壁の脫落せるあり、更にその北方に隣接せる同町小學校の右側の門柱(花崗岩)の一基は北西に向ひ鐵扉の附着せるまゝ倒損し居たり。同町の南東街外れ近くに鎮座せる縣社八幡神社の境内に入れば、神庭の石燈籠六基(左右に三基宛別立す)は全部轉倒し(その方向區々なるも北方へ向ひしもの多し)僅かに各々の基部臺石のみ殘

存せり。隨身門前に立てる石燈籠十基のうち六基は方向區々に轉倒し四基のみは故障なく依然として建設當時の儘なり(うち一基の上端部擬寶珠形をなせる部分のみは北方に墜落しあり)。神社裏に建てられたる紀念碑は轉倒の虞ありたるによるか、杉材をもつて支へを施しありたり。同社境内の東傍らの一寺院には可なりの面積を有する墓地あり。されど墓石は少しも轉倒散亂の様を見ざりき。

某氏の語る處によれば同町の附近に散在せる墓地の墓石は殆んど全部轉倒せるも時恰も秋の彼岸に該當する故、孰れも地震后家人等によりて整理されたるものなりと。又同町の上水道は今回の強震には少しの損傷も蒙らず引續き給水をなし得たり。同町郊外の縣立高等女學校にも多少の被害を見たりと云ふ。

同町の震動は被害状況より見て吹上村に次ぐ強さなるべし。

兒玉町の南西に隣接せる金屋村の被害状況を視る(同村には塙保己一の生家今尙ほ存す)。

同村大字西金屋に同郡青柳村所在の金鎖神社に到る途中、縣道の北側に村社白髭神社あり神庭の鳥居(花崗岩)南方に倒れ南面せる社標は西方に約五度廻轉し掘井戸の周圍にある敷石は震動の爲め四散せり。

同神社前には縣道に直角に即ち南から北にかけて幅二厘長さ十八米位の地割れ目立ちて四條あり。この大小地割等相連り若干の間隔を措きて北西約四軒の丹庄村に到るまでの道路或ひは田畑に存在するを

認めたり。道路を隔てて前記白髭神社の反対の側に立てる住家二棟は割合に震動弱く比較的被害少く、又神社と同じ側の区域は震動頗る大なりしと同神社の社掌は語れり。

西方四軒餘にして官幣中社金鎖神社に達すべし。同神社附近一帯は地盤極めて固き爲か、少しも被害なく何等平常と異なる箇所を認めざりき。

之れより道を急ぎ北東方約三軒餘にして青柳村に到れば同村字池田を境として北東にかけて震動は割合強かりしも、南西方は比較的弱く村の東方半分は墓石の轉倒せし率も多かりしと云ふ。又同氏宅の掘井戸使用には些少の故障もなかりき。北方一軒餘にして丹庄村に到り根岸市太郎氏宅を訪れる。同氏宅附近には前記金屋村方面よりの地割れの延長線とも云ふを得べき割れ目の存在を認めたり。丹庄村として地面の龜裂より噴水せるは同宅附近一帯のみらしく、同氏宅の庭先より床下を走れる地割數條あり、そのうち大なるものは長さ約三十米幅一糎位(埋れし爲判然せず)ありて南より北に向走れり。庭の一部にては強震當時噴水は高さ十糎に及びその繼續時間は約五分間に達し同時に青色の砂を噴出せりと。尙ほ地鳴は南方より聞え大風の吹くが如きものなりしと云ふ。其の他同村の被害としては土藏の壁は崩落し墓石の轉倒せる程度なり。

丹庄村の隣接村七本木村に到れば前同様土藏の壁落ち墓石の倒れたる程度にして地鳴は南西方より聞えし位のものにて特筆すべき事象なかりき。

比企郡松山町方面震災地踏査報告

埼玉縣測候技手 市川 徳 一

昭和六年九月二十四日熊谷測候所長の命により比企郡松山町及同郡菅谷村方面の踏査をなす。

順路として汽車便により吹上村に出で、夫れより大里郡吉見村の南東部を調査し次いで松山町の北端東平に出づ。かくして本村松山に至り同町の調査を終へて菅谷村に到る。左に兩村及び其の順路に當る被害状況を報告せん。

吉見村(大里郡)

荒川を境界とせる吉見村に於ては大なる被害無く、却つて荒川の北なる吹上方面に於て被害甚大なり。吉見村の東端なる小八ツ林に到り龜裂の相當大なるものに遭遇せり。此の地點は荒川を距る南方數町にして吉見村大字小八ツ林にして通稱深町(フカマチ)と稱する所なり。同地點は一面の平地にして田畑及家屋散在し、龜裂も道路を横切り同區中最も被害の多き所なり。又龜裂は頗る廣範圍に亘り約三町の間は無數の地割れを生じ、其の主線は東西に走れり。而して其の長さは種々障碍物ありしたため目測不能なれ共、一農夫の談によれば優に數町は連續せりとの事なり。此の龜裂中幅の最も大なる所は二寸にし

て其他普通のものも一寸を缺けたる所少し。而して深さは目測し得る所は五寸乃至一尺にして夫れ以下は狭くして不明瞭なり。此の地點に於ける龜裂は地震と同時に水及砂を所々に噴出し、砂量の如きも一ヶ所に於けるもの約一斗位と目測せり。砂は青白色の粉末にして噴出口の周圍に堆積しあり。噴出當時之を目撃せる一農夫の語る所に依れば龜裂を生ずると同時に音を發して水を噴き出し、其の高さも約三尺に昇りたり。又噴水時間長さも約三十分に及べり。尙ほ此の龜裂地帯は所々に噴水せし爲め諸家の床下等に於ても皆此の難に遭へりとの事なり。當小ハツ林區としては龜裂の被害最も多く、其の他は瓦の墜下及び家屋の傾斜せる程度にして倒潰せるものは更になかりき。

東平區(松山町)

是より松山町東平區に入る、同地方は地盤の關係上か其の中心地帯は被害更になく、戸棚の墾等の倒れたる程度、屋根瓦の落下さへ無し。但し松山町に接する地帯には多少の被害を蒙り、土藏の壁土落ち、石塔籠の轉倒せるもの數本を見受けたり。

松山町

同町の被害の最も甚しき所は本町一、二町目にして、其他多少の被害を受けたる所は町内に散在せるもさしたる事なし。尤も本町一、二町目は坂道にして附近一帯も皆傾斜地なり。松山町は倒壊家屋なく橋梁等皆完全なるも被害を受けたるは大部分土藏にして、住宅と雖も土藏式のもののみ破損せり。又龜

裂は盛土の道路其他貯水池の縁邊等に現はれたるのみなり。正午前常町にて餘震に遭逢せるに最初大砲の如く「ドーン」と西方より地鳴來り約一秒後家屋に振動を來せり。

菅谷村(比企郡)

同村は震央地附近なりし爲か人身感覺到依る振動烈しきとの事なり。同村の被害状況を見るに、住宅より土藏の破損多く倒壊一棟を出せり。而して各戸共皆屋根瓦の一部落下し、殊に竈は各戸毎に破損せり。地割れは盛土の道路上に現はれたる程度にして大なるものなく、井戸水等は殆んど全部濁水となれり。同村はその被害菅谷區第一にして志賀、川島區の順となる。菅谷區に於ては土藏二十棟中十八棟破損し完全なるもの二棟のみなり。又志賀區にては震動中二階より降りたる時負傷せるもの一名ありたりとの事なり。

菅谷區にて最も被害ありし根岸醫院を訪れ調査せるに、同家の露路中にある石燈籠は(臺石丸きもの)北西より南東に倒れたり。又土藏は下方の壁土全部落下し骨棒現はれ居たり。又石垣は崩れ、小なる龜裂も所々にありてその方向は南西より北東に走れり。又畑中の大根は搖れ出されて白き根を半分以上も露出し居たり。

同院主根岸氏の談に據れば、今回の強震襲來の際は始め地鳴が「ドーン」と來ると殆んど同時に上下動の猛烈なるもの來り、漸くにして戸外に飛び出したりとの事なり。而して此の時は未だ上下動止まず

壁土は落ち石燈籠は倒れ石垣は崩れ見るも慘澹たるものなりしとの事なり。同家を辭して同村鬼鎮神社に到る。同神社は境内廣く樹木鬱蒼として茂り、此の間に本社其他數棟の末社點在せり。是等の建造物中倒壊せるものは「コンクリート」造りの棒狀紀念塔にして西方に倒れて破壊しあり。其他同社末社の天王様の一棟西方に倒れたるものありたり。

熊谷町より小川町に到る震災狀況踏査報告

埼玉縣測候技手 吉 本 九 平

本月二十五日熊谷町小川町に至る縣道兩側の震災被害狀況調査の爲め出張を命ぜらる。沿道各村に於ける震災狀況左記の通り報告せん。

大里郡吉岡村マツナ萬吉

同地は吉岡村北端にありて荒川を挟みて熊谷町に接する所なり。而して震災被害の狀況全く見受けられざるに付沿道なる某煙草商に立ち寄りて地震當時の模様を尋ねたるに曰く、地震は急激に強く感じたるも別して被害を受けざりしと云ふ。只不安定なる物の轉倒及壁に小龜裂を生じたる程度にて格別被害を蒙りたる家等もなき由なり。沿道にても全く震災による被害は見受けられざりき。

大里郡小原村

同村地内縣道兩側は一里餘に亘る雜木林なるため震災の模様一向不明なり。小字鹽新田に至り漸く住家ありたる故尋ねたるも壁の小龜裂及墓石の轉倒せる程度にして格別被害なき由なり。道路の片側にありたる墓石を見るに轉倒したるものは一本もなく、只南向きのもの南々東に向を變じ居る程度なり。八

幡神社に至り其の境内を調査したるも石燈籠四墓の内最も不安定に据付けありたる一基のみ南に向ひて
 転倒したる形跡あり。(復舊しあり)

比企郡七郷村古里

同地にて震災に依る被害見受けられざるに依り某荒物商に立ち寄り地震當時の模様を聴取したり。
 同地附近は大砲の如き音響と共に急激なる強き(上下動)振動來りしたため人々は屋外に飛び出したり。
 振動の沈靜すると共に屋内に入り、家内を調査せるも不安定なる棚の物落下し又時計の止り居りたる程
 度にして同字にては格別被害を受けたる家もなかりき。井水の如きも地震直後一時増水せるも數時間に
 して舊状態に復せりと云ふ。又墓石の倒れたるものは多く南に向ひたり。

七郷村西古里縣道の龜裂及石垣の崩壊

同地は七郷村及八和田村の村境にして山の中腹を道路とせるものなり。故に一方は堅き岩石なるも他
 方は土石を以て積みたる脆弱なる土質のため振動甚だしきに依り龜裂を生ぜしものゝ如し。故に龜裂の
 方向も道路の走向に平行して生じ居りたり。然れ共龜裂はかなりの幅員及長さを有し長さものは數間に
 亘りたり。地震後時日を経過したるため車馬往來により龜裂面は埋まり只其の跡を存せるのみ。而して
 附近山野を調査せるも龜裂の存せるが如き所を發見し能はざりき。又道路の南側にありたる高さ五尺餘
 の石垣(玉石)は長さ三間餘も崩壊し居りたり。而して附近は一帶の山野にして人家なきため住家に對す

る被害は不明なり。

比企郡八和田村

村役場に於て震災狀況を尋ねたるも本村にては著しき被害を受けたる模様なく、只据りの悪るき墓石
 の轉倒及壁の龜裂等あり。同村北部にして大里郡男衾村今市に近き小字能増、高見等にては道路に地割を
 生じ又土竈の破壊せるもの等ありたる由。又附近にて被害の著しき所を尋ねたるに大里郡男衾村今市は
 被害甚大なりとの事故同村能増、高野兩字及男衾村今市を調査すべく同村役場を出發せり。

途中同村字奈良梨地内の八和田神社境内を調査せるに石碑及石燈籠數多ありたるも倒れたるものは一
 基のみにして南に向ひて轉倒せる形跡あり(復舊しあり)。他は整然として原形を保てり。又同村字能増
 地内の道路の右側にある墓地にては墓石の大半轉倒し居たるを見たれ共轉倒後手入をなしたるものにし
 て其の方向等は不明なり。附近の人の話に據れば方向は一定ならざるも多くは南に向ひて倒れたる由な
 り。又當字にては土竈の破れたるものありと云ふ(極粗製なるもの)。尙ほ進みて字高見に至りたるに道
 路面の片側に所々地割ありたり。されど此邊一帶は市ノ川の上流にして谷間の如き水田なり。故に道路
 は小堤防の如く積み上げられ、且道路擴張の爲め二、三年前幅員の擴張を施したるものなり。地割を生
 ぜし部分は此地點にして、地割も片側にのみ道路に平行し生じ居り道路を横斷せるものは一條もなかり
 き。

同地は市ノ川水源に近き所にして所謂宿場地の如く縣道（寄居道）の兩側に住家點在せる部落なり、故に縣道の一巡に依り被害狀況を知るを得べし。されど地震後數日を経過したるため其の狀況詳かならざるも縣道の兩側にある排水溝の石垣の如きは殆んど全部動き躍り出したるものゝ如し。土木工夫の手により修理せられ、當時の模様明かならず。又土藏の壁等落下せるもの見受けたるも詳細不明に付駐在所に至りて被害の狀況を尋ねたり。此の附近は他村に比し一番被害多き地なりと云ふ。而して同字は現在戸數九十八戸を有する部落にして各戸共壁の龜裂及小崩落はありたり。中にも土藏の壁の甚しく落下せるもの六戸あり。中にも槇島照喜所有の土藏の如きは全部落下し居りたり。又掘井戸の損傷せるもの湯本氏方外數個あり。而して是等の掘井戸内部の構造は皆な玉石にて積みたるものなり。其他二十戸餘の掘井戸も小破損を蒙りたり。又全戸に亘りて土竈には多少の被害あり、粗製なる土竈（手製）は破れたるもの多し。以上の如く被害は相當ありたるも人畜には異狀なかりき。又道路田畑等には龜裂を認めず。

地震當時井水等にも別段變化を呈せざりき。墓石の轉倒方向は一定せざるも大體南に向ひて倒れたるものゝ如し。

縣北西部利根川南岸震害地踏査報告

埼玉縣測候技手 川 本 彌 七

縣北西部利根川南岸の大里郡下各村の震害狀況を視察するため九月二十五日同方面に向ふ。順路として深谷町の西方町端れより國道を捨て右折し北方に向ひて大寄村戸森に到らんとす。途中大沼（深谷町區内）なる部落あり、今回の強震により同所々在の土管製造工場に建てたる高さ約十五米の煙突（口徑長さ各約一米の土管を順次に築き上げ煙突に副へて地上より上端にまで四本の薄き鐵板にて押へ、其周圍には尙同様鐵板を以て圍ひ上方及び中央部位には五條宛十條の張り綱あり）は地上より三分の二位の箇所土管二個は下緣部（薄き鐵板にて圍ひたる處）を残し墜落、其の上方の土管二個は完全に残り、更に其の最上方二本は下緣部のみを残し墜落崩潰せり。（寫眞參照）

大寄村は今回の震害區域中甚だしかりし深谷町の北方約二軒の地點に在る農村地帯なり。戸森に到りて直ちに土藏の壁の大半崩落、土砂の噴出の跡を目撃せり。

一村民の語る處によれば同部落は、大寄村の他の字よりは被害の比較的甚大なる區域と看做さる由なり。土藏の壁は殆んど全部崩落し田畑、道路等到る處に強震當時の地下水の噴出せし跡今尙ほ歴然たり。

大寄村駐在巡查の好意により左記各所を案内され視察の便宜を得たり。噴水の最も甚だしかりしと云ふ、岡田詮末氏宅を訪へば庭と云はず床下と云はず到る處東南東より西北西に走れる小地割及噴水の跡明瞭に残存せり。噴水當時の模様就いて家人の語る處によれば、噴水繼續時間約三十分及び最も強かりし時には、その高さ一米二にも達し泥水は一時膝を没する程度なりきと。

尙ほ近隣も軒並び四、五戸同様の状況にて一面泥沼の如き觀を呈したりと。噴砂の色は褐色を呈し頗る微細の砂粒なり。戸森區の少しく西方に大字起會あり。同地高田茂平方にても恰も初秋蠶期にて蠶室に火氣を備へ居りしが俄然大震動に見舞はれ蠶棚は火氣の上に倒れかかりあはや火災を惹起せんとせるも家人等により辛じて消し止めたりと云ふ。

起會を後にして西北西に進むこと約二軒を距てたる矢島方面に行く。途中高田富次郎氏方裏手畑中に、幅員約十糎長さ七米にも及ぶ地割あり、東南東より西北西に走る。此邊一帶は前記戸森にて採取せる細砂と同様茶褐色の土砂を多量に噴出しあり。噴出堆積せる土砂中に漏斗状をなせる噴水孔の跡あり、上縁の直径は三十糎、深さ約十五糎を示せり。更に歩を進めて矢島附近に到れば同村部落の南西方にかけて龜裂あり、又處々に噴水噴砂の跡を見受けたり。是等の状況より察するに地割れは戸森方面より矢島の南西方にまで達し居るもの、如し。起會に再び戻りて案内されし巡查に厚く禮を述べ袂別し、一軒餘北方なる八基村に赴く途中農家の壁に龜裂、土藏の壁の落ち屋根瓦の落ちたるものを見受けたり。八

基村字手計に鎮座せる鹿島神社境内に到れば、奉納されたる高さ約一米半の石燈籠の笠臺は、臺石より約三十糎離れて西方に倒れたるのみにて建築堅牢のためか、其他には些少の損傷なく境内にも何等別状を認めざりき。同村々役場を訪れ當時の模様を訊ぬるに小さき地割れ（大なるものとても幅一糎位）は全村に亘りて到る處に生じその主方向は東—西に走れり。又強震直後噴水は約五分間も繼續し最も強かりし時には高さ約〇・八米にも達し多少の砂を伴ひたり。噴出土砂の色は赤、青にして村の東部にては黒色を呈せし處もあり、爲めに同村の掘井戸は全部井水汚濁し、又は乾上がりて使用に堪えず當時飲料水に缺乏を來たせりと。埋積せし土砂を浚つて今後使用するよりは、むしろ吸上げ式ポンプ井戸を新造する方はるかに有利なりと語るものもありたり。尙同村小學校の屋根瓦もかなり損傷を蒙り、役場の西方に當る某酒造家の高さ十二米位（煉瓦造り）の煙突地上より六米位にて西方に倒潰せるを見たり、全村中の墓石は大半西或は東に倒れ、其の數二二六一基に及びたりと。一軒餘北に進みて利根川岸なる中瀬村字向島に至れば、幅員六米なる略東南東より西北西に通ぜる里道上に南より北に走る地割れ多數あり。そのうち最大幅員は約五糎餘に及びたり。同所一帶の地割れよりの噴水は約一時間の長さに亘り夫れに伴ひて噴出堆積せし土砂を驗するに他町村の噴砂と略同様なるもその上面には非常に軽しと思はる褐色泥土にて覆はれ居たり。子供の惡戯して電柱に塗りたる箇所多數ありたるもその乾あがりし跡を視るに恰も稻荷山（此の地方の左官職の用語）の壁に似たり。泥水の噴出後利根川の流水を見たるに一

時は全く半濁水と化せりと村人は語れり。又村の掘井戸は噴砂の爲め埋り其の厚み約二米五より二米七に及び飲料水の不足を來し大不便を感じたりと云ふ。本震に伴ふ地鳴は南方より「ゴ」と云ふ音をなして來たり。墓石は主として東又は西方に轉倒し土藏の比較的小型なるもの、及び新築のものを除外せば全部壁落ち修理に多額の金員を要すと。

同村より南東方へ約三軒進みて新會村に到り役場を訪れて強震當時の状況を訊ぬるに、被害程度は前記の村落と略同程度にして矢張り地割れは道路田畑等到處に見受けられしも全村中、稍大なるもの數ヶ所あり、その主方向は略南より北に走れり。同村役場吏員の語る處によれば同村は噴水約十分間、前記各地と同質同色の土砂を噴出し掘井戸三百個の中百個は使用不能となり、墓石の七割は主に西又は東に倒れ、土藏の壁落ち村社の鳥居は西方に轉倒、而して地鳴は南方より聞えたりと。次いで一村民の案内にて本村としては比較的割れの大きなものと目されし同村東端下新會の堀下なる深谷尾島縣道の東方約百五十米位なる地點へ向ふ。此處には畑の境木三本ありてその間隔約十米なり。そのうち中央の一境木は地割れのため東方に約四〇糎移動せし跡あり。尙案内せし人は語る、同地方の掘井戸をなすとき多くの場合地下約五米にして赤色の砂あり、更に五米八より六米位まで堀下げる時には青味がかりの砂出づるものなりと。

同案内人に厚き謝意を表して歸所す。

比企郡大河村南城山の龜裂及び腰越の 陥没地踏査報告

測候技師 大地 四郎
埼玉縣測候技手 植野 隆 壽

比企郡大河村地内に大龜裂ありと二十六日朝同村役場よりの電話通報により直ちに出發せり。

大里郡大河村は震源地とも目らるゝ地方なるにより寄居町經由の小川町行き電車によらず途中の震害を探查するため自動車上の人となり、大里郡下の吉岡、御正、小原の各村を過ぎ比企郡七郷、八和田を経て小川町に到る。車上しかも颯風先觸れの雨のため視界狭く思ふやうにならず。道路傍の馬頭觀世音碑(供養碑)の倒伏、墓石の二、三倒れしを見たる程度のみなりき。

大河村役場に到り同村収入役武川氏の案内にて直ちに實地踏査をなせり。龜裂の生ぜし地點は小川町より秩父町に通ずる縣道の北方約一軒、比企郡大河村及大河原村の境界にして通稱南城山と稱する二四〇乃至二五〇米の山嶺なり。龜裂は山の尾根に添ふて略南西―北東に向ひ、長さ五十米餘、幅の最大〇・四米餘にして裂罅の最深は〇・四米を示したり、直徑一寸大の松の根はこの頂上の裂罅生成の際にプツ

ツリと切斷せられ生々しき跡を示し松脂を吹き出し居たりき。

山頂より下方に向ひて三つの龜裂線あり山腹に痕跡を印せり。

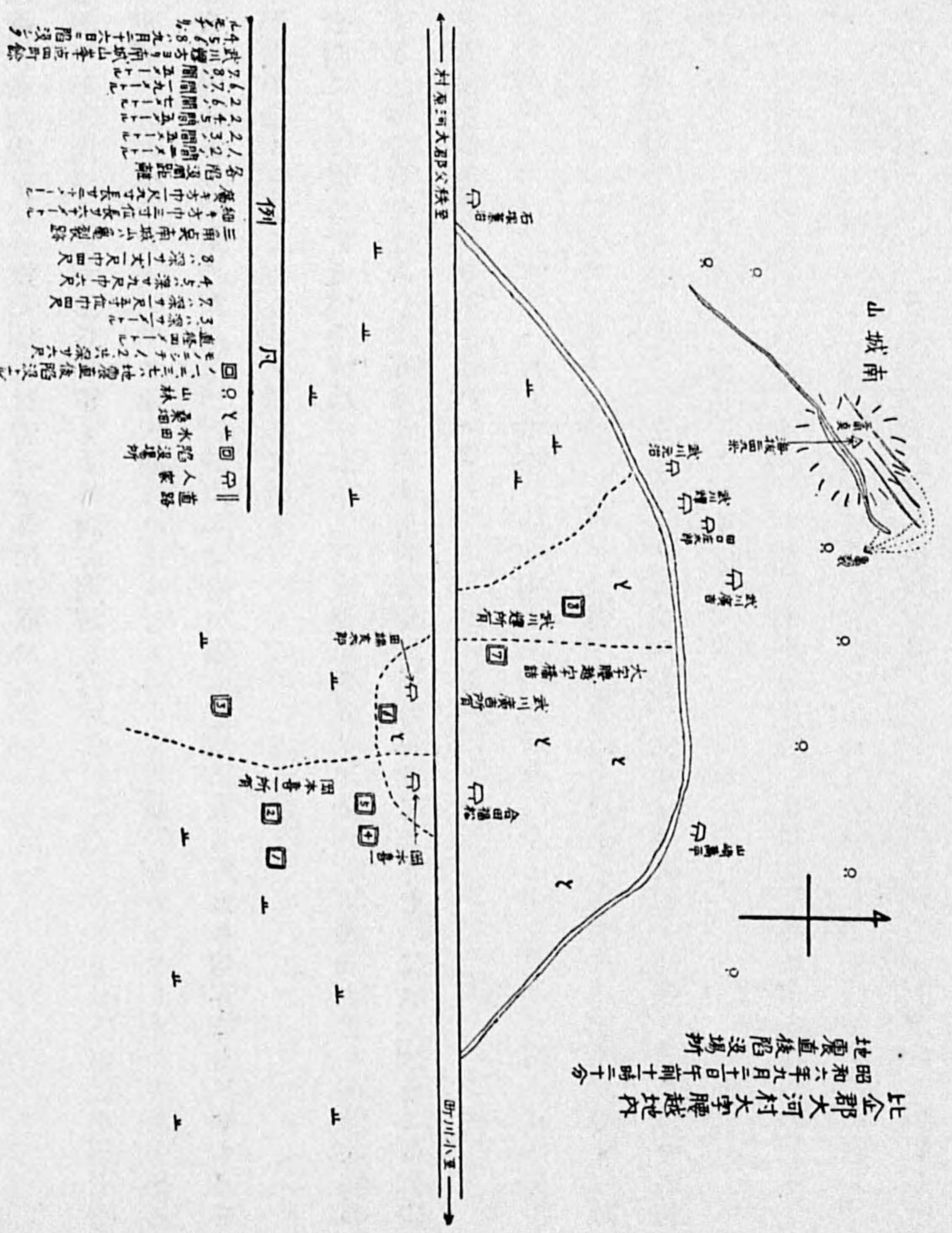
山嶺の南側即ち大河原地域の方は傾斜頗る峻急にして且つ強震當時震動の強かりしたため山嶺の地盤の皮土が剝脱り落ちたるものならん、山の南側には目通り一尺五寸位の松樹數百本生え居たるも松樹根元にありし岩石の振り落されし所一、二箇所ありたり。

武川氏の語る所に據れば地震の際はいつもこの方面(南城山方向)より地鳴が聞え又南城山麓にある同氏宅の井水は強震當時、著しく濁濁せるも近隣の井水は皆異常なかりしと云ふ。(因みに仙元山は同村役場より南東約二・五軒、南城山は西南西約一・二軒の地點にあり)

武川收入役の邸宅より南東方三町餘縣道の南側岡本喜一氏所有の水田中に三ヶ所略々圓形をなせる陷没地あり。大なるものは長徑一丈三尺餘、短徑一丈餘、深さ五尺餘あり。中なる陷没地は略々圓形をなし上記のものより幾分小さき位なり、小なるものは右兩個の地盤より約二尺程高所にあり中陷没地との巨離五間以上あるべく深さは二尺餘にして面積は六尺四方位なるべし。

大中兩個の陷没地を含む約一畝歩の水田は兩個の陷没地に向ひて緩かなる傾斜をなし若し水を撒布せば前記兩個の陷没地に朝宗するが如く思はれたり。強雨降り注ぐ中漸くこの陷没地帯の撮影を了せるも丁度其の際即ち午后一時十一分過ぎ弱震程度の餘震を感じたり。地鳴は西方より來たるが如く恰も極め

比企郡大河村大字腰越地外
昭和六年九月十五日午前十四分
地震直後陷没地帯



て近き場所にて大砲を放ちたるが如き音響を耳にせり。

附近水田一帯は槻川の舊河跡らしく又南城山の南西端附近には浅野セメント株式會社の原石採掘所あり。

以前にも今回の如き陥没の例ありしと云ふ。同所附近は震源に最も近きも被害殆んどなく、石燈籠、石碑等の倒潰も殆んど目に止まらず僅かに小川町にて屋根の傷められしもの二、三見たるのみなり。

同夜の豪雨により更に附近の桑園及稻田中に陥没現象あり。比企郡小川警察署より合計八箇の陥没箇所を發見せりとの通報に接し小川町氣象觀測所主任根岸氏の厚意によりその状況を詳細に知り得たり。参考のため右に陥没地帯圖を附すべし。

秩父郡太田村地内八人峠の地入り地踏査報告

埼玉縣測候技手 川 本 彌 七

九月二十六日朝秩父支所より八人峠方面に大龜裂ありとの(報に接したりと)通報ありし爲急遽同方面の實地踏査を命ぜられ一路秩父支所に向ふ。折柄九州西方海上に殺到せる颱風の影響を受けて早くもその前兆現はれ風雨共に強く臻れり。

同支所に於て萬端の用意をなし小鹿野町方面行の自動車に乗り秩父町より北西方約五料の地點なる松井田にて下車す途中には少しも震害に遇ひたる模様みへざりき。

之れより急坂を登る事約一料半、約三十分を費して八人峠の登口なる太田村大字品澤上原軍藏氏宅を訪れる。

八人峠はそれより北西方に登る事一町位の處に在り、先づ上原氏により地震當時の様を聴くに突如襲來せし地震のため驚愕甚だしかりしためか、何等得る處なかりしも唯南より北に走る鴨居に懸け置きし火繩銃は振り落されしと云ふ。尙同氏邸宅の周圍を見るに南北に連る石垣中の石一箇は落下したるらしく、又土藏の鉢巻邊に小龜裂を生ぜし程度にて何等別狀を認められず。

折柄降り頻る雨を冒し地盤の弛緩可なり著しかりし爲め、充分其目的を達すること能はざりしも左に其の概要を列記せん。

上原氏宅の傍より巾三尺位の山路を登ること約一町餘にして辨天（小字名）に達し、更に北北西に發足すること九町にして漸く聖人岩に達す。村人はこの辨天及聖人岩一帯を總稱して八人峠と云ふ。海拔三百八十二米の處なり。

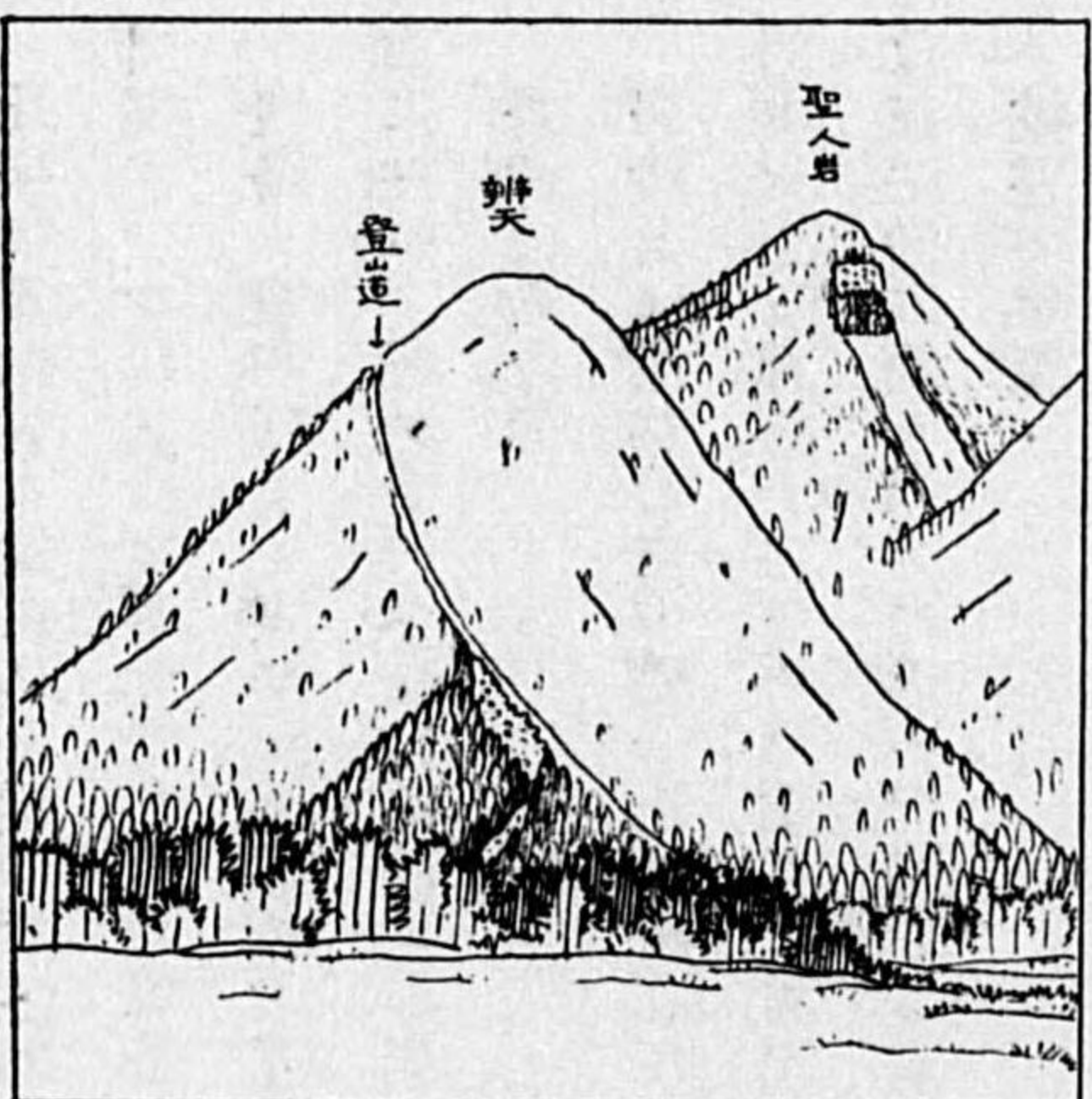
辨天の土砂崩壊の状況を見るに品澤氏の宅より聖人岩に通ずる山路を境として南西方に崩れたるものなり。

崩落せる地盤は一帶に白亜岩より成り、其の上層一面は一尺より四尺位の厚さの粘土より成りて植林せる杉の木密生す。

裂罅の幅員は約七間にして、深さ六間、延長實に約百間に達し墜落せる面積四反歩内外と思はれたり。墜落せる地盤の杉樹は少しも損傷せざりしも裂罅の厄に遇ひし杉樹は數十本あり、多くは目通り七八寸高さ三十餘尺にして根こぎに打倒され相交錯し居れり、又大小多數の岩石は山麓に墜落堆積し、そのうち大なるものは六立方尺位のものもありたり、この山腹崩壊杉樹倒伏による損害見積高は約三百五十圓なりと云ふ。

此の崩れの末端即ち麓に近き處に掘井戸あり地震直後一時濁りて使用に堪えざりしも數時間の後には

全く清澄となりて使用し得られしと云ふ。



この踏查中豪雨のため曩に崩壊せる箇處よりは土砂、小礫の落下甚だしく、危険云はん方なかりき。

辨天の調査を終へ、聖人岩の崩壊場所視察に向ふ、登ること約九町にして聖人岩に達す。

聖人岩の山崩れは頂上より南東に向ひて起りしものにして崩れし部分は山の頂上に近き所にあり。

降雨甚だしく調査不充分なるも大約縦三間半、横二間半厚み二間あり、山麓に墜落せる岩の最大なるものは遠距離と霧の爲判別に苦しむも優に一坪内外の大きさと目測せり。其の

他には別狀を認めざりき。

上記の調査記録によりても明瞭なるが如く、これは全く斷層にあらずして規模の稍々大なる山崩れに過ぎざりき。危険を冒して案内されし上原氏に満腔の謝意を表し一路歸所の途に就く。

比企郡岩殿山震災地踏査報告

埼玉縣測候技手 市川 徳一

同 内田 正作

比企郡高坂村岩殿山に岩盤の斷落ありとの報に接し同山踏査を命ぜられ、九月三十日小職等は直ちに出張す。左に其の概要を記し以て報告とせん。

經路 熊谷町より直接比企郡松山町を経て、夫れより電車によりて高坂村に到る。下車後直ちに岩殿山に向ひ、報告者なる正法寺内中島氏に面接し、同氏の案内によりて詳細に調査するを得たり。

岩殿山の位置

岩殿山は熊谷の南方約十八料にして、今回強震の震央地と稱せらるゝ仙元山よりは、東南東方に當り同山を距る事約十四料の地點にして比企郡高坂村大字岩殿に在り。次に岩盤の斷層と見做されたる地點は正法寺の北々西方に當り、同寺より約數町を距りたる所にして岩殿山麓に起り然も二ヶ所を數へたり。被害の狀況

岩盤の斷層として報告されたるものは高坂村大字岩殿字入山地藉にして實は斷層に非ずして山崩れな

りき。岩殿山麓の一部分の迂り落ちたるものにして山崩れの地帯は口繪寫眞第六十三圖の如く約四十五度の傾斜ある山の裾にして其の麓には幅二間なる灌漑用水路あり、尙ほ此の用水は高さ約五尺の崖によりて山と接觸せるものなり。而して此の山は勿論附近一帯も柔くして粘性ある青白色の岩により成生し、土壤は約一尺乃至二尺程度の厚みを以て全山を覆ひ居るものゝ如し。

今次の地震と共に該山麓の一部の崩落したる跡を視るに、其の落差の最も多き所は一丈にして單に迂りて龜裂を生じたる所にてその幅約一間餘りありたり。此の迂り落ちたる全面積は約五畝歩にして山麓なる二間幅の用水路は之が爲め遂に堰止められ、尙高さ五尺の崖も其の姿を没したり、全面積の迂りの方向は大體北東方にして總て雜木林の生ひ繁れる部分のみなりき。

第二の山崩れは此の地點を距る事約一町餘にして北々西に當る山麓なれ共前者より稍々小規模のものなりき。寫眞第六十五圖に見る如く其の模様は前者の地點と大差なきも、只其の附近一帯は雜草のみ繁り樹木更に無かりき。而して其の迂りの方向は前者と同様北東なり。

次に此處より數町南に當る地點に千手觀音あり、この境内の北側にある高さ約三間の斷崖は東方に崩壊せり。之がため其の崖下にありし間口五間奥行四間の一棟は傾斜せり。幸ひ常住者無きため人畜には被害なきも、崖崩れの爲北側は破壊されたり、而して南側に於ては更に破損なきも、全部傾斜せる爲め居住不可能となれり。(寫眞第六十六圖參照) 又同境内にある石燈籠二箇は、臺石は其の儘なるも順次

上方に行くに従ひ南東方に捻れたるやう見受けたり。寫眞に見るが如く右側のものは其の先端の玉石は南方に落下せり。

次に正法寺附近の被害状況を観るに、他地方に比し概して被害は少きも屋根瓦の落下、石塔の倒れ、及盛土せる道路又は之に類似の地點に於て龜裂を生じたる程度なり。被害の餘り大ならざりしは不幸中の幸なりき。

尙ほ茲に特記すべきは正法寺より數軒下なる新しき井戸にして、震災前に井戸水を求むべく、深さ二十五尺に迄堀り下げ水深三尺を得たるも、此の度の地震により遂に湧水状態となりたり。爲めに再び深さ五尺を堀り下げたるも未だに湧出を見ざることなり。尙ほ此地盤は總て青白色の柔かき岩を以て形成され居るに就き前記の井戸も水底面迄上記の岩なるは勿論のことなり。

左に正法寺内中島氏の談を摘録せん。

観音境内にある徑三尺高さ四尺の天水桶の水は、大正十二年關東大地震の際は溢出を見たるも、今回は更に溢出せず尙十二年の節は家屋の破損も相當ありたるに反し、今回は家屋被害割合に少く却て地盤の小地變遙かに多かりしと云ふ。

又今回の強震並びに餘震襲來に際しては、地鳴に就ては何れも西方より聞へ殊に最初強震の際は夥多の自動車の來るが如き音を以てし、第二回目よりは淺間の噴火の際の如き、或は大砲の如き音に聞へた

りと云ふ。

地鳴が「ドーン」と聞ゆると殆んど同時位に家屋がガタガタと震動せり。又今回は小なる餘震にても崖崩れのみは絶えず有りて非常に危険なりとの事なり。

高坂村としての被害は一般に居宅より土藏の方破損多くして、瓦の落下等は東又は西向の屋根に多く南北向きの屋根には殆んど無かりしとのことなり。

又隣村唐子村神戸(ゴード)にては井水濁り、又田の面より煙らしきものゝ立ち昇るを見たる者ありと語れり。

室蘭	金澤	廣島	濱田	清水	宇和島	松山	新居濱	吳	高知	青森	境	室戸	多度津	徳島	岡山	潮岬	洲本
三七・八	三四・五	三一・一	三一・〇	三〇・九	三〇・〇	二八・〇	二二・八	二一・八	二〇・八	一八・一	一七・五	一七・二	一四・八	一二・二	一二・〇	〇一・九	〇一・八
南東 七六四〇〇	南東 北一四六八〇〇	●南東 北一四七四〇〇	南東 北一四七四〇〇	南東 北一四七四〇〇	南東 北一四七四〇〇	南東 北一四七四〇〇	南東 北一四七四〇〇	南東 北一四七四〇〇	南東 北一四七四〇〇	南東 北一四七四〇〇	南東 北一四七四〇〇	南東 北一四七四〇〇	南東 北一四七四〇〇	南東 北一四七四〇〇	南東 北一四七四〇〇	南東 北一四七四〇〇	南東 北一四七四〇〇
二二・五	三四・八	四三・四	四三・四	四三・四	四三・四	四三・四	四三・四	四三・四	四三・四	四三・四	四三・四	四三・四	四三・四	四三・四	四三・四	四三・四	四三・四
三〇・一	一三・二	二一・二	三五・四	三〇・一	一八・二	一七・〇	一七・〇	一七・〇	一三・六	一四・二	一〇・五	三四・一	一四・四	八・一	一〇・〇	四一・一	五〇・五
西北 二〇七〇	西南 二〇七〇	西南 二〇七〇	西南 二〇七〇	西南 二〇七〇	西南 二〇七〇	西南 二〇七〇	西南 二〇七〇	西南 二〇七〇	西南 二〇七〇	西南 二〇七〇	西南 二〇七〇	西南 二〇七〇	西南 二〇七〇	西南 二〇七〇	西南 二〇七〇	西南 二〇七〇	西南 二〇七〇
一三・〇	一三・〇	一三・〇	一三・〇	一三・〇	一三・〇	一三・〇	一三・〇	一三・〇	一三・〇	一三・〇	一三・〇	一三・〇	一三・〇	一三・〇	一三・〇	一三・〇	一三・〇
七〇七	二四六	六五五	六七三	六九五	六九八	六四八	六〇三	六五三	六〇一	五三七	六五七	五七〇	五四九	四九一	五一八	四四四	四五一

盛岡	和歌山	宮古	豐岡	神戶	秋田	八木	宮津	大津	水津	京都	福井	八丈島	石巻	龜山	津山	仙臺	彦根
〇一・五	〇〇・五	二一・〇	五八・八	五八・五	五八・〇	五七・九	五四・八	五四・六	五四・一	五二・八	五一・八	四七・九	四四・七	四三・八	四二・二	四一・〇	四〇・七
南東 四三〇〇	南東 四三〇〇	南東 四三〇〇	南東 四三〇〇	南東 四三〇〇	南東 四三〇〇	南東 四三〇〇	南東 四三〇〇	南東 四三〇〇	南東 四三〇〇	南東 四三〇〇	南東 四三〇〇	南東 四三〇〇	南東 四三〇〇	南東 四三〇〇	南東 四三〇〇	南東 四三〇〇	南東 四三〇〇
六五・〇	五五・五	三二・一	二四・九	二四・九	二四・九	二四・九	二四・九	二四・九	二四・九	二四・九	二四・九	二四・九	二四・九	二四・九	二四・九	二四・九	二四・九
一・二	五・六	三・〇	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三	二・三
南東 六八六三	南東 六八六三	南東 六八六三	南東 六八六三	南東 六八六三	南東 六八六三	南東 六八六三	南東 六八六三	南東 六八六三	南東 六八六三	南東 六八六三	南東 六八六三	南東 六八六三	南東 六八六三	南東 六八六三	南東 六八六三	南東 六八六三	南東 六八六三
六〇・〇	五九・〇	四四・一	五四・五	五四・五	五四・五	五四・五	五四・五	五四・五	五四・五	五四・五	五四・五	五四・五	五四・五	五四・五	五四・五	五四・五	五四・五
四二九	四三六	四五六	四一四	四一四	四一四	四一四	四一四	四一四	四一四	四一四	四一四	四一四	四一四	四一四	四一四	四一四	四一四

嚴臺	澎湖	恒春	臺東	石垣	臺中	大連	那霸	平原	名瀨	大泊	仁川	羽幌	富江	大邱	父島
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

一八・七	二五・〇	五四・四	三一・一	三〇・九	〇八・七	二四・〇	二八・〇	二二・一	四六・三	四四・〇	三二・五	二六・六	一八・七	一一・一	一〇・五
東一四五八	西三八	南四八	北三八	東三八	西三八	南三八	北三八	東三八	西三八	南三八	北三八	東三八	西三八	南三八	北三八

一七・八	一〇・五	四・四	四・四	二・九	二・九	二・九	二・九	二・九	二・九	二・九	二・九	二・九	二・九	二・九	二・九
------	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

五二・一	一八・五	七・〇	三一・〇	五五・二	五〇・〇	三一・五	三一・三	三一・三	五六・一	四〇・一	四七・五	四七・三	五〇・三	四九・五	一・二
上南	北	東	西	北	東	西	北	東	西	北	東	西	北	東	西

三・二	三・二	三・二	三・二	三・二	三・二	三・二	三・二	三・二	三・二	三・二	三・二	三・二	三・二	三・二	三・二
九二〇	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二	二二二

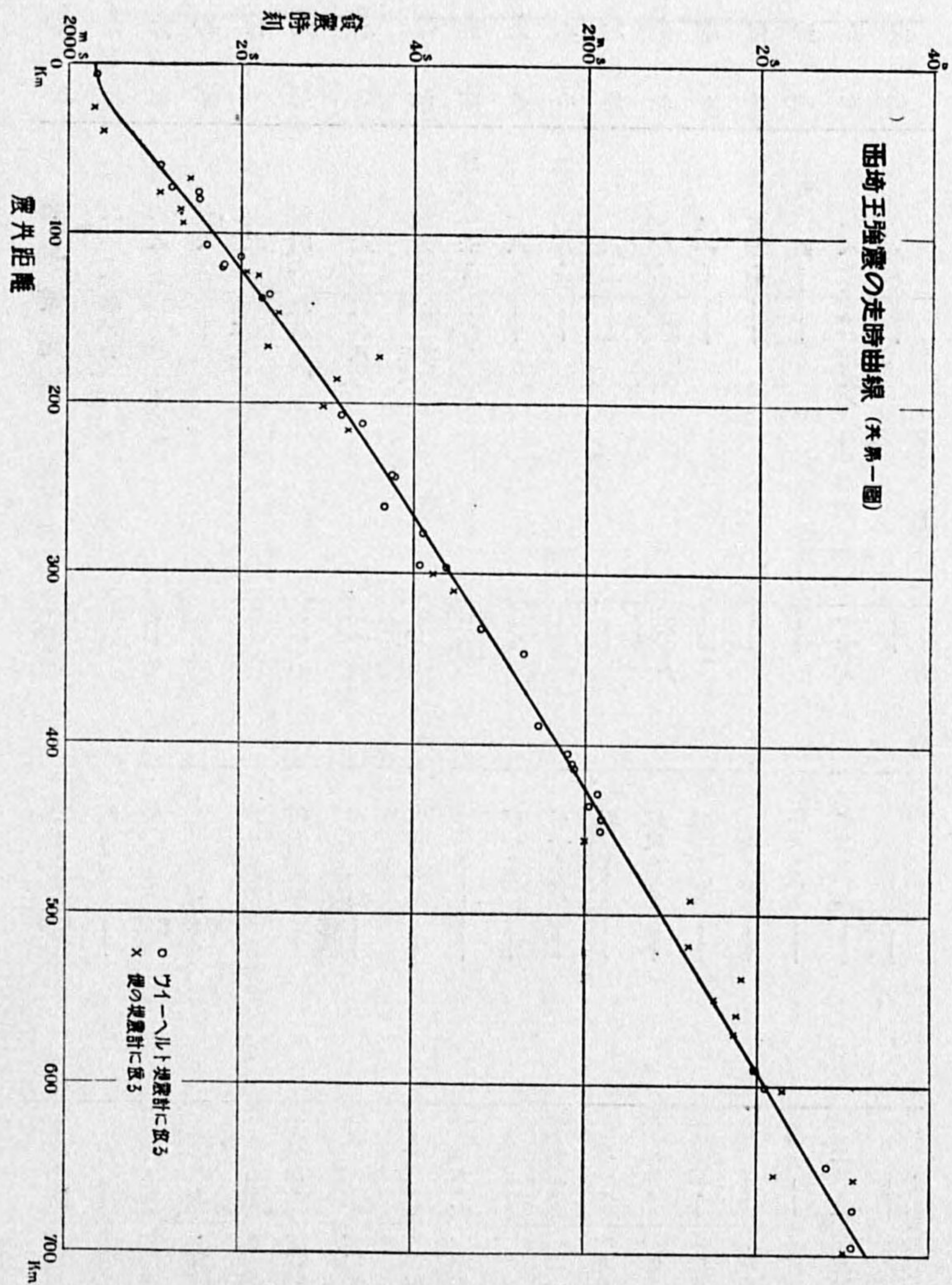
鹿兒	旭川	佐賀	長崎	温泉	鍋路	根室	宮崎	熊本	福岡	福岡支	下關	札幌	釜山	帶廣	浦河	大分	函館
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	----	----	----	----	----	----	----

〇八・四	〇八・〇	〇六・六	〇四・〇	〇一・一	〇〇・四	二二・〇	五五・三	五五・三	五五・三	五五・三	五五・三	四七・八	四六・五	四三・九	四三・八	四三・一	三九・八
北西	西	北東	北東	北東	北東	北東	北東	北東	北東	北東	北東	北東	北東	北東	北東	北東	北東

二・三	四・七	七・五	八・八	八・八	八・八	九・九	九・九	九・九	九・九	九・九	九・九	九・九	九・九	九・九	九・九	九・九	九・九
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

四八・〇	一五・	三六・五	四八・一	一八・二	三一・	一〇・二	三六・五	四〇・	四〇・	五〇・	一五・四	二七・	八・二	二二・	二〇・	四七・	一五・
北西	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北	北

一・四	二・〇	一・四	一・四	一・四	一・四	一・四	一・四	一・四	一・四	一・四	一・四	一・四	一・四	一・四	一・四	一・四	一・四
九五七	八八九	八六九	九四五	九一五	八八三	九四五	八六三	八七四	八六四	八〇三	七九二	九四一	八二八	七三一	七七九	六四八	六四八



各地震度表 (氣象要覽に據る)

震度	
強	弱
<p>強震 (弱キ方)</p> <p>前橋管内) 飯塚、澁川、五料</p> <p>熊谷、前橋、筑波山、柿岡、水戸、(熊谷管内) 岩槻、杉戸、菖蒲、越ヶ谷、栗橋、所澤、飯能、川越、梅園 松山、小川、若泉、玉井、羽生、本庄、名栗、三峯、小鹿野、野上、槻川、越生、倉尾、大柵、中津川、入 間川、豊岡、(前橋管内) 大前、東小川、鼻毛石、太田、藤岡、万場、安中、三ノ倉、谷地、富岡、館林、沼 田、湯原、花輪、草津、下仁田、大津、伊勢崎、(甲府管内) 丹波、日下部、増富、宮本、若神子、谷地、福 地、石和、(宇都宮管内) 佐野、栃木、藤原、足利、矢板、大田原、鹿沼、三好、日光、入湯元、眞岡、鳥山 (水戸管内) 中妻、笠間、瑞穂、上大門、大津、神峯山、鹿島、麻生、江戸崎、龍ヶ崎、眞鍋、石岡、館野、 下妻、下館、眞壁、結城、水海道、境、守谷、取手、(福島管内) 若松、西方、田島、棚倉、富岡、三春、須 賀川、(横濱管内) 葉山、茅ヶ崎、吉野、溝口、鎌倉、都田、(銚子管内) 野田、三島、茂原、風早、姉崎、木 更津、布佐、八街、中、富勢、勝望山、湊、東金、都、佐原、鶴舞、(沼津管内) 曲金、(松本管内) 豊科、福 島、奈川、中土、彦根管内) 坊、(飯田管内) 神ノ原、赤穂、伊那、(東京管内) 品川</p>	<p>弱震</p> <p>追分、沼津、甲府、東京、横須賀、宇都宮、横濱、松本、伊東、銚子、小名濱、大島燈臺、劍埼燈臺、鹽屋 崎燈臺、白河森林、(熊谷管内) 浦和、吉川、浦山、(前橋管内) 桐生、伊香保、新羽、中之條、(甲府管内) 大 原、三富、中野、菅原、銚子、韭崎、神金、落合、(宇都宮管内) 板室、馬頭、(水戸管内) 谷田部、小里、大 子、(福島管内) 川俣、福良、館岩、(東京管内) 羽田、青梅、御嶽、氷川、小河内、(銚子管内) 天津、佐倉、 旭、成東、松戸、片貝、館山、浦安、(長野管内) 北牧、岩村田、峠、春日、上田、和田、(松本管内) 大町、 (飯田管内) 湯川、上諏訪、(岐阜管内) 中津、大垣、白鳥、高須、(高田管内) 小瀧</p> <p>長野、三島、新潟、福島、會津、福井、飯田、清水燈臺、箱根山、木祖森林、吾妻森林、(甲府管内) 上九一 色、陸合、五開、(水戸管内) 松原、(福島管内) 長沼、石川、二本松、郡山、桑折、喜多方、(横濱管内) 湯河 原、高等、(銚子管内) 鴨川、三里塚、勝浦、(沼津管内) 大河内、横割、日原、御殿場、下狩野、宇久須、下 田、(濱松管内) 御前崎、金谷、鎮玉、益津、三倉、金指、大川、河城、二俣、(長野管内) 南牧、別所、菅平、</p>

三六·五四·五	〇五·五五·六	〇五·五三·九	〇四·五二·八	一七·〇三·四八·一	五八·三三·六	五五·二五·八	五三·三三·三	五〇·五九·〇	五〇·〇二·一	四八·二二·三	四八·二二·三	四八·二二·三	四三·一四·四	四二·一四·四	四一·一八·七	三二·四四·一	二九·二二·九	一五·〇六·〇	二一·六〇·七·五·八
南	北	南	西	南	西	南	南	南	南	南	東	南	東	南	西	南	南	南	西
四	二	八	二	四	一	八	二	四	一	八	二	四	一	八	二	四	一	八	二

三六	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
微		微						微	微	微	微								

四四·五九·六	一一·三三·二	〇六·四三·二	一九·〇六·三·七	五〇·二八·〇	四七·四一·三	四二·四〇·七	三八·四八·三	三三·四九·〇	二九·〇五·一	〇七·〇八·八	〇四·〇五·九	〇三·四八·三	〇三·三七·九	一八·〇二·八·六	五八·五五·三	四九·一五·五	四九·一五·五	三〇·〇〇·〇	二一·七〇·七·四·〇
西	西	西	西	南	東	南	西	南	南	南	東	南	東	南	東	南	東	南	東
二	三	七	一	二	三	六	六	二	一	〇	六	〇	〇	一	一	一	二	二	七

三	元	三	三	二	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

三九·二二·四	二四·三九·〇	一四·〇一·八	一四·〇一·五	四四·〇六·三	四三·三一·八	四三·〇一·一	三九·六六·六	二二·五〇·七	一七·〇〇·五	一六·二八·一	一六·二六·九	一五·五五·九	一五·四六·五	一三·二八·〇	五八·三三·二	五二·三〇·七	二一·三〇·七	二一·〇七·〇	
北	西	南	南	西	西	南	南	東	南	東	南	南	西	南	西	南	南	西	北
七	七	二	〇	二	三	七	三	三	二	三	七	二	三	三	七	一	〇	七	七

二四	一三	五	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
五	二	五	五	二	二	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
				微															

〇六·一二·三	五〇·四八·一	〇四·二二·三	〇四·一八·〇	〇三·二七·三	〇三·一七·七	一六·〇〇·三·四·五	五〇·五四·五	四九·一〇·一	三七·五〇·四	三三·〇〇·〇	二九·三三·一	二五·三三·七	一五·二二·〇·六	五五·三三·一	四四·五〇·〇	四三·三六·八	三〇·〇〇·〇	二二·四〇·四·〇·二
南	東	南	西	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南	南
一	二	二	一	二	二	一	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二

一五	三	一	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三

五·六·二八·五〇·六	一〇·〇〇·〇〇·六	一七·二八·一七·一	六·八·二一·五二·五	七·五·一三·五五·一	一·九·五三·〇三·四	八·二·二九·一七·八	五·五·三三·〇〇·九	九·五·〇一·五二·一	九·二·二五·九	一五·〇〇·五〇·八	一〇·二·三三·四四·八	一三·一六·四〇·六·八	一·九·五五·一〇·一	一三·一〇·〇六·一七·七	一三·一〇·二八·〇	一三·一九·五三·七	一三·一七·四〇·三
二八	二七	三〇	二一	二一	二二	二一	二二	二二	二五	二五	三三	三三	三三	二五	二九	二八	
北	西	南	東	南	西	北	東	南	西	南	東	北	南	東	南	西	
上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	
八·五	二〇	一〇〇	二六	二七	二六	二六	二六	二七	二九	三三	三三	三三	二五	二八	三三	三〇	
二弱(弱)	二〇	三	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	
微																	
一四·七·七〇·八·六	一·九·五五·七〇·〇	一五·二·五三·五·六	一三·五五·一一·〇	一五·四八·二九·六	一·九·三〇·一〇·二	一八·三·五五·四·一	二·一九·三六·一〇·三	三·二六·〇九·九·二	三·〇·七五·五〇·六	二·一六·二〇·九	一〇·二·三〇·四·四	二五·〇·一九·四二·七	一四·三三·四一·〇	一六·一三·〇〇·三	一九·三六·二四·八	一·五·五三·一	
二五	三二	三六	二五	三〇	三一	三三	二七	二八	二八	三一	二八	三〇	三三	二六	三〇		
西	北	東	南	西	北	東	南	西	北	東	南	西	北	東	南	西	
上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	
一〇八	二六	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	二七	
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	
微																	

二六·二〇八·三·七	五·五七·一七·七	六·四一〇·三·九	七·〇六·三六·四	二四·四七·二	八·六六·二七·〇	〇·七三·八	三·二八·五	九·一〇·二七·八	二·〇九·四一·六	一三·四四·一九·六	一六·一〇·〇八·三	一八·二四·五五·〇	二〇·五九·四三·一	二二·〇八·二八·〇	二九·四·三三·七	五·五四·三二·九	六·三〇·五七·四
三三	三九	三一	三〇	二八	三一	二九	三三	三三	三〇	二九	三五	三四	三三	三三	三二	三五	
北	東	北	東	南	西	南	東	南	西	北	東	北	東	北	東	北	
上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	
二八	二九	二〇	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	
微																	
二九·三·四〇·四三·〇	一三·一九·四六·五	三〇·八·四四·一·三	一七·四〇·四二·一	一·五〇·七五·五·六	二·二三·〇九·二·三	三·二六·〇九·〇	三·三三·三三·三	一〇·〇一·四四·八	一七·五五·二一·一	二〇·三六·五五·五	四·二〇·九三·九	五·〇五·二九·五	二〇·二七·一七·八	二〇·二七·一七·八	二〇·二七·一七·八	二〇·二七·一七·八	二〇·二七·一七·八
三〇	四一	三四	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	三三	
西	北	東	南	西	北	東	南	西	北	東	南	西	北	東	南	西	
上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	上下	
二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇	
二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	
微																	